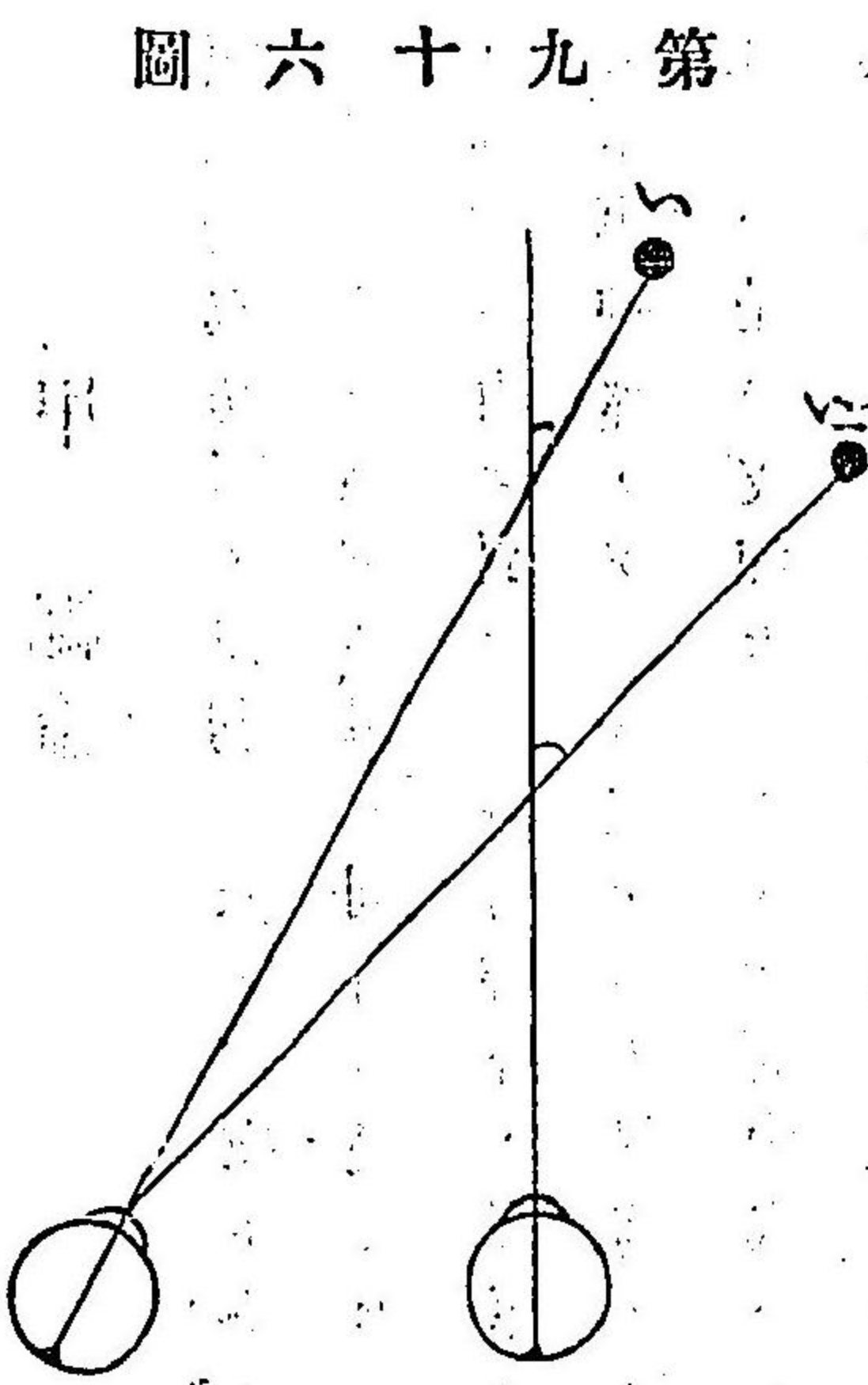


麻痺性斜視

スルモ不全麻痺ニ在テハ猶ホ多少運動シ一定ノ位地ニ達スレバ數回搖擻  
 狀ノ震戦ヲナシテ止ム

(二) 麻痺性斜視 (Strabismus paralyticus) 之ヲ檢スルニハ患者ヲシテ兩眼ヲ以  
 テ一ノ物體第九十六圖(S)ヲ注目セシムベシ但シ精神ノ衝動力ハ何レノ方  
 向ヲ目視スルモ必ズ兩眼同等ニ働ク者ナレバ一眼ニ或ル筋(例ヘバ右眼外  
 直筋)ノ麻痺アルキハ健眼  
 ニ適合スル衝動力ハ患眼  
 ニ對シテハ不充分ナルヲ  
 以テ患眼(右眼)ハ餘儀ナク  
 其位置ニ静止シ只健眼ノ  
 ミヲ以テ物體ヲ目視シ患  
 眼ノ所謂麻痺性斜視ヲ起  
 ス而シテ物體ヲ患筋側ニ遠



着視運動

ガケルニ從テ(S)斜視ノ度ハ益々増加ス今試ミニ健眼ヲ蓋フトキハ患眼ヲ  
 以テ更ニ物體ヲ着視センガ爲ニ其視軸ヲ物體ノ方向ニ轉ズ是ヲ着視運動

圖六十九第

續發斜視

(Einstellungsbeugung) 名附シ此ノ着視運動ニ依テ不全麻痺ニ於ケル患眼ノ  
 執レナルカヲ確診スルヲ得

(三) 續發斜視 (Secondary Abweichung) 是ヲ檢スルニハ前陳ノ如ク手ヲ以テ健眼  
 ナ蓋ヒ手下ニ於テ之ヲ注目スルニ患眼ト同方向ニ向テ數回搖擻狀ノ運動  
 ナシテ斜視ヲ起ス是ヲ續發性斜視ト云フ蓋シ患眼ヲシテ物體ノ方向ニ向  
 ハシムルニハ麻痺筋一定ノ衝動力ヲ要スルヤ必セリ而シテ其衝動力ハ健眼  
 ニ對シテハ比例的強ク働クガ故ニ健眼ハ勿論一層強ク回轉スル者ナリ故  
 ニ健眼ノ續發斜視ハ患眼ノ麻痺性斜視ヨリモ常ニ一層強キ者ナリ

物體位置之誤認

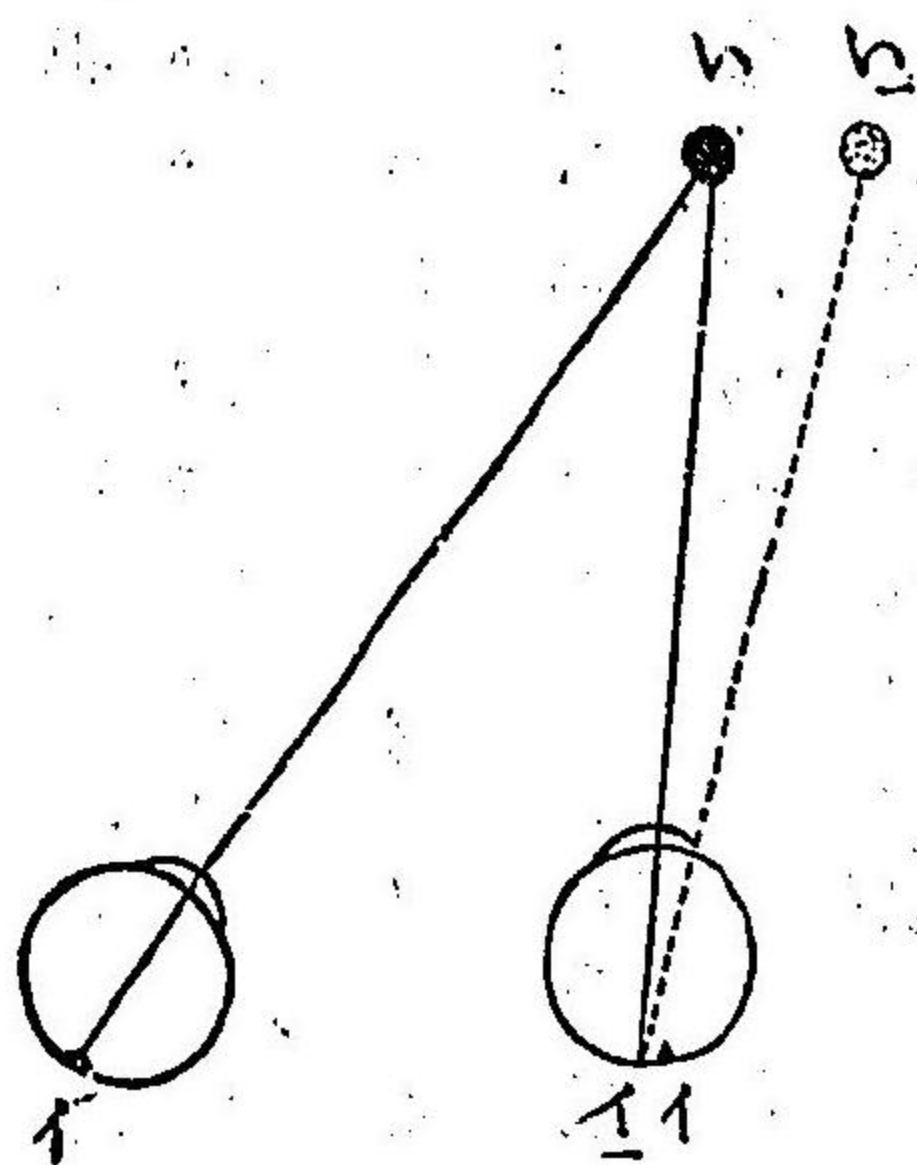
(四) 物體之位置ヲ誤認ス凡ソ物體ノ位置ヲ觀測スルニハ視軸ヲ其方向ニ  
 轉スルニ適合スル衝動力ノ強弱ニ賴ル者ナリ故ニ患筋側ニ指頭ヲ示シ健  
 眼ヲ掩ヒ患者ヲシテ速ニ自己ノ指ヲ以テ是ニ的中セシムルキハ必ズ物體  
 ヨリ多少患筋側ニ外ヅレル者ナリ是レ畢竟患筋ハ比例的強度ノ衝動力ヲ  
 要スルガ故ニ實際ヨリ尙側方ニ在ルガ如ク推測スレバナリ斯ク位置ノ觀  
 測確實ナラザルヲ以テ患者ハ健眼ヲ閉ヤ歩行スルキハ眩暈ヲ起ス者ナリ

(五) 復視 (Diplopia) 是レ眼筋麻痺ノ診斷上最モ緊要ナル症狀ニシテ即チ兩眼

復視

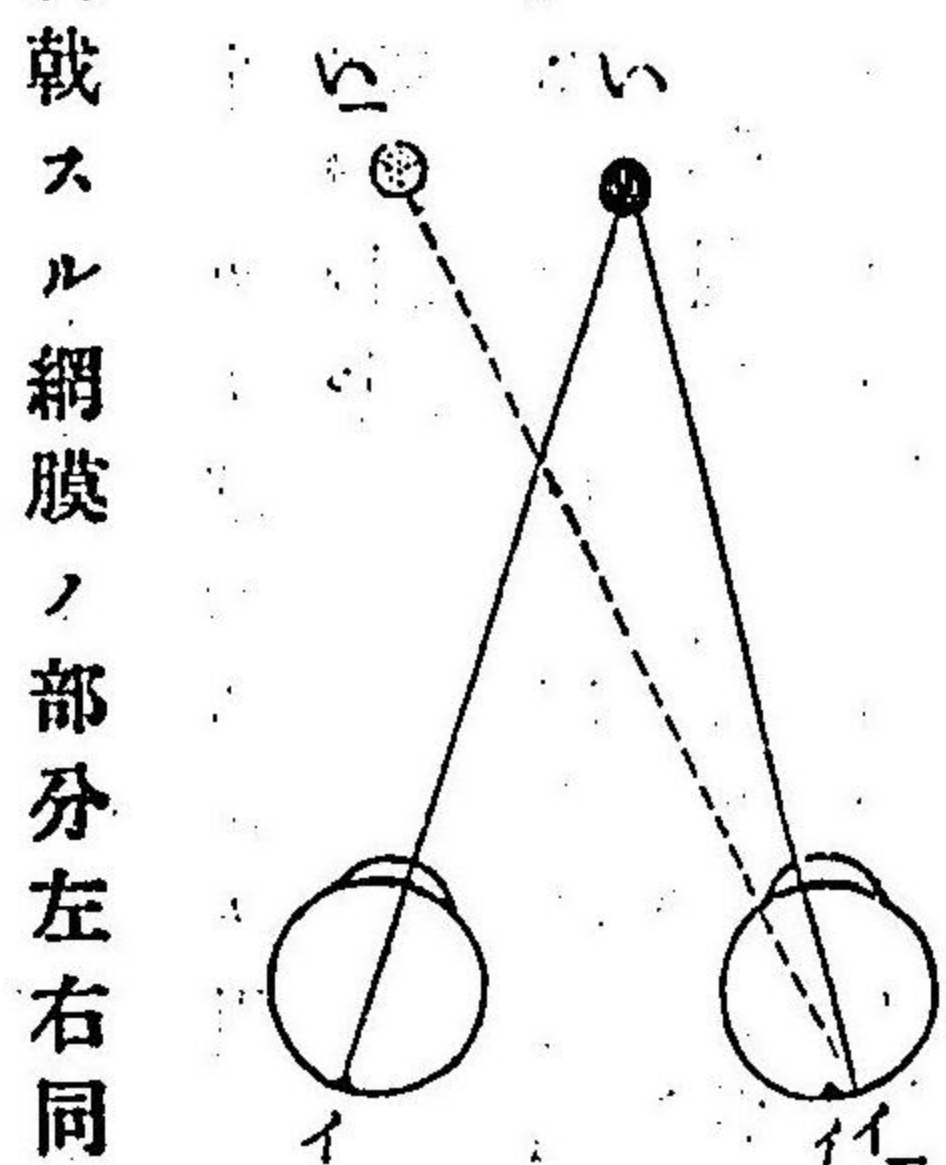
ヲ以テ或物體ヲ見ルキハ皆倍數トナルヲ云フ而シテ假令ハ右眼外直筋ノ麻痺ニ依テ其内斜視ヲ起ストキハ右眼ニ對スル像第九十七圖(イ)ハ右側ニ生

圖七十九第



右眼外直  
麻痺ニ於  
ケル復像

圖八十九第

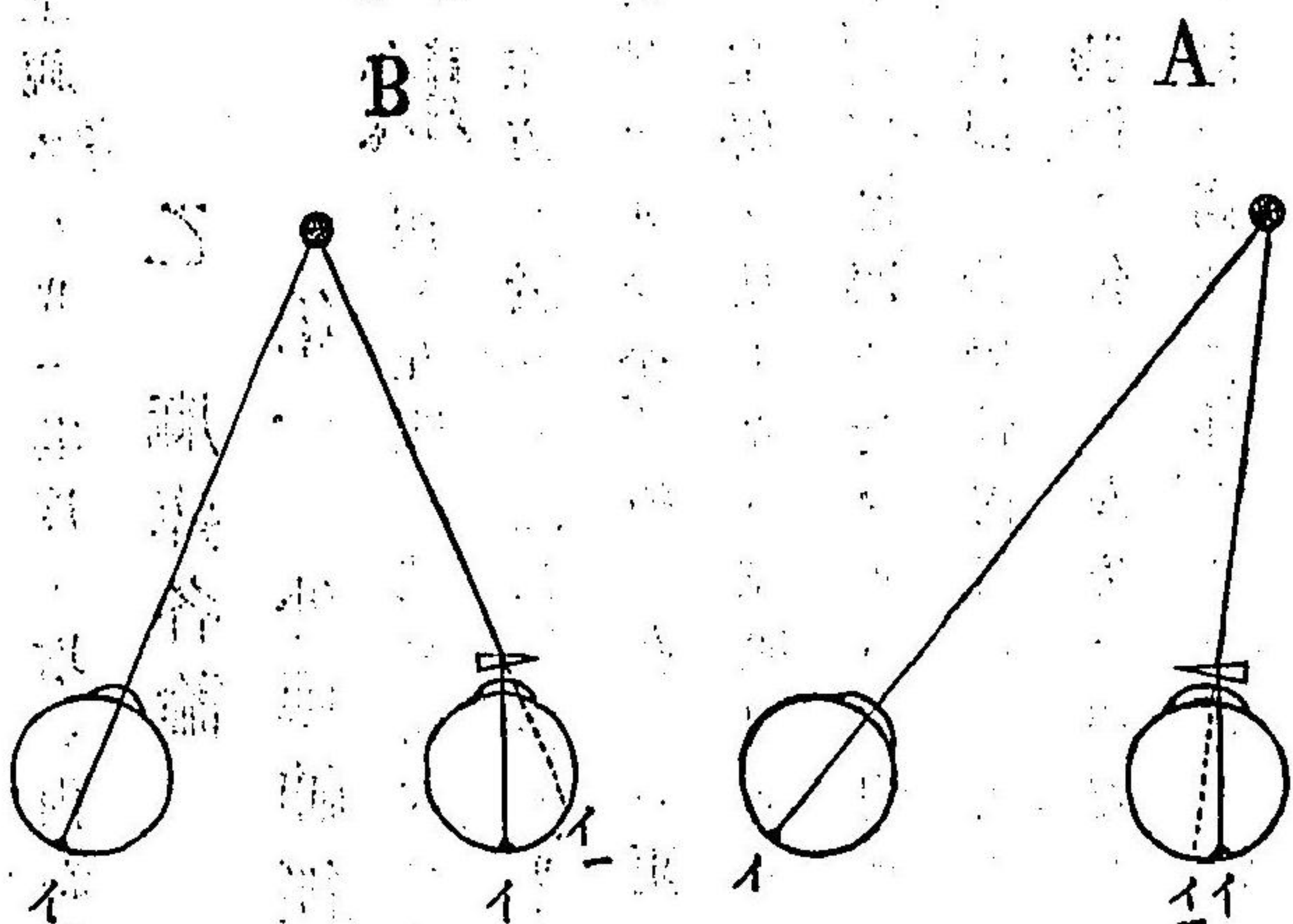


右眼内直  
筋麻痺ニ  
於ケル復  
像

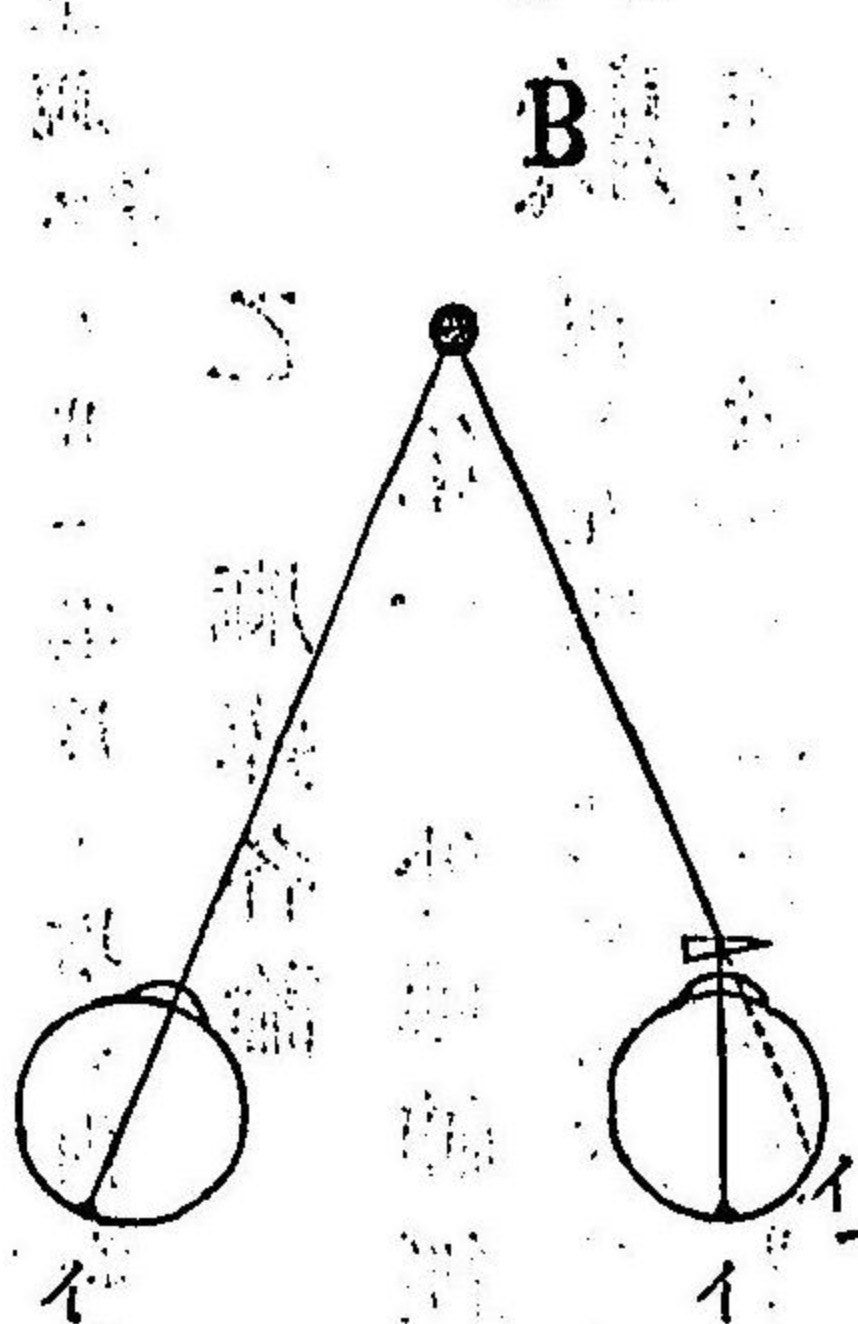
シ左眼ノ像(ウ)ハ左側ニ存シ則チ同側性ナリ然シ内直筋ノ麻痺ニ依テ外斜視ヲ起スキハ反對側ニアルガ故ニ交叉性ナリ(第九十八圖(ウ))該復像ハ物體ヲ麻痺側ニ遠ケルニ從ヒ益々左右ニ隔離スル者ナリ之ヲ合體セシメント欲スルキハ三稜鏡ノ基底ヲ麻痺側ニ向ケ患眼ニ裝フベシ(第九十九圖A及B)此ノ如ク復視ヲ起ス以所ノ者ハ他ナシ兩眼ノ視軸其方向ヲ異ニシ物體ヨリ來ル光線

第九第

圖九



第十第



部ニ外側ニ於ケル刺戟ハ内側ヨリ來ルガ如ク感シ内側ニ於ケル衝動ハ外側ヨリ來ルガ如ク想像シ皆反對側ヨリ來ルガ如ク感ズルガ故ニ或ハ同側性トナリ或ハ交叉性ノ復視ヲ起ス者ナリ(第三十九及八十一頁參照)故ニ適度ノ三稜鏡ヲ基底ヲ患筋側ニ向ケ患眼ニ裝フキハ光線ノ屈折ニ依テ兩眼同一ノ點(イ、イ)ニ刺戟ヲ受ケ複視消失ス○輕度ノ麻痺ニ在テハ復像互ニ尙多少重合スルガ故ニ患者多少ノ之ヲ覺知セザルモ三稜鏡ヲ基底ヲ上方若シハ下方ニ向ケ一眼ニ裝フ或ハ紫色硝子板ヲ以テ左右複像ノ色澤ヲ異ニシ檢スルキハ容易ニ之ヲ認知スルヲ得

外直筋之麻痺

(六) 患者ハ復視ヲ避クガ爲ニ患眼ヲ閉ヤ或ハ物體ヲ復視ノ生ゼザル視野中ニ來サシメ即チ健眼側ニ保チ又ハ頭部ヲ患側ニ轉ズル癖アリ  
 渾テ視軸ハ生理的上方ヲ見ルキハ開散シ、下視スルキハ輻輳ス、故ニ外斜視ハ上視スルキハ其度ヲ増シ、内斜視ハ下視ニ依テ其度ヲ増加ス

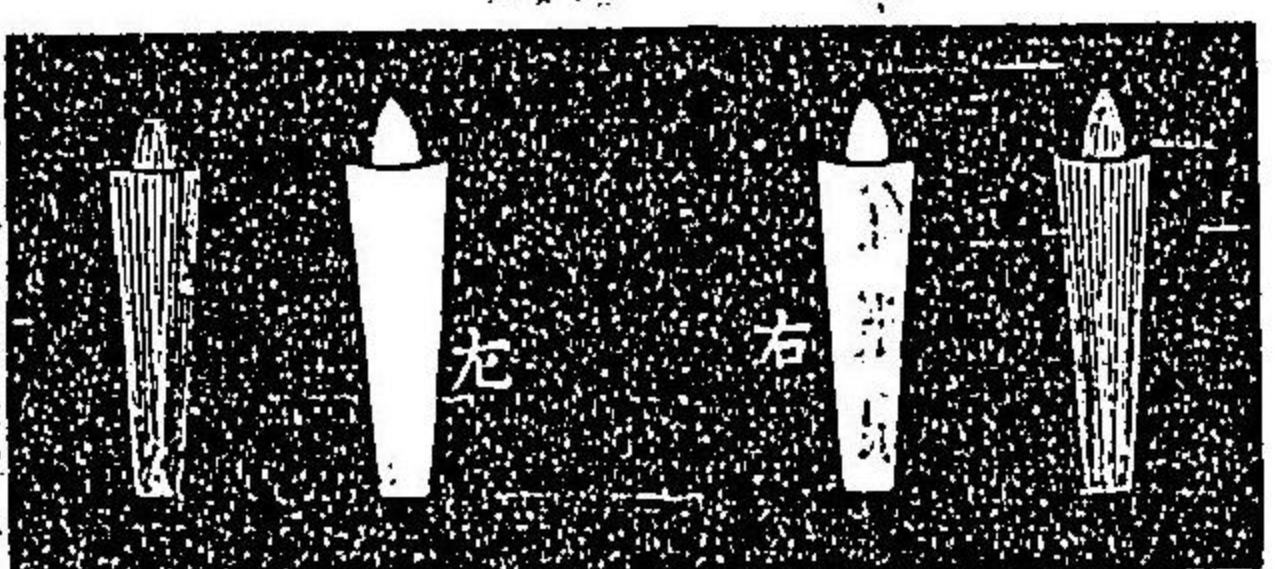
乙 麻痺各論

第一 外轉神經麻痺(外直筋)

**症狀** (假ニ左眼ニ就テ論ズベシ以下皆之ニ倣フ)  
 (一) 左方ニ於ケル運動障害アリ、不全麻痺ニ在テハ尙ホ多少中心ヨリ左方ニ回轉スルモ全麻痺ニ在テハ更ニ回轉セズ  
 (二) 左側ヲ見ルキハ左眼内斜視ヲ起シ、物體左方ニ遠ザカルニ從テ其度増加シ、右眼健眼ヲ掩フキハ左側ニ向テ着視運動ヲナス  
 (三) 健眼ハ續發性内斜視ヲ起ス  
 (四) 物體ノ位置ヲ左方ニ誤認シ  
 (五) 同シ高サニ并立スル同側性ノ復視アリ(第百圖左) 物體ヲ左方ニ遠ザケルニ從ヒテ復像愈々左右ニ隔離ス、是ヲ合體セシメント欲スルキハ左眼(患

内直筋之麻痺

第百圖



眼ニ三稜鏡ヲ基底ヲ外方ニ向ケ装フベシ  
 (六) 患者ハ自然左眼ヲ閉ヤ或ハ頭部ヲ左方ニ轉ズ  
 外直筋ノ不全麻痺ニ在テハ敦レカ患眼ナルヤ是ヲ診定スルニ稍々困難ナルコアルモ物體ヲ強ク左方ニ遠ケルキハ同側性ノ復視ヲ起シ且着視運動ヲ檢スルキハ容易ニ之ヲ區別スルヲ得

第二 動眼神經麻痺(内直筋、上直筋、下直筋、下斜筋、眼瞼舉上筋、調節筋及瞳孔括約筋)

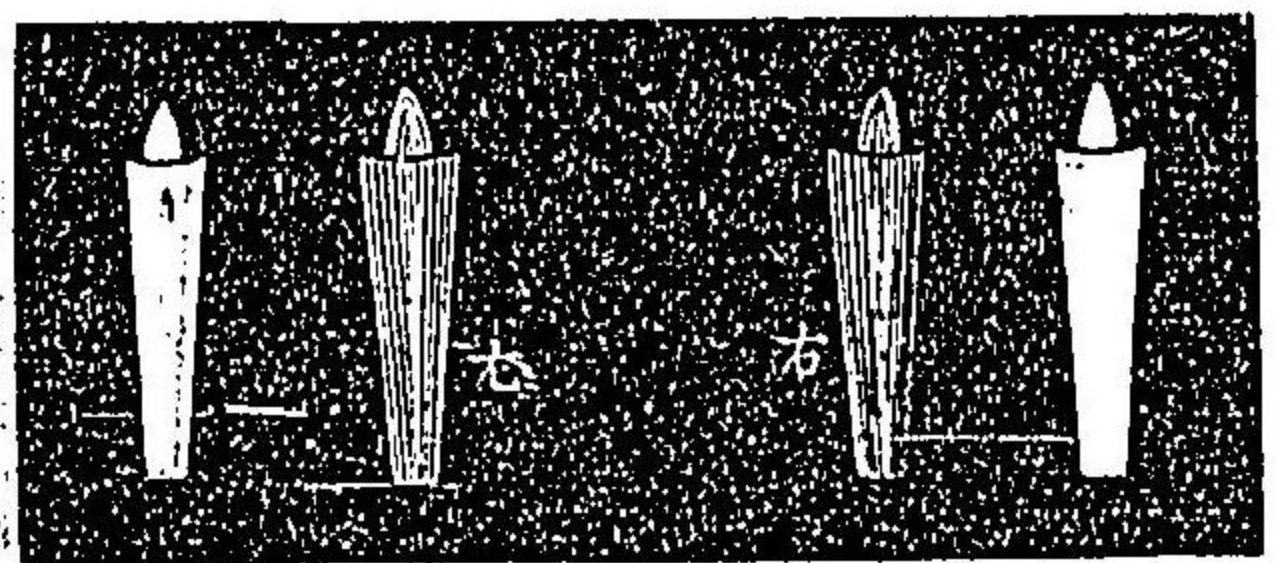
其一 内直筋麻痺

**症狀**  
 (一) 内轉運動障害アリ  
 (二) 右方ヲ見ルキハ左眼外斜視ヲ起シ、物體ヲ右方ニ遠ケルニ從ヒ其度増加シ、右眼ヲ掩フキハ左眼右方ニ向ヒ着視運動ヲナス

麻痺各論、外直筋、内直筋麻痺之症狀

上直筋之麻痺

圖 一 百 第



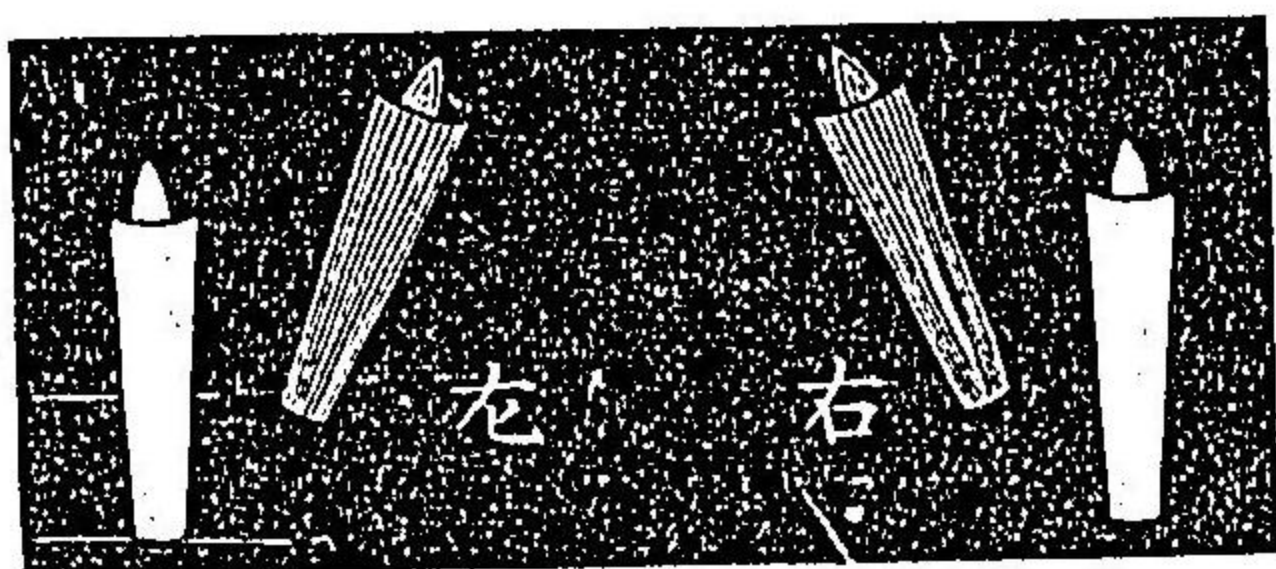
(三) 蔽手下リ健眼ハ續發性外斜視ヲ起ス  
 (四) 物體ノ位置ヲ右方ニ誤認シ  
 (五) 同位置ニ并立スル交叉性復視アリ(第百一  
 圖左、物體ヲ右方ニ遠ケルニ從ヒテ愈々隔離ス  
 左、左眼 之ヲ合體セシムルニハ患眼ニ「プリスマ」ヲ基底  
 内直筋麻痺 ナ内方ニ向ケ装フベシ  
 右、右眼 内直筋麻痺

其二 上直筋麻痺

症狀

- (一) 内上方ノ運動障害ヲ起シ直經線内傾セズ故ニ上視スルキハ外下方ニ止マリ直經線外傾ス
- (二) 外下方ニ斜視シ内上方ニ向テ着視運動ヲナス
- (三) 蔽手下ノ健眼ハ外上方ニ續發斜視ヲ起ス
- (四) 物體ノ位置ヲ内上方ニ誤認ス
- (五) 患者ハ頭部ヲ右方ニ轉シ或ハ物體ヲ左方ニ保ツノ癖アリ

圖 二 百 第



(五) 上視スルキハ交叉性復視アリ、患眼ノ像ハ高位ニアリ、兩像ノ上端互ニ散在シ(第百〇二圖左「プリスマ」ノ基底ヲ内上方ニ要ス  
 (六) 患者ハ頭部ヲ上方ニ傾ルカ或ハ物體ヲ下方ニ保ツ  
 上直筋ノ麻痺ハ他眼筋ノ麻痺ニ比スレバ障害甚シカラズ、何トナレハ吾人通例視野ノ下半部ニ於テ物體ヲ目視ス然ルニ上直筋麻痺ノ障害ハ主ニ視野ノ上半部ニアレバナリ、  
 視軸ノ方向并ニ直經線ニ關スル眼筋例ハ上直筋麻痺ノ障害ハ眼球ノ方向ニ依テ大ニ差アリ、若夫レ眼球外轉スルキハ上直筋ノ回轉軸ハ眼球ノ横徑ト一致スルガ故ニ此方向ニ於テハ上直筋ノ作用ハ専ラ上下ノ運動ニ在リテ直經線ニハ更ニ其作用ヲ及ボサズ、然レモ眼球ヲ内轉スルキハ上直筋ノ回轉軸ハ眼軸ト一致スルガ故ニ此方向ニ於テハ上直筋ノ作用ハ専ラ眼球ヲ其軸ノ周圍ニ回轉セシム、換言スレハ直經線ノ傾斜最モ著シクシテ上下ノ運動ニハ更ニ其作用ヲ

助眼神經麻痺(上直筋麻痺)

及ボサズ、故ニ物體ヲ外上方ニ置クキハ復像愈々上下ニ隔離シ、内上方ニ置クキハ上下ノ隔離ハ甚シカラザルモ其傾向スルコ最モ著シ、是レ下斜筋麻痺ト區別スルノ最モ緊要ナル徴候ナリ

### 其三 下直筋麻痺

#### 症狀

(一) 内下方ノ運動障害アリ、直經線外傾セズ、故ニ下視スルキハ眼球ハ外上方ニ止マリ直經線ハ内傾ス

(二) 外上方ニ斜視シ内下方ニ向テ着視運動ナ

ナス

(三) 手下ノ健眼ハ外下方ニ續發性斜視ヲ起ス

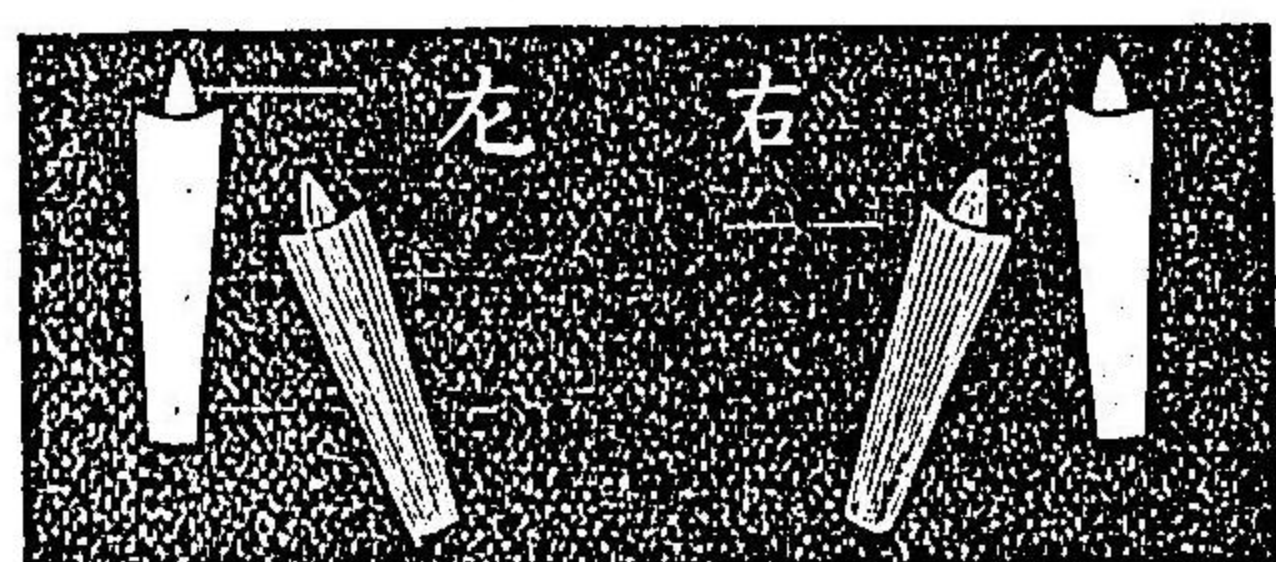
(四) 物體ノ位置ヲ内下方ニ誤認ス

(五) 下視スレハ交叉性復視ヲ起シ、患眼ノ像ハ下位ニ在テ、像ノ上端互ニ輻輳シ(第百〇三圖左、

三稜鏡ノ基底ヲ内下方ニ要ス

(六) 患者ハ頭部ヲ下方ニ傾ケ或ハ物體ヲ上方

圖 三 百 第



右、右眼  
下直筋麻痺  
左、左眼  
下直筋麻痺

ニ保ツ下視スルキハ復像ハ左右ニ隔離シ外視スルキハ上下ニ離レ内視スルキハ患眼ノ像愈々斜傾ス

### 其四 下斜筋麻痺

#### 症狀

(一) 外上方ノ運動欠損シ直經線内傾ス

(二) 内下方ニ斜視シ外上方ニ向テ着視運動アリ

(三) 手下ノ眼ハ内上方ニ續發斜視ヲ起ス

(四) 物體ノ位置ヲ外上方ニ誤認シ

(五) 上視スレハ同側性復視アリ、患眼ノ像ハ高位ニアリテ、其上端散在シ(第百〇四圖左、三稜鏡

ノ基底ヲ外上方ニ要ス

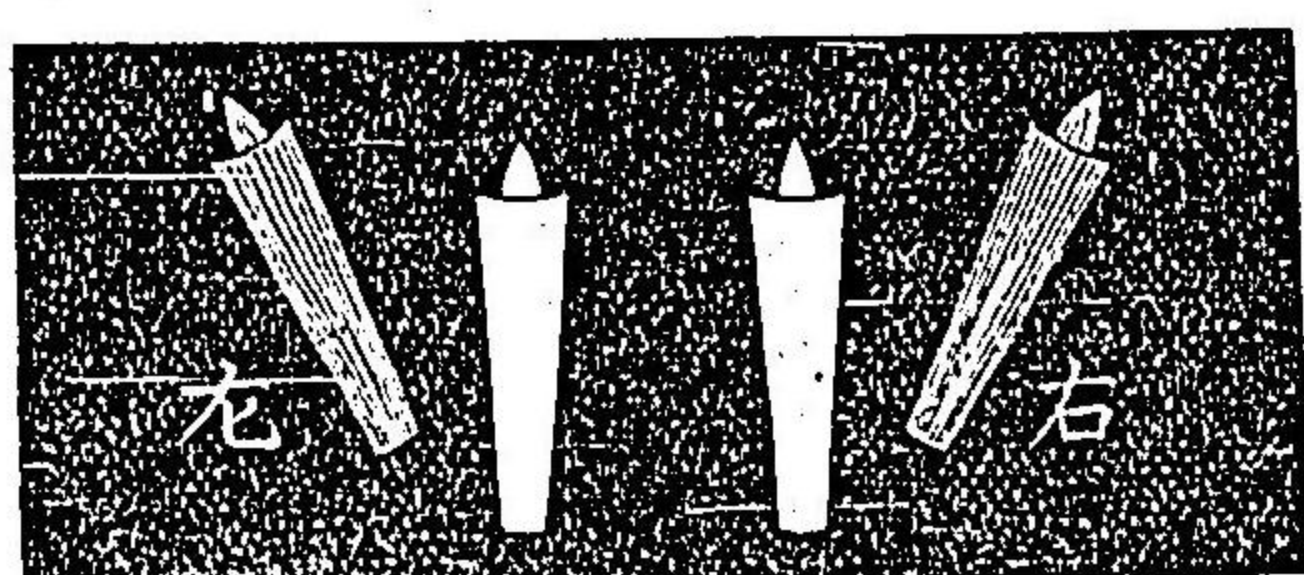
(六) 患者ハ頭部ヲ上方ニ傾ケ或ハ物體ヲ下方

ニ保ツ上視スルキハ復像益々左右ニ別レ、内轉

スルキハ上下ニ隔離シ、外視スルキハ患眼ノ像

愈々傾向ス〇一般下斜筋一個ノ麻痺ハ甚ダ罕ナリ

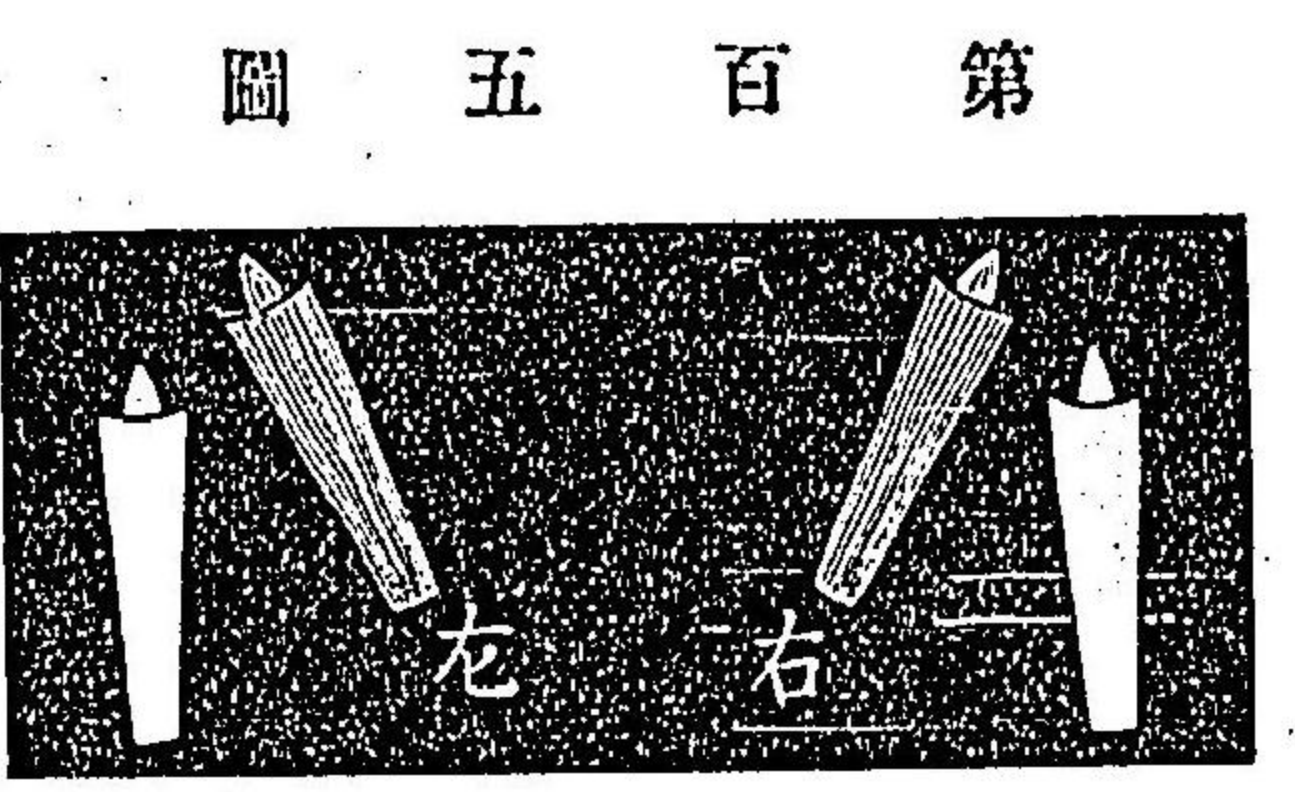
圖 四 百 第



右、右眼  
下斜筋麻痺  
左、左眼  
下斜筋麻痺

動眼神經之全麻痺

動眼神經全ク麻痺スルキハ眼球運動障害ノ他尙ホ上眼瞼下垂、瞳孔散大、調節麻痺等ヲ起シ時トシテハ眼球少シク突出スルヲアリ、是ヲ麻痺性眼球突出 (Exophthalmus paralyticus) ト云フ、是レ蓋シ三直筋ノ弛緩スルニ因ル者ナリ、初期ノ者ニ在テハ前方ヲ直視スルキハ未ダ斜視ヲ起ササルモ直ニ外直筋攀縮ノ外斜視ヲ起ス者ナリ而シテ中心ヨリ内方若クハ上方ニ回轉スル克ハズ、然レモ下方ニ向テハ上斜筋ノ作用ニ依テ多少運動スルモ直線少シク内方ニ傾ク而シテ交叉性ノ復像第百〇五圖アリ、物體ヲ右側ニ偏スレバ復視益々左右ニ別レ、上方ニ偏スレバ患眼ノ像ハ上方ニ隔離シ、下方ニ偏スレバ下方ニ到ル、健眼ヲ掩フキハ眩暈ヲ起シ歩行スル克ハズ、殊ニ上眼瞼ノ下垂ハ大ニ患者ノ困難ヲ來シ、調節麻痺又視力ノ障害ヲナス



第百〇五圖  
右、右眼ニ於ケル全動眼神經麻痺  
左、左眼ニ於ケル全動眼神經麻痺

### 症狀

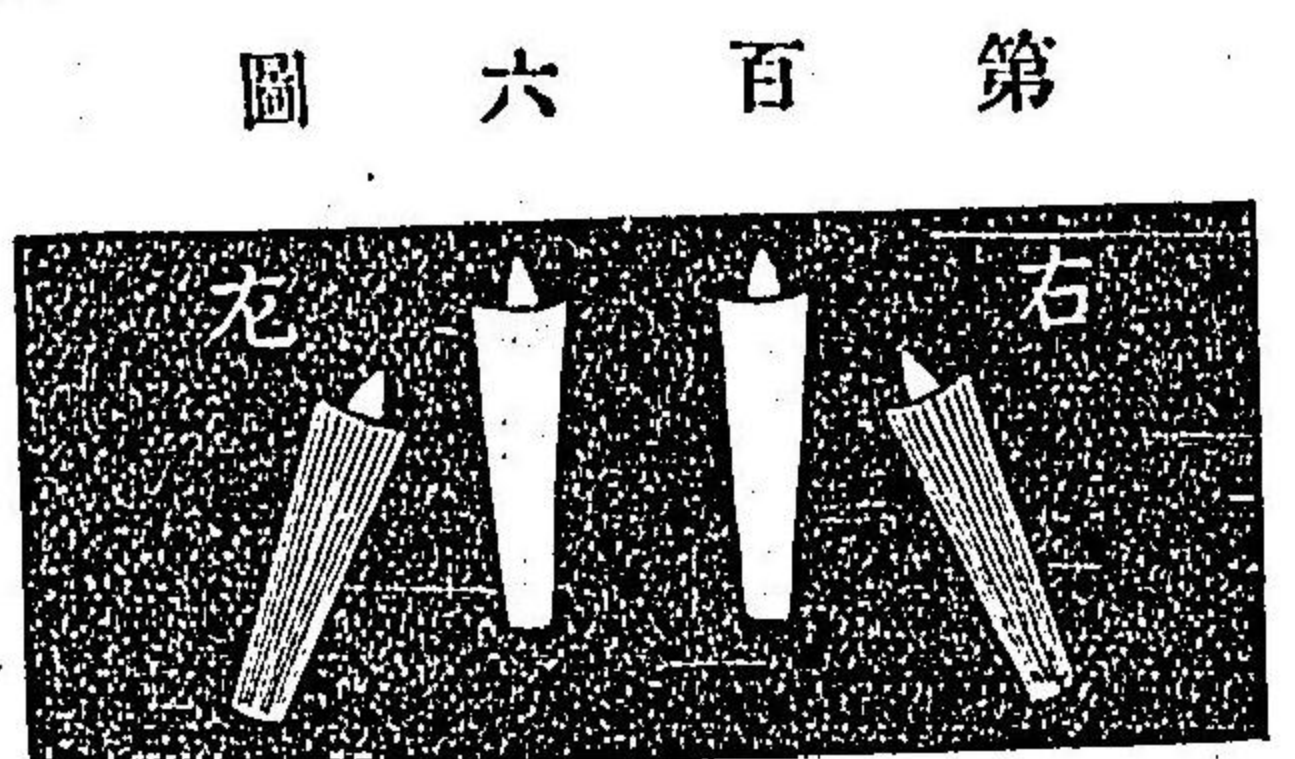
#### 第三 滑車神經麻痺 (上斜筋)

(一) 外下方ノ運動消失シ直線外傾ス  
 (二) 内上方ニ斜視シ外下方ニ向テ着視運動ヲ營ム  
 (三) 手下ノ眼ハ内下方ニ向テ續發性斜視ヲ起ス  
 (四) 物體ノ位置ヲ外下方ニ誤認シ  
 (五) 下視スルキハ同側性復視ヲ起シ、患眼ノ像ハ低クシテ、上端互ニ集束ス (第百〇六圖左、三稜鏡ノ基底ヲ外下方ニ向ケ患眼ヲ掩フキハ復像ヲ合體セシムルヲ得)

(六) 患者ハ頭部ヲ外下方ニ傾ケ或ハ物體ヲ内上方ニ保テ目視スルノ癖アリ

外視スレバ患眼ノ像ハ傾斜ヲ増シ、内視スレバ高低著シクナルモ左右ノ隔離及傾斜ハ益々減少ス

復視ハ主トシテ下視ノ際ニ起ルガ故ニ上斜筋ノ麻痺ハ歩行若クハ階段ノ昇降ニ最モ困難ヲ來ス、後日ニ至レバ反對筋ノ攀縮ヲ起シ視野ノ上半部ニ於テモ亦復視ヲ生ズ、然レモ此際ニハ外斜視ナル

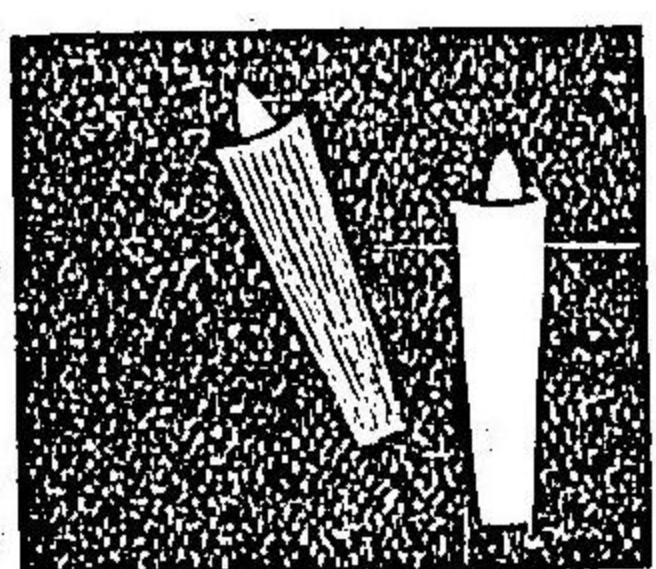


第百〇六圖  
右、右眼ニ於ケル上斜筋麻痺  
左、左眼ニ於ケル上斜筋麻痺

滑車神經麻痺 (上斜筋之麻痺)

ガ故ニ復像ハ交叉性ナリ  
 右眼之麻痺ニ於ケル復像ノ關係ハ圖ニ依テ自ラ明了ナルベシ  
 上記諸筋ノ麻痺ニ於ケル復像ヲ熱視スルニ患眼ノ像ハ必ず患筋生理的作  
 用ニ於ケル視軸及直經線ノ位置方向ト相一致スルガ故ニ患眼像ノ位置方  
 向ニ依テ直ニ何筋ノ麻痺ナルヤヲ確知スルヲ得ベシ○例ヘバ左眼ニ麻痺  
 アリ之ヲ檢スルニ第百〇七圖ニ於ケルガ如キ  
 復視アリトセンカ其像ハ同側性ニ患眼左眼  
 ニ對スル像ハ左上方ニアリテ其上端ハ外方ニ  
 傾向ス、今左眼ヲ左上方ニ回轉セシメ且其直經  
 線ヲ左方ニ傾ケル作用ヲ有スル筋ヲ考フルニ

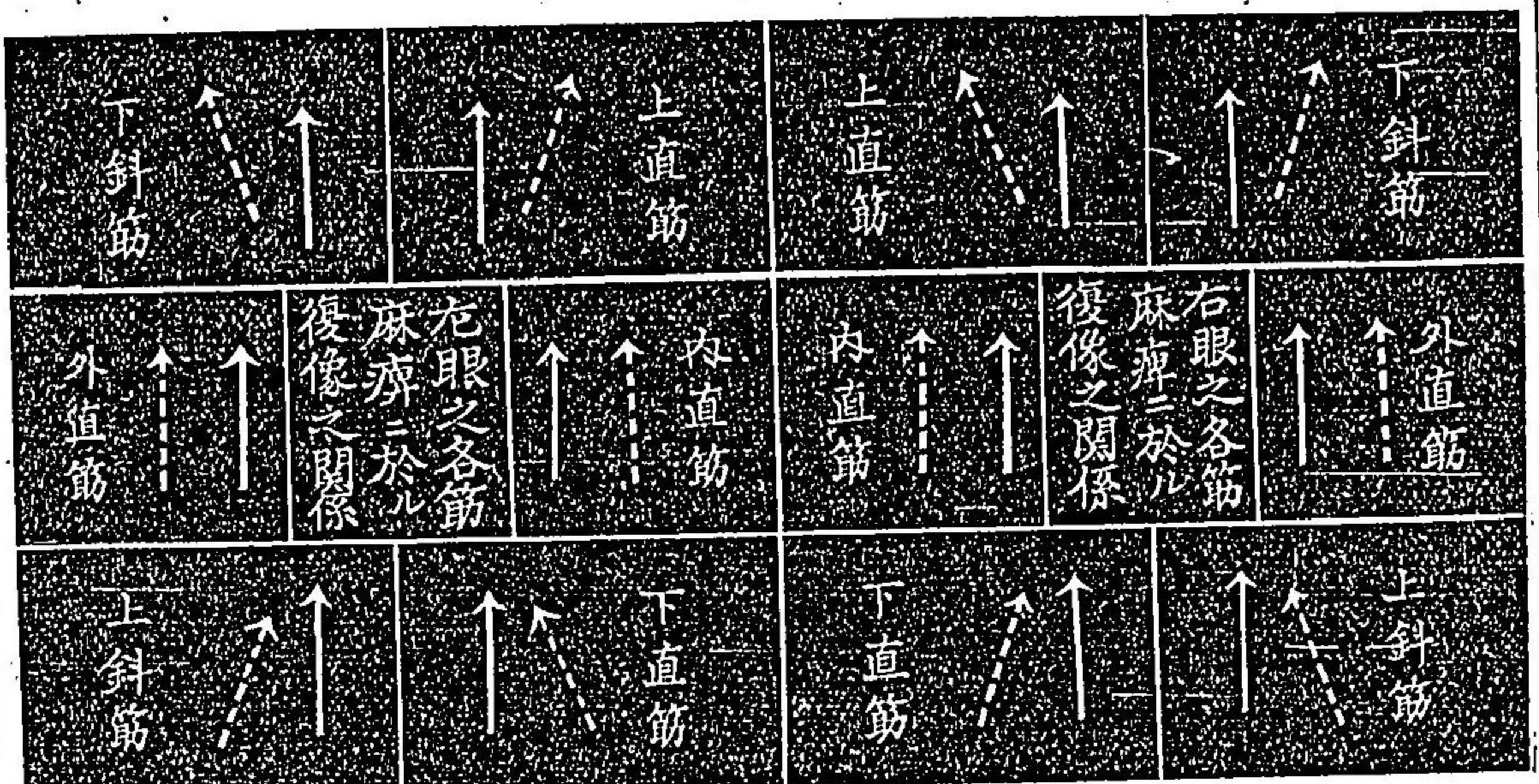
第七百圖



左眼之下  
斜筋麻痺  
ニ於ケル  
復像

即チ下斜筋ナリ、故ニ左眼ニ於テ下斜筋ノ麻痺アルヲ知ル(百四圖左參照)又  
 右眼ニ麻痺アリテ是ト同一ノ復像但シ交叉性ヲ生ズルヲアリ(第百〇二圖  
 右)然レバ右眼ヲ左上方ニ回轉セシメ經線ヲ左方ニ傾ケル者ハ上直筋ナル  
 ベシ、故ニ此際ニハ右眼上直筋ノ麻痺ナルヲ知ル、爾他是ニ倣フ(第百〇八圖  
 參照)

第八百圖



←ハ健眼ニ對スル像  
←ハ患眼ニ對スル像

### 經過及轉歸、眼筋ノ麻痺

ハ或ハ突然發生シ或ハ徐々ニ發生  
 スル者ナリ、中樞ノ疾患ニ起因スル  
 者ハ周圍端ノ麻痺ニ比スレバ經過  
 一般緩慢ニシテ治癒スルコト又甚ダ難  
 シ而シテ全治スル者アリ、半ニ停止  
 スル者アリ、時トシテハ治スルト否ト  
 ナ論セズ、經過中反對筋ノ攣縮ヲ起  
 シ所謂共同斜視ヲ喚起スルコトアリ、  
 故ニ其轉歸四種アリ  
 (一) 麻痺全ク治スルモ少シシ斜視  
 ナ殘スコトアリ、然レバ復視ハ甚ダ視  
 力ヲ妨碍スルガ故ニ兩眼單視セン  
 トスルノ熱望ニ由テ遂ニハ自然相  
 平均スル者ナリ

(二) 麻痺全ク治スルモ反對筋強度ノ變縮ニ陥ルキハ終ニ共同斜視ヲ起ス

(三) 治癒半ニノ反對筋攣縮ヲ來スキハ麻痺ト共同斜視ノ症狀ヲ殘ス

(四) 一筋全ク麻痺シテ反對筋甚シク攣縮スルキハ眼球ハ一方ニ引着セラレ更ニ他側ニ運動セズ、這般ノ者ヲ麻痺性攣縮 (Paralytische Contraction) ト稱ス

**豫後** 概シテ中樞麻痺ハ豫後甚ダ宜シカラザルモ周圍麻痺ハ比例的善良ナリ○動眼神經ノ麻痺ハ近發ニノ且同時ニ侵襲セラレタル筋數ノ少ナキ程佳良ナリ○外轉神經ノ麻痺ハ治スルコト容易ナルモ内直筋ノ攣縮ヲ繼發スルコト亦容易ナルガ故ニ内斜視ヲ起スノ恐アリ、僕麻質斯性及實扶的里性ノ麻痺ハ時機ヲ失セズ治療ヲ施スキハ多クハ治癒ス、煤毒性ノ者ト雖此謾誤腫若クハ骨膜炎等ニ起因スル者ハ又能ク治癒スル者ナリ

**原因** ノ何タルヲ問ハズ最モ屢々麻痺スル者ハ外直筋及上斜筋ナリ、罕ニハ獨リ上直筋若クハ下直筋ノ麻痺ヲ起スモ内直筋若クハ下斜筋ノ單獨麻痺ハ最モ稀有ニ屬ス○原因ヲ大別シテ周圍性ト中樞性ト二種トス、周圍性ノ者ニ在テハ運動神經ヲ直接ニ侵ス者ト眼窩若クハ其近部ノ神經痛ニ

眼

依テ反射的ニ侵ス者トアリ、周圍ノ原因ハ或ハ眼窩内或ハ上眼窩截痕或ハ海綿樣竇或ハ又頭蓋基底ニ生ズル腫瘍慢性骨膜炎、内頸動脈ノ動脈瘤、靜脈竇ノ血栓、腦膜炎滲出物、頭蓋基底ノ破裂若クハ骨折等ニ、特ニ頭蓋基底ノ疾患ニ繼發スル眼筋麻痺ノ如キニ在テハ又同時ニ視神經乳頭若クハ他ノ腦神經例ニハ三又神經等モ侵襲セラル、ナ常例トス、中樞性麻痺ニ在テハ腦ノ種々ナル疾病ニ起因ス、例ニハわろり氏橋若クハ大脳脚ニ於ケル溢血、腫瘍若クハ炎症等ナリ○終リノ者ニ在テハ同側ノ動眼神經麻痺ヲ起シ手足若クハ顔面神經等ノ麻痺ハ反對側ニ在リ、其他腦若クハ脊髓ノ散在性硬結腦水腫、進行性腦基底ノ麻痺等モ亦是レガ原因トナル、脊髄勞、強直性脊髓麻痺ノ如キモ其一症狀若クハ其前驅症トナリテ動眼筋ノ麻痺ヲ惹起ス、而ノ是等ノ麻痺ハ或ハ一時的ニ止マリ或ハ一筋ヨリ他筋ニ轉移スルコトアリ又一時腦ノ貧血若クハ充血ニ因テ輕度ノ麻痺ヲ起シ復視等ヲ訴フルコトアルモ通例原因ト共ニ再ビ消失ス

全身病中最モ多キハ僕麻質斯及微毒ナリ、就中塞胃ハ外轉神經ヲ侵シ微毒ハ動眼神經ヲ侵ス、罕ニハ實扶的里糖尿病、窒扶斯急性關節僕麻質私、中毒例



ハ鉛、酒精、酸化炭素、肉、魚肉等ニ因テ發ス、其他罕ニハ歇斯の里性若クハ先天性麻痺アリ、極テ罕ニハ先天性ニ諸眼筋麻痺スルヲアリ(核性麻痺)一般全麻痺ハ通例周圍性ノ原因ニ依ル者ナリ

療法

主トシテ原因療法ヲ行フベシ、則チ寒胃ニ起因スルキハ近發ノ者ニ在テハ顛顛部ニ水蛭ヲ貼シ、必魯加兒必涅〇〇一乃至〇〇二ノ皮下注射若クハ耶僕蘭日葉ノ浸劑(二)〇乃至四、〇チ一合ノ熱湯ヲ以テ浸出ス、頓服ニ依テ發汗セシメ、水楊酸(一日二、〇乃至四、〇)ヲ投シ、後日ニ至レハ沃度加里(二)〇乃至四、〇、水楊酸曹達(三)〇乃至五、〇)等ヲ與ヘ特ニ溫度ノ變更ヲ嚴重ニ避ケシムベシ又問傳電氣ヲ以テ以上ノ療法ニ代フルモ可ナリ(一)極ハ眼瞼他極ハ頂部〇微毒ニ對シテハ勿論驅微法ヲ行フベシ、而シテ水銀劑沃度加里ハ其特效藥ナリ、中樞ノ疾患ニ在テハ內科的治療ヲ要シ、實扶の里性ノ麻痺ニ在テハ特ニ全身ノ營養ニ注意シ頻リニ滋養物強壯劑等ヲ與ヘ湯治ヲ命シ、顛顛部ニ斯篤里幾尼涅ノ皮下注射ヲ試シ(〇〇〇一乃至〇〇〇三)平流電氣モ時トノ頗ル良効アリ、消極チ眼瞼ニ積極チ他部ニ通ズベシ) 對症療法ニニアリ曰ク練習的療法(Orthopädische Behandlung)曰ク手術的療法

練習的療法

(Operative Beh.)之ナリ

練習的療法トシテハミヘル(Michel)氏ハ先ツ古加乙涅水(五%)ヲ三乃至四滴點眼シ固定攝子ヲ以テ角膜附近ニ於テ麻痺筋ヲ結膜ト共ニ撮ミ該筋ノ方向ニ於テ眼球ヲ二分時間計リ數回運動セシメ之ヲ日々反復シテ終ニ良結果ヲ得タリト、此練習法ニ依テ又同時ニ反對筋ノ攣縮ヲ防グヲ得 三稜鏡ハ管ニ復視ヲ除去スルノミナラス又能ク麻痺筋ノ作用ヲ喚起スル者ナリ而シテ初ハ適度ノ者ヲ與ヘ筋力ノ増加スルニ從ヒテ其度ヲ減ズベシ 〇十度ニ近キ「プリスマ」ハ光線ヲ分色スルガ故ニ、若シ斯ク強度ノ者ヲ要スルキハ其度ヲ切半シテ左右ニ分裝スベシ而シテ基底ハ勿論必ズ麻痺筋生理的作用ノ方向ニ向ケザルベカラズ、例ヘハ外直筋ノ麻痺ニ對シテハ外方、上斜筋ノ麻痺ニ對シテハ外下方ニ向ケ、爾他是ニ準ス〇復像上下内外ニ隔在スルキハ一眼ノ三稜鏡ハ基底ヲ上方若クハ下方ニ向ケ他眼ノ者ハ内方若クハ外方ニ向ケベシ〇六度乃至七度以上ノ「プリスマ」ハ其重量ト分色作用トニ依テ永ク其使用ニ堪ヘズ 上記ノ關係及視軸ノ方向ヲ變ズルニ從ヒ種々復像ノ距離ヲ異ニシ一定ノ

「アリスマ」ヲ以テ悉ク復視ヲ矯正シ克ハザルニ因リ患者其効用ヲ感ズルコト  
甚ナク爲ニ其使用ヲ持久スル者甚ダ罕ナリ○姑息的ニ復視ヲ除去セント  
欲セハ不透明ノ眼鏡ヲ佩用セシムルモ可ナリ

手術的療法

前陳ノ療法ニ依テ充分豫望ノ成績ヲ得ルモ尙ホ多少斜視及復視ヲ殘スル  
ハ外科的ノ手術ヲ施スベシ  
地平面ニ於ケル僅三四密迷ノ運動欠損ニ在テハ先ヅ反對筋ノ腱斷法ヲ施  
シ而ノ後健眼ノ内直筋若クハ外直筋腱斷シタル患眼筋ト同名ノ筋腱斷術  
ヲ行フベシ然レモ運動缺損五乃至六密迷ヲ超ユルキハ麻痺筋ノ前轉法ヲ  
要ス斜視手術參照○鉛直面則チ上方若クハ下方ニ斜視スルキハ健眼ニ於  
ケル患筋ト同名ノ筋ヲ切斷シ強度ノ者ニ在テハ尙ホ反對筋ノ切斷ヲ要ス

○斜筋ニハ決ノ手術ヲ行フベカラズ  
總テ外科的ノ手術ハ麻痺古疾トナリ全ク停止シタル後ニアラザレバ決ノ  
行フベカラズ如何トナレバ若シ之ヲ匆卒ニ施スキハ最初ハ成績善良ナル  
モ後日ニ至リ不充分トナリ或ハ尙ホ恐ルベキハ若シ術後ニ至テ麻痺恢復  
スルキハ反對ノ方向ニ於テ斜視ヲ繼發スレハナリ

## 第二章

### 眼之連帶偏依及眼球震盪症

#### 第一 眼之連帶偏依 (Deviation conjugue)

本病ハ動眼筋ノ痙攣若クハ麻痺ノ結果ナリト雖モ痙攣ハ素眼病中最モ罕  
ナル疾病ノ一ニ恐ラシハ決ノ特發スル者ニアラズ只或ル腦病ノ一症狀  
トナリテ來ル而已是レニ反シテ其麻痺ハ比例的多シトス而ノ一方ニ於ケ  
ル兩眼連帶的運動障害ハ種々ナル腦病ノ緊要ナル症狀ニシテ是ヲ一眼ヅハ  
檢スルキハ猶内直筋ハ能ク收縮スルコトアルモ兩眼同時ニ檢スルキハ譬ヒ  
動眼神經ハ他ニ異常ナシト雖モ内直筋ヲ收縮セシムル克ハズ故ニ兩眼共  
ニ孰レカ一方ニ偏依スル者ナリ○**原因**ハわろり氏橋ノ疾病ニシテ就中  
連帶運動ノ缺如スル方側ニ在リ蓋シテふゐるれ (Foville) 氏ノ説ニ依レバわろ  
り氏橋ノ兩側ニ於テ同側ノ外直筋及反對側ノ内直筋ヲ支配スル共有中樞  
アット、あいははるすと (Michlors) うゐるれ (Wernicke) 氏等ハふゐるれ氏ノ説  
ニ同意ヲナセシモ此中樞ヲ外轉神經核部ニ移シ之ヲ解剖的ニ證明セリ此

中樞ニ疾患アルキハ即チ兩眼共ニ反對ノ方向ニ偏依ス○大脳ノ疾病ニ於テモ亦兩眼ノ偏依ヲ起スモ是レ通常患部ト同側性ニシテ麻痺シタル手足搐搦痙攣等ノ刺戟症ヲ呈スルキノミ反對側ニ偏依スルコトアリ此大脳病野ノ反對側ニ於ケル眼球ノ運動障害ハ甚ダ罕ナル者ニアラズ而シテ多クハ眼球ノ震盪症ヲ兼ネ且患者ハ頭部ヲ健側ニ轉ジテ視ルノ癖アリ○從來ノ實驗說ニ依レバ眼球偏依ヲ呈スル四疊體ノ疾病ハわだみやく氏ノ說第百八十四葉ニ一致スル局部診斷上價値アル所ノ固有ノ症狀ヲ呈セズト

## 第二 眼球震盪症 (Nystagmus)

眼球震盪症ハ名稱ノ如ク眼球常ニ一定ノ速度ヲ以テ自ラ震盪スル疾病ニシテ其震盪ノ方向ハ通例地平線ノ方向ニアリト雖モ罕ニハ眼球回轉シ極メテ罕ニハ上下ニ振盪スルコトアリ而シテ多クハ一定ノ方向ヲ目視スルキハ運動大ニ緩徐トナリ或ハ全ク静止スルコトアリ睡眠中ハ全ク止ミ興奮スルキハ大ニ旺盛シ且發作性ノ者ハ突然振盪ヲ始ム

本病ニ於ケル視力ノ減衰ハ規則トシテ存スル者ナルモ屢々尙ホ尋常ノ業務ヲ取り或ハ讀書等ヲ爲スニ足ル時トシテハ患者故意ニ頭部ヲ眼ノ震盪ト

反對ノ方向ニ動シ以テ障害ヲ代償セントナシ試ミル者アリ○近發ノ震盪症ニ在テハ物體轉倒シ眩暈嘔吐等ヲ起スモ先天性若クハ幼時ニ發シタル者ニ在テハ更ニ是等ノ困難ヲ感ゼズ

## 原因

未ダ充分詳カナラズ本病ノ幼時ニ發シ且角膜翳先天性白內障弱視小眼球脈絡膜缺損白皮斜視等ヲ兼ヌルハ吾人常ニ經驗スル所ナリ總テ上記ノ場合ニ於テハ着視力ノ缺損ガ本病發生ノ主ナル原因ナルガ如クト雖モ實際上先天性若クハ極メテ幼稚ノ時ニ發シタル弱視ニシテ震盪症ヲ起サハルコト多ク之アルガ故ニ着視不能ノミヲ以テ本病發生ノ原因トナスベカラズ而シテ恐ラシクハ内直筋外直筋等ノ不全作用ニ由ル筋力ノ不平均ハ尙ホ本病ノ發生ヲ幫助スルコトハ殆ンド疑ヲ容レズ而シテ採鑛夫ハ往々本病ニ罹ルコトアリ是レ採鑛夫ハ微明ノ燈火ヲ以テ非常ニ頭首ヲ傾ケ常ニ上方ヲ眺メ業ヲ取り又眼球強度ノ外轉ヲナスガ故ニ外直筋ハ速ニ疲勞シ業務ニ適スル眼球ノ位置ヲ保ツニハ勢ヒ止ヲ得ズ搖擗狀ノ痙攣ヲ起シ從テ他眼モ連帶的ニ運動ヲナスガ故ニ遂ニ震盪症發生スル者ナラン○腦ノ散在性硬結ハ手腕ノ振戦ニ於ケルガ如ク又眼球ノ振戦ヲ起惹スル者ナリ

### 療法

震盪症ハ一般難治ノ疾病ナルモ、時トノハ練習的療法ニ依テ治愈スルコトアリ、其方法ハ眼球ヲシテ振戦ノ最モ弱キ位置ヨリ漸々着目ニ習慣セシムルニアリ、然レモ若シ屈折異常アレハ素ヨリ先ヅ之ヲ整定シ、角膜若クハ水晶體ニ混濁アルキハ其適當ノ所置ヲ施シ可及的視力ヲ改善セシメザルベカラズ

グービ氏 (Bilau) ハ斜視ヲ兼有スル者若クハ時機ニ依テハ斜視ヲ有セザルモ常ニ攀縮スル筋ノ腱斷術ヲ稱用セリ。余ハ内斜視ヲ兼有スル鉛直線ニ於ケル右眼ノ震盪症ニ内直筋腱斷術ヲ施セシニ斜視振戦共ニ全ク治愈セラルヲ實驗セリ

平流電氣「ストリヒニン」皮下注射藍色眼鏡等モ亦良効ヲ奏スルコトアリ、然レモ凡テ是等治療法ノ奏効如何ヲ試験スルニ際シ、振戦ノ度ハ年ノ長ズルニ從ヒテ漸々減少シ、加之全ク消失スルコトアルヲ必ズ記憶スベシ

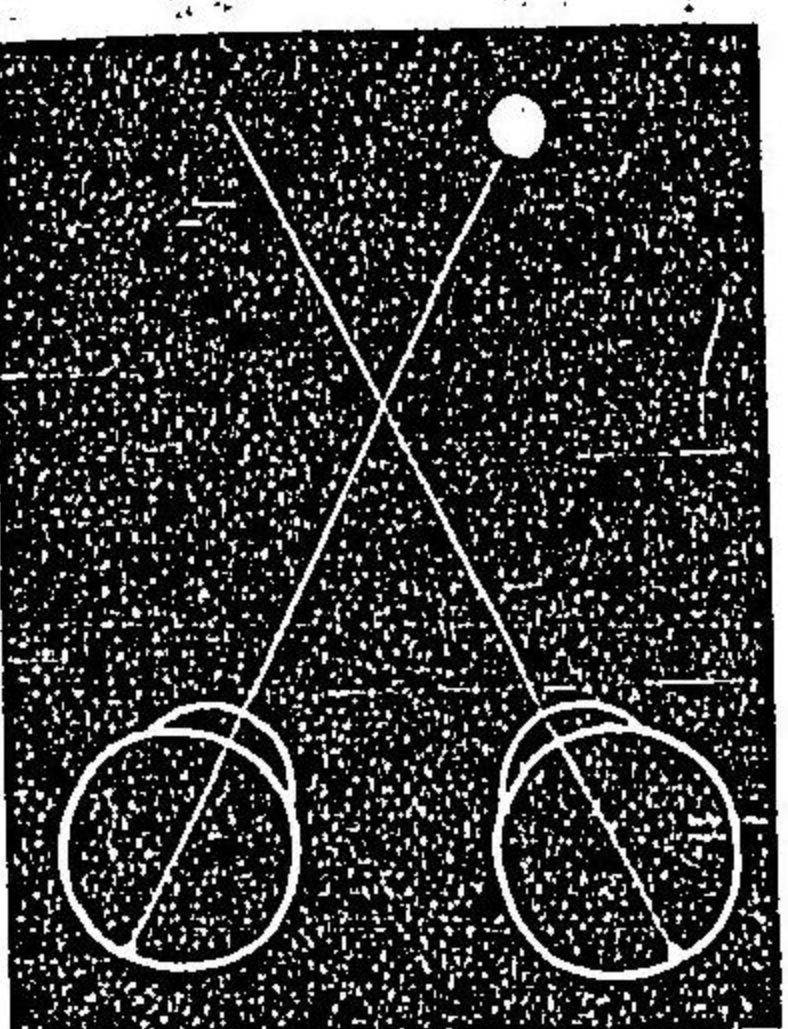
### 第三章

#### 斜視 (Strabismus)

眼

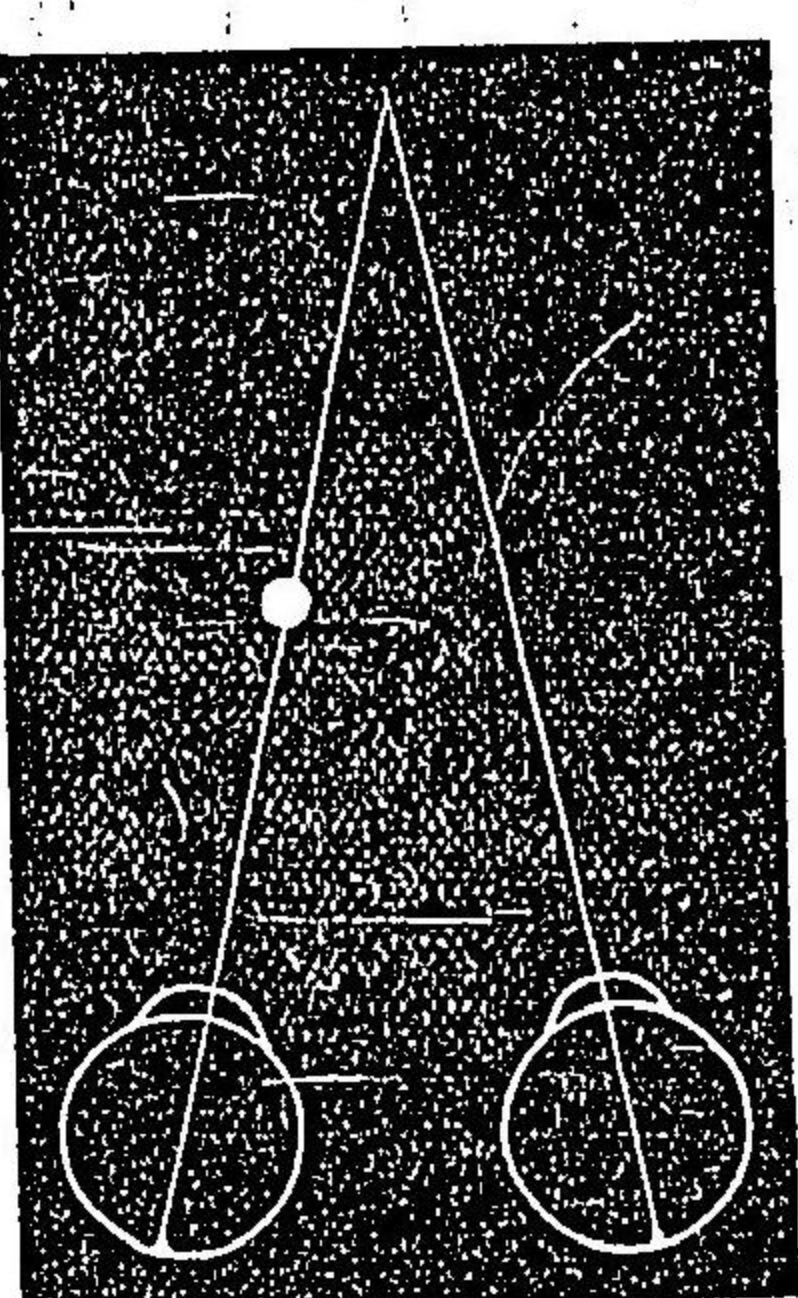
斜視トハ一眼ヲ以テ物體ヲ着目シ他眼ノ視軸ハ他方ニ偏依シ物體ヲ避過スル者ヲ云フ、而シテ視軸偏依スルモ兩眼相提携シテ自在ニ回轉スルキハ之ヲ共同斜視ト稱シ、一眼ノミ運轉シ他

第九百圖



右眼之内斜視

第十百圖



右眼之外斜視

眼ハ一定ノ位置ニ静止スルキハ之則チ麻痺性斜視ナリ(百八十六頁参照)又或時ハ左眼ヲ斜視シ或時ハ右眼ヲ斜視スル者之ヲ交換性斜視ト名附シ。○視軸、物體ト眼ノ間ニ於テ交叉スルキハ内斜視(第百〇九圖)ニシテ、物體ノ前方ニ於テ交叉スルカ或ハ寧ロ散在スルキハ外斜視(第百十圖)ナリ他皆之ニ準ズ

#### 第一 共同斜視 (Strabismus concomitans)

### 症狀

夫レ斜視眼視軸ノ偏依タルヲ通例一目シテ瞭然タリト雖モ、輕度ノ者ニ在テハ其異常アルヲ認ムト雖モ孰レノ眼ガ斜視スルヤ容易ク之ヲ

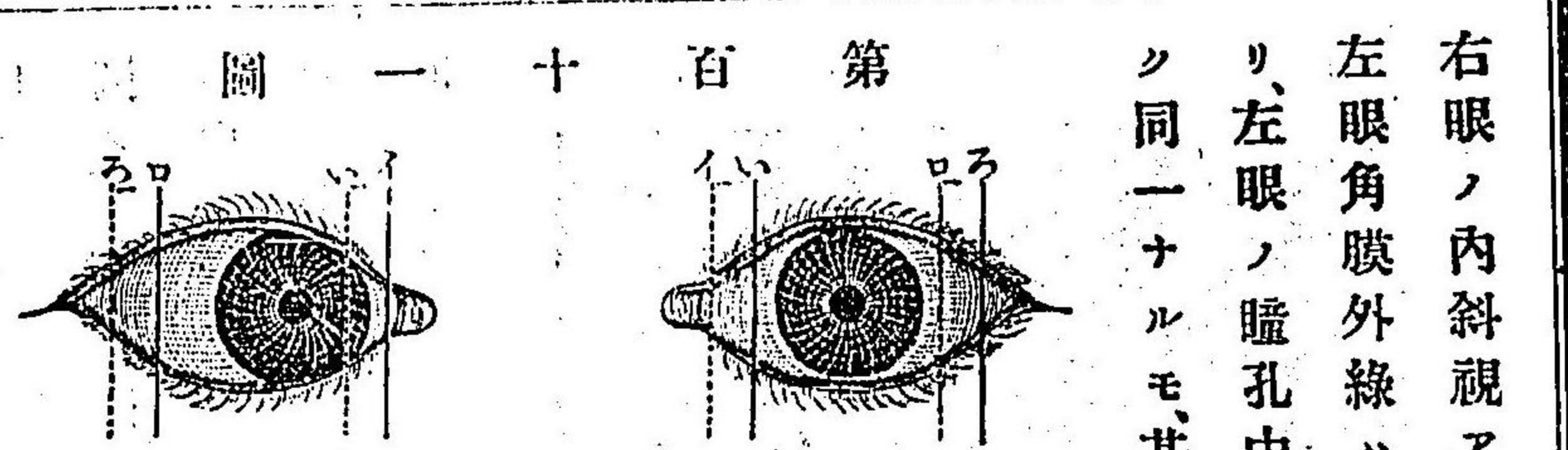
斜視

断定シ能ハザルヲ勘カラズ、然レモ患者ニ兩眼ヲ以テ或物體ヲ着目セシメ  
 交々一眼ヲ蔽ヒ他眼ノ動靜ヲ窺フキハ之ヲ診定スル決シ難キニアラズ、而  
 ノ試ミニ左眼ヲ掩フノ際右眼ハ依然トシテ其位置ニ靜止スルキハ右眼ハ  
 物體ヲ着目シ則チ斜視セザルヤ明カナリ、之ニ反シ右眼ニ斜視アルキハ左  
 眼(着視眼)ヲ蔽ハレ今ヤ物體隱匿セラル、ガ故ニ止テ得ズ右眼斜視スル眼  
 ナリ、以テ更ニ着視センカ爲ニ乍ナ物體ニ向テ其視軸ノ方向ヲ轉ズ、○此着視  
 運動ノ方向ニ由テ又斜視ノ方向ヲ定ムルヲ得、例ヘバ外方ニ回轉スルキ  
 ハ内斜視ニ内方ニ回轉スルキハ外斜視ナリ、故ニ斜視ハ必ズ着視運動ノ  
 反對側ニ在リ

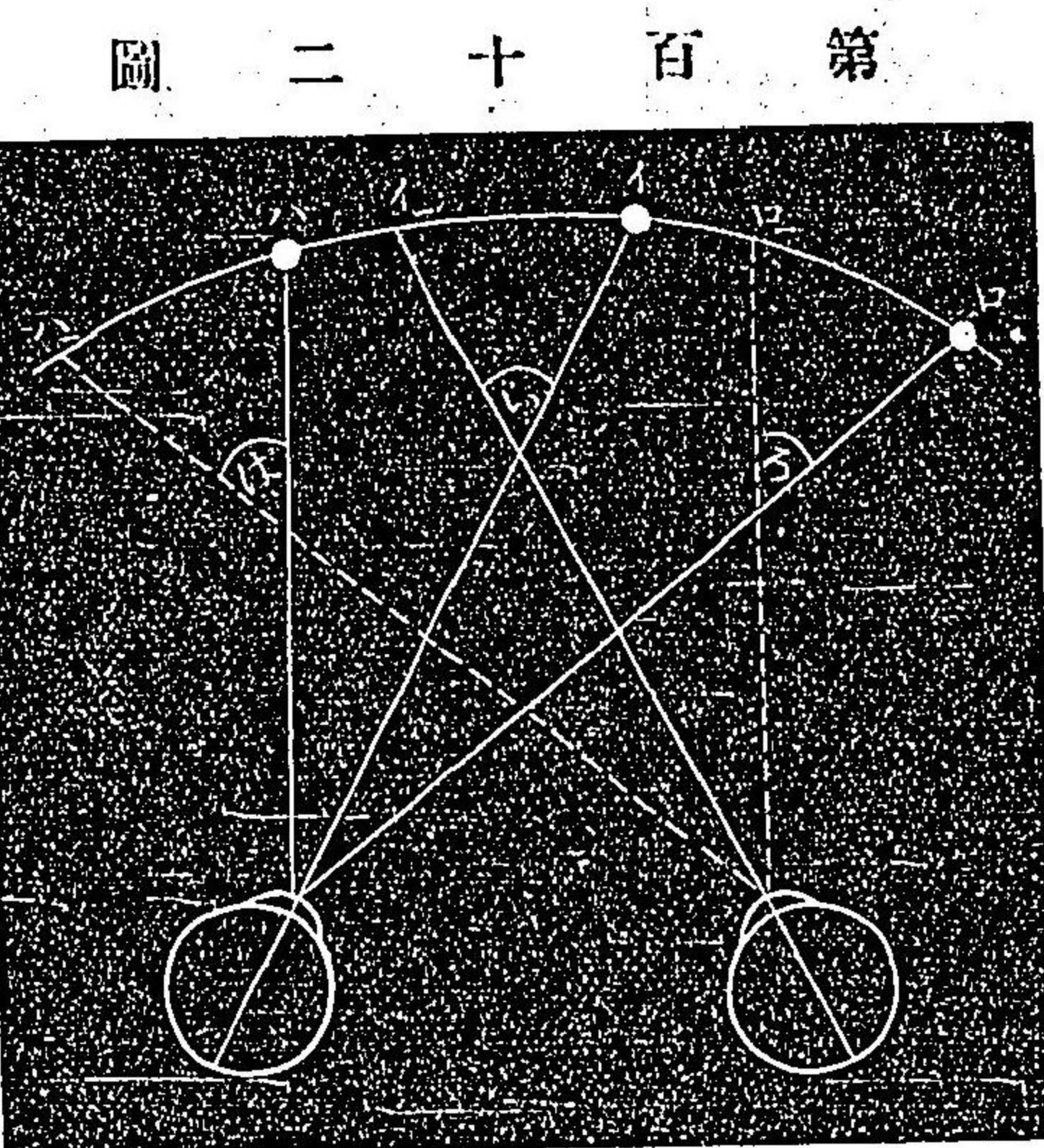
共同斜視ト麻痺性斜視ノ區別

(一) 總テ共同斜視ニ在テハ續發性斜視ハ元斜視ト全ク其度ヲ同シスルモ、  
 麻痺性斜視ニ在テハ續發性斜視ノ度ハ元斜視ノ度ヨリ遙カニ大ナリ(第百  
 八十七葉參照)

(二) 共同斜視ニ在テハ斜視眼ノ運動區域ハ健眼ノ運動區域ニ比スレハ少  
 シク斜視スル方向ニ偏依スルモ其廣狹ニ在テハ毫モ異ナル所ナシ、假令ハ



第百一十圖

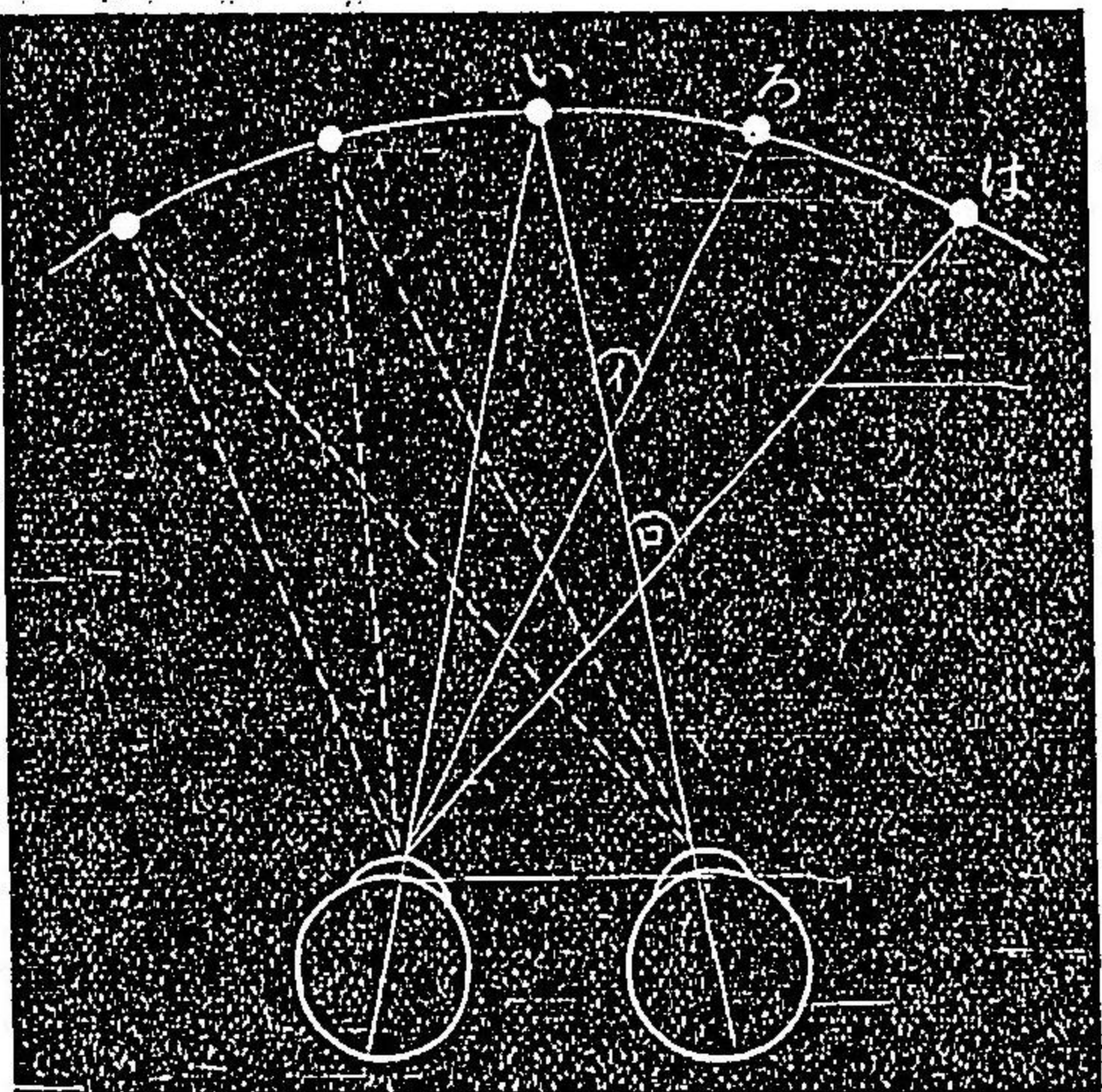


第百一十二圖

右眼ノ内斜視アリ(第百一十圖)左視スルキハ右眼ノ瞳孔中心ハイ線ニ達シ、  
 左眼角膜外縁ハる線ニ達スルモ、右視スルキハ右眼角膜外縁ハロ線ニ止マ  
 リ、左眼ノ瞳孔中心ハイ線ニ止マル、而シテイロ若クハいろ間ノ距離ハ左右全  
 ク同一ナルモ、其位置ヲ比較スルキハイロハいろヨリ著シク内方ニ偏位ス  
 ルヲ見ル、○麻痺性斜視ニ在テハ麻痺ノ方向ニ於  
 テハ僅ニ回轉スルカ或ハ全ク運動セズ故ニ運動  
 區域ハ健眼  
 ノ者ニ比ス  
 レバ甚ダ狹  
 小ナリ(百八  
 十六頁參照)  
 (三) 夫レ共  
 同斜視ニ在  
 テハ如何ナ  
 ル方向ヲ着

斜視

目スルモ決シテ斜視ノ度ヲ變ズルコトナシ、例ヘバ右眼内斜視アリ(第百十二  
圖)イ點ヲ着目スルキハ右眼ノ視軸ハイ點ニ向ヒ、ロ點ヲ着視スルキハロ點  
ニ向ヒ、バヲ見ルキハハ點ニ向フ、而シテ斜視ノ度い、ろ、ばハ平常同一ナリ(例ヘ  
ハ二十度)○麻痺性斜視ニ在テハ然ラズ、物體ヲ麻痺側ニ偏スルニ從ヒテ健  
眼ノミ其方向ニ回轉スルモ、麻痺眼ハ一定ノ位置ニ靜止スルガ故ニ斜視ノ  
度ハ益々旺盛スル者ナリ(百八十  
六頁參照)例ヘバ右眼外直筋ノ麻  
痺アリトセンカ(第百十三圖)い點  
ヲ見ルキハ未ダ斜視ナキモ、ろ點  
ニ向テハ左眼ノミ着目シ右眼ハ  
いノ方向ニ止マリ、イ度ノ内斜視  
ヲ起シ、ハ點ヲ視ルモ右眼ハ尙ホ  
依然タルガ故ニ斜視ハ尙ホロ度  
ニ増加ス、いヨリ左方ニ於テハ勿  
論斜視ヲ起サズ

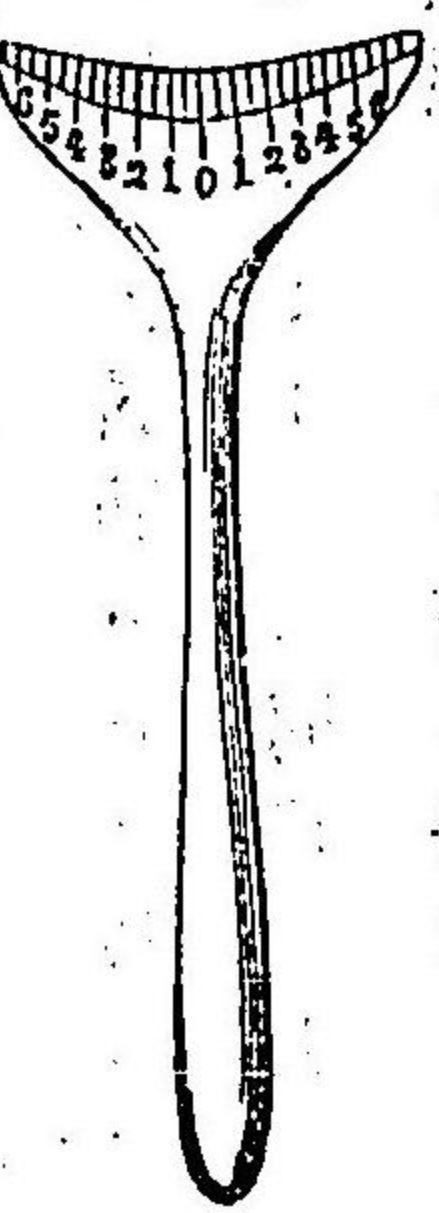


第百十三圖

其他共同斜視ニ在テハ麻痺性ト異ナリ決シテ物體ノ位置ヲ誤認スルコトナシ  
又復視ヲ訴フルコト通例之ナシ

斜視ノ視力  
甚大弱クシテ  
遠方ノ物體ヲ  
着目シ能ハザ  
ルキハ健眼ヲ  
以テ着目セシ  
メ内嚙ト瞳孔  
間ノ距離ヲ左  
右比較スベシ

斜視ノ度ヲ檢定スルニハ患者ヲシテ先ツ無限ノ距離ニ着目セシメ斜視眼  
ノ瞳孔中心ニ符合スル下眼瞼縁ニ於ケル或ル一點ヲ墨ヲ以テ標記シ、而シ  
テ復健眼ヲ蔽ヒ更ニ中心點ノ位置ヲ標記スベシ、此兩標點ノ眼瞼内嚙ニ對  
スル距離ヲ測レバ直ニ斜視ノ度ハ幾密迷ナルヲ知ル、らうれんす氏斜視計  
(Stabometer von Jaeger)ハ之ヲ測定スルニ最モ適切ナリ(第百十四圖)之ヲ檢  
スルニ素ヨリ必シモ瞳孔中心ヲ  
標目トセズ又角膜外縁若クハ内  
縁ト外嚙、内嚙若クハ淚點トノ距  
離ニ憑テ之ヲ檢定スルモ敢テ妨  
ゲナシ而シテ兩點距離ノ差ハ則チ  
斜視ノ度ナリ



斜視計  
らうれんす氏

第百十四圖

斜視中最モ多キハ内斜視ニシテ、外斜視ハ是ニ亞ギ、上方若クハ下方ニ於ケル  
斜視ハ甚ダ罕ニシテ、特ニ對偶線、換テ云ヘバ内上方、外下方等ニ斜視スルコト最

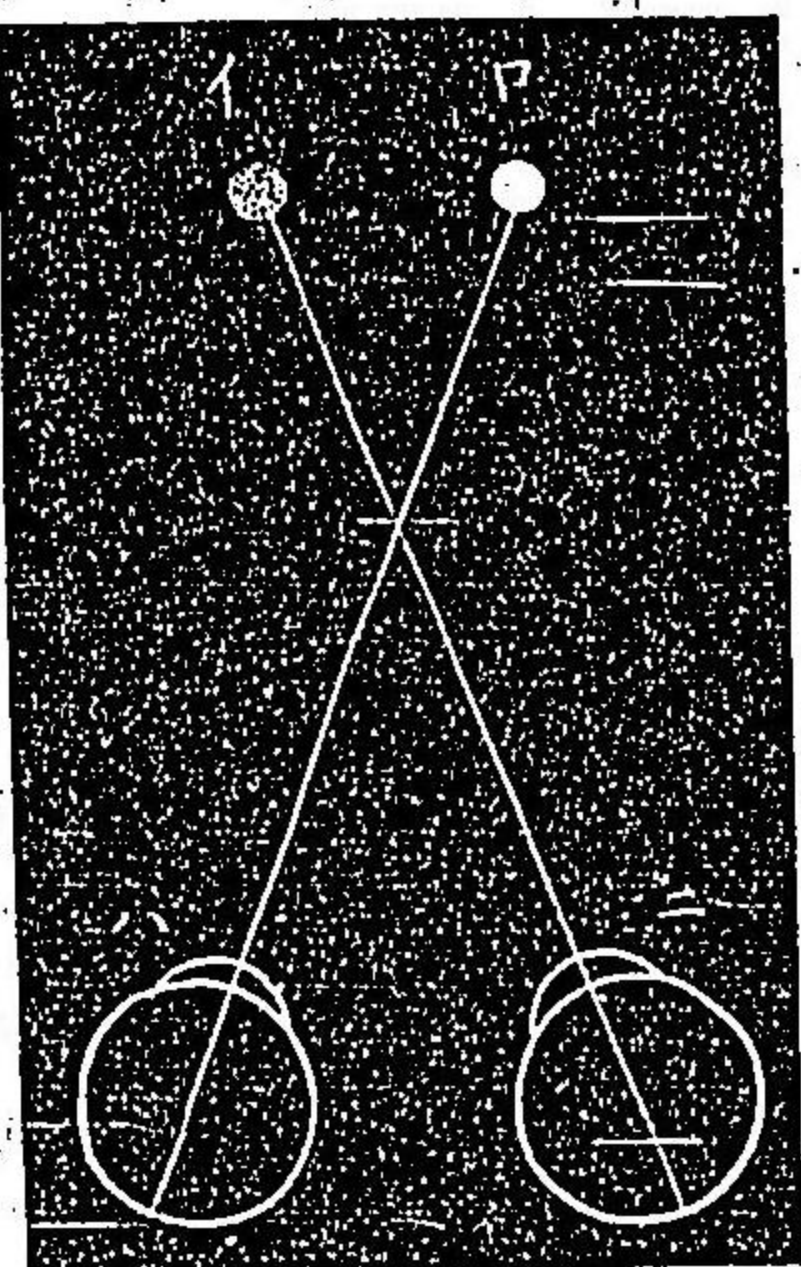
モ罕ナリトス、然レモ強度ノ内斜視ニ在テハ屢々猶多少下方ニ偏依シ、外斜視ニ在テハ上方ニ偏依スル者ナリ、是レ或筋ノ其反對筋ニ對スル生理的過力ニ因縁スル者ニシテ、抑モ此過力タルヤ生理的状態ニ在テハ兩眼單視センガタメニ自然制止セラル、モ、斜視眼ニ於ケルガ如ク兩眼單視シ能ハザル場合ニ於テハ該筋ハ直ニ其過力ヲ逞フシ、例ヘバ内直筋ハ眼球ヲ單ニ内轉セシムルノミナラズ同時ニ少シク下方ニ回轉セシムル者ナリ

凡ソ上視スルキハ譬ヒ斜視ナキモ兩眼ノ視軸多少散在シ、下視スルキハ輻輳スルヲ必ズ常ニ記憶スベシ又外斜視ニ在テハ眼球少シク上方ニ轉シ、内斜視ニ在テハ下方ニ偏スル實例ハ前説ト相符合ス、是等ノ現象ハ果ノ對隅線ニ於ケル斜視ナルカ或ハ内斜視若クハ外斜視ノ副症ニ非ラザルカヲ確診セント欲セバ、健眼ノ續發斜視ニ注意スベシ、而シテ單ニ内方若クハ下方ノミニ向テ續發斜視ヲ起シ、對隅線ニ於テ偏依セザルキハ決シテ對隅線ノ斜視ニアラザルヤ必セリ

第二 交換性斜視 (Strabismus alternans)

交換性斜視ハ共同斜視ノ一種ナリト雖モ、常ニ一眼ニ止マラズ或時ハ右眼

第百五十五圖



ナ斜視シ或時ハ左眼ヲ斜視シ時々斜視眼ヲ交換スルガ故ニ此ノ名アリ、而シテ患者ハ何レノ眼ト雖モ隨意ニ之ヲ使用スルヲ得ルモ、多クハ主トシテ一眼ヲ使用シ、唯格別ノ目的ニ依リ通例斜視スル眼ヲ以テ着目シ、通例斜視セザル眼ヲ斜視スル者ナリ

ザル眼ヲ斜視スル者ナリ○此種ノ斜視ハ一眼ヲ内斜視ヨリ起ル者ニシテ、例ヘバ第百十五圖ニ於ケルガ如ク右眼ヲ以テ着目シ、左眼ハ内方ニ斜視スルトセンカ、則チ健眼ノ内直筋モ共ニ攣縮スルノ傾キアルガ故ニ健眼側ニ在ル物體(ロ)ヲ俄ニ着目セント欲スルモ速ニ其内直筋ヲ弛緩セシメ以テ眼球ヲ外轉セシムル能ハズ、然ルニ既ニ此方向ニ向フ所ノ斜視眼(ハ)ヲ以テ着目スルキハ大ニ便利ナルガ故ニ終ニ健眼(ニ)ヲ斜視シ斜視眼ヲ以テ着目スル者ナリ

斜視ノ視力ニ及ボス關係ニ関シ、凡ソ斜視スル者ハ理論上必ズ復視ヲ起サザルベカラズ、然レモ通例然ラズ

シテ唯近發ノ患者若クハ眼筋麻痺後ノ者或ハ一定ノ距離ニ着目スル時ノ  
 ミ之ヲ起スハ何ゾヤ、曰ク斜視眼ニ於ケル網膜像ハ黃斑部外ニ生シ加之患  
 眼ハ物體ヲ目視スルノ意ナキヲ以テ充分調節セザルガ故ニ眼底ニ圈暈ヲ  
 生シ網膜像甚ダ明了ナラズ、而シテ之ヲ腦裡ニ傳達セザルニアラザルモ、精神  
 ノ注意不十分ナル爲ニ抑制セラレ、視機ニ加擔セザル者ナリ○決ノ傳導力  
 ノ消失シタルニアラズシテ全ク一時抑制セラレタル者ナルコトハ、健眼ヲ掩  
 フキハ能ク斜視眼ヲ以テ物體ヲ明視スルニ由テ充分之ヲ證明スルヲ得、又  
 假令ヒ復視ヲ起サザルモ兩眼視スルキハ一眼ヲ以テ見ルヨリモ視野大ニ  
 廣大ナルニ由テ全ク視機ニ加擔セザル者ニアラザルヤ明カナリ  
 近發ノ斜視ニ在テハ通例復視ヲ訴フルモ、時日經過シ斜視旺盛スルニ從テ  
 消失ス、然レハ患者充分注意ヲ加ヘ或ハ三稜鏡ヲ以テ檢スルキハ再ビ復視  
 ナ認知スルコトアリ、交換性斜視ニ在テハ兩眼交々使用スルガ故ニ能ク其視  
 力ヲ維持スルコトヲ得ルモ、常ニ一眼ノミ使用シ他眼ハ全ク斜視スルキハ、其  
 網膜機能遲鈍トナリ、漸ク弱視休機性弱視ヲ起ス、而シテ最初ハ黃斑部ノ視力  
 減退シ漸ク顛顛側ニ波及シ、内側ノ機能最モ久シク維持セラル、故ニ中心視

眼

力減衰スルカ或ハ全ク消失シテ周圍ノ視力ノミ存スルカ或ハ全ク内側ノ  
 ミニ止マルコトアリ

**原因**

斜視ハ稀ニ先天性ニ發スルコトアリト雖、通例着視機能ノ發達ス  
 ル時期ニ於テ漸ク起ル者ナリ、而シテ最初ハ只時ニ依リ斜視スルモ漸ク持續  
 性トナル、是レ蓋シ初期ニ於テハ復視ヲ起シ大ニ視機ヲ妨害スルガ故ニ、之  
 ナ避ケント欲シ、若シ復像ヲ合體セシメ能ハザルキハ、暗々裡ニ其距離ヲ遠  
 ケンコトヲ試ミ斜視愈々旺盛シ遂ニ持續性トナル者ナリ

夫レ此ノ如ク斜視ハ通例後天性ニ發スル者ト雖、亦天賦眼筋ノ不平均ニ  
 由ル素因ヲ有スル者ト見做サザルコト頗ル多シ、而シテ天賦内直筋若  
 シハ外直筋ノ營爲不全ハ實際決ノ僅少ナラズト雖、兩眼視ノ望ニ依テ此  
 不平均ヲ抑制シ以テ斜視ノ發生ヲ免ル、然レハ一朝若シ兩眼單視ノ困難ヲ  
 來スカ或ハ全ク兩眼視シ能ハザルキハ、斜視ノ發生ヲ防グヘキ抑制力ヲ失  
 ヒ、素因其害力ヲ逞フスルニ至ル○兩眼單視ノ障害ヲ蒙ルベキ機會種々ア  
 リ

(二) 幼年ノ時眼病ニ罹リ久シク一眼ヲ使用セザル事

斜視



(二) 凡ソ一眼若クハ兩眼ノ視力障害例ハ角膜溷濁、先天性白內障、內膜病、屈折異常等

(三) 眼筋麻痺若クハ小兒ニシテ一定ノ凝視困難ナル位置ヲ與フルト、假令ハ窓ヲ右方若クハ左方ニ見ルベキ位置ニ小兒ヲ仰臥セシムルト、特ニ是等ノ關係久シク持續スルカ或ハ屢々反復スルニ在リ、而シテ內直筋強キキハ內斜視ヲ起シ、外直筋強クレバ外斜視ヲ起ス

屈折異常ハ最トモ多ク斜視ノ原因トナル○邊んでるす氏ノ統系ニ依レバ百名ノ內斜視患者中七十七名ハ遠視眼ニシテ外斜視ノ三分二ハ近視ナリト

夫レ遠視眼ハ比例的強度ノ調節力ヲ用ウルガ故ニ視軸モ亦從テ甚シク集束シ、既ニ物體ト眼ノ間ニ於テ交叉シ、タメニ同側性ノ復視ヲ起ス、然レモ復視ハ大ニ視力ヲ障害スルガ故ニ患者ハ十分ニ調節スルヲ止メ、不明了ナガラモ兩眼單視ニシテ復視ノ煩ヲ避ケル者ナリ、然レモ今試ミニ手ヲ以テ一眼ヲ掩ヒ復視ノ起ラヌ様ニナスキハ、物體ヲ明視センガ爲ニ患者直チニ十分適當ノ調節ヲ試ミ、從テ視軸集束シ手下ノ眼ハ內方ニ斜視スル者ナリ

○此ノ如ク試驗的ノ蔽眼ニ由テ容易ク斜視ヲ起スガ如ク、凡テ一眼ノ視力他眼ヨリモ微弱ニシテ(角膜溷濁、水晶體溷濁、屈折異常、弱視等)到底兩眼視ノ望ミ絶ユルキハ、物體ヲ明視センガ爲ニ善長ナル眼ヲ以テ充分調節シ、他眼ハ寧ロ內方ニ偏依セシメ、遂ニ眞ノ內斜視ヲ起ス、而シテ初期ニ於テハ只一定ノ距離ニ着目スルニ當テ斜視スルノミニシテ(手藝、食事等)他ノ距離ニ於テハ未ダ之ヲ起ササルモ、常ニ近業ニ從事スル者ニ在テハ速ニ持續性トナル、近視患者ハ常ニ物體ヲ甚シク近接シ爲ニ視軸ノ輻輳ヲ要ス、故ニ內直筋大ニ努力シテ乍ラ其疲勞ヲ來シ、患者強テ事業ヲ持續スルキハ所謂其營爲不全ヲ起シ、眼球ハ稍々外方ニ轉シ、タメニ復視ヲ生ズルガ故ニ終ニ兩眼視スルヲ廢ス、試ミニ手ヲ以テ一眼ヲ掩ヒ手下ニ於テ之ヲ注目スルキハ近見ノ際必ズ外方ニ偏依ス、上記ノ理由ニ依テ強度ノ近視眼ニ在テハ強テ事業ヲ持長スルキハ一眼ヲ閉ヅルカ或ハ物體ヲ唯一眼ヲ以テ見得ベキ位置ニ保ツ者ナリ、是レ內直筋ノ疲勞ト眼窩周圍ノ疼痛ニ由テ患者ハ暗々裡ニ視軸ノ集束ヲ避ケントスルニ因ル、而シテ遂ニ持續性ノ外斜視ヲ起ス○近視ノ停止スル間ハ內直筋ノ力容易ニ衰ヘザルモ、遂ニ進行スルキハ直ニ其營爲

不全ヲ起ス

強度ノ近視ハ又屢々内斜視ヲ起スコトアリ、是レ内直筋ノ習慣性攣縮ニ由ル者ナリ

**經過**

未ダ持續性ニアラザル斜視筋ノ攣縮若クハ麻痺等ニ起因スル斜視等ニ在テハ往々自治スルコトアリ、時々發スル遠視眼ニ於ケル斜視ノ如キモ其屈折異常ヲ整定スルキハ又往々消失スルコトアリト雖モ、概シテ既ニ持續性トナリタル者ニ在テハ特別ノ處置ヲ施サザレバ到底治癒スル者ニアラズ

時トノハ自然交換性斜視眼トナリ左スレバ交々兩眼ヲ使用スルガ故ニ休機性弱視ノ發生ヲ免カル、者ナリ、故ニ施術ノ時機未ダ至ラザルキハ一眼ニ固定シタル斜視ヲシテ必ズ交換性ニ轉セシムベシ、其方法タル毎日數時間健眼ニ不透明ノ眼鏡ヲ裝ヒ、斜視眼ニハ平面若クハ、屈折異常アルキハ、其レニ適當ノ眼鏡ヲ裝ヒ、着目スルコトヲ練習セシムルニアリ○罕ニハ筋ノ解剖的變化ヲ起シ眼ノ運動ヲ障害スルコトアリ、是レ則チ攣縮筋ノ結締織變質及反對筋ノ萎縮ニ起因スル者ナリ

**療法**

共同斜視ノ尙ホ發作的ニ起ル者ニ在テハ其原因ヲ探究シ先ツ之ヲ除去セザルベカラズ、例ヘハ遠視ニ起因スル者ハ十分之ヲ矯正シ、尙ホ近用眼鏡ノ必要アレバ之ヲ與ヘ、斯クノ尙ホ斜視スルキハ、久シク亞篤魯必溼ヲ點眼シ、全ク調節ヲ止メシメ且全遠視ヲ整定シ、猶ホ三十五乃至四十仙迷ノ距離ニ適スル眼鏡ヲ與フ、近視ニ對シテモ亦制規ニ從ヒテ適當ノ眼鏡ヲ與フベシ○若シ斜視眼ニ弱視アルキハ、場合ニヨリテハ眼鏡ヲ以テ整定スル前ニ、一定ノ方法ニ依テ其恢復ヲ試ムベシ、其法タル先ツ強度ノ凸面鏡(十八D)ヲ以テ大ナル文字ヲ讀マシメ、視力ノ恢復スルニ從ツテ其度ヲ弱クメ(DD-4D-2D)文字ヲ小ニスベシ、時々又善良ノ眼ヲ綑帶シ不長ノ眼ヲ以テ遠見セシムルモ可ナリ、此ノ如クニシテ斜視全ク治癒スルハ甚ダ罕ナリト雖モ、一定度ニ回復スルコト甚シトセス、遠視眼ニ對スル亞篤魯必溼療法ハ間々大ニ必要ナリ○以上ハ則チ原因療法ニシテ、對症療法ニハ又種々アリ、之ヲ大別シテ二トナス、練習的療法及手術的療法之ナリ

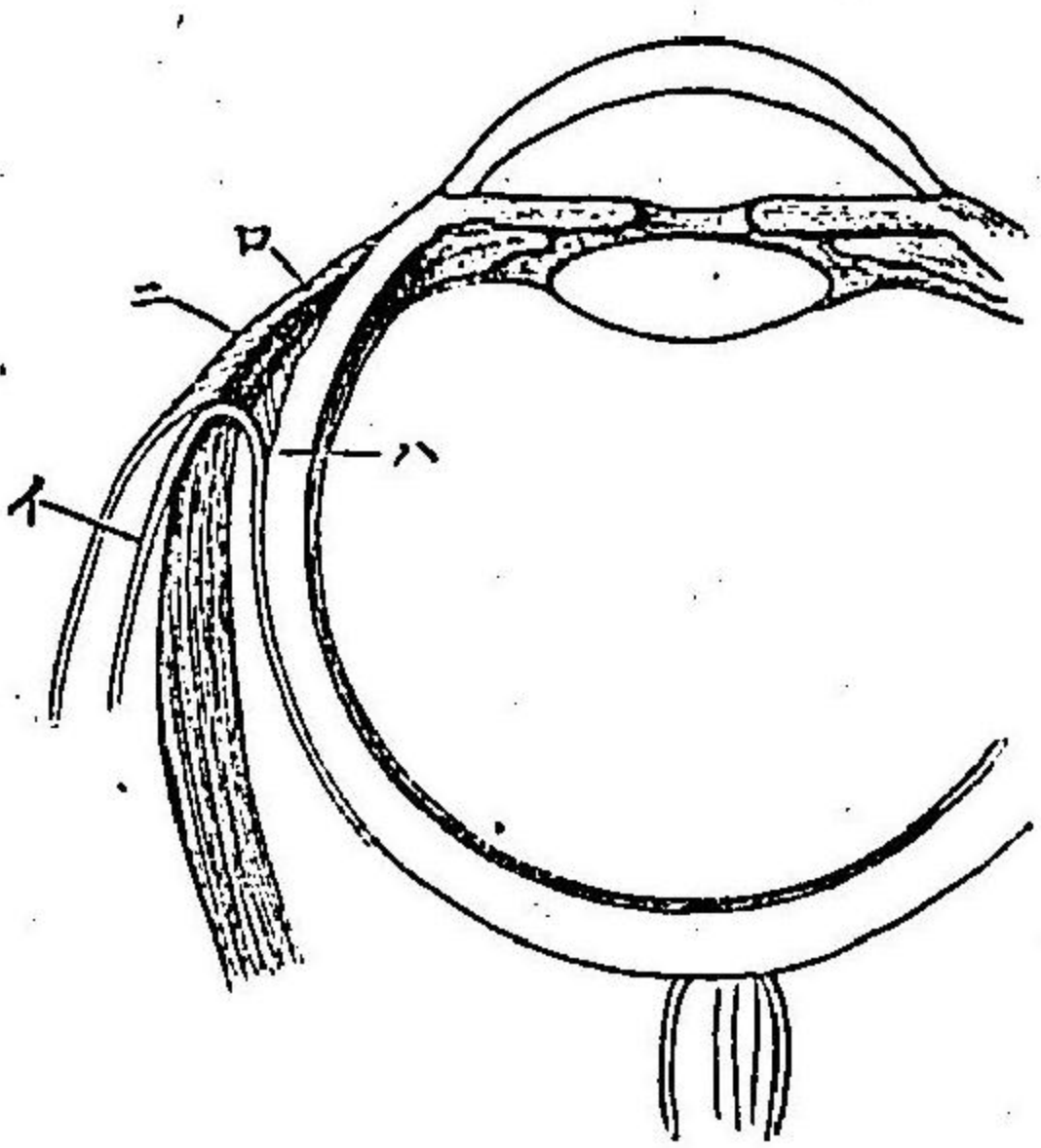
第一、練習的療法ニ在テハ先ツ兩眼視機ヲ喚起セザレバ其長結果ヲ得ルコト能ハズ、而シテ時トノハ患者既ニ兩眼視機ヲ有スル者ナリ、其存否ヲ知ラシ

ト欲セハ先ツ視力屈折及調節ノ状態ヲ檢シ、而ノ後二乃至三迷ノ距離ニ於テ兩眼ヲ以テ燭火ヲ着目セシムベシ。○極メテ罕ニハ患者直ニ復像ヲ認メ兩眼視ノ存スルヲ確證スルヲ得、健眼ニ紫色硝子板若クハ三稜鏡ヲ裝スルキハ患者ヲシテ多少容易シ復像ヲ認知セシムルヲ得。○如何ナル方法ニ憑ルモ復視ヲ起サ、ルキハ則チ兩眼視機ノ存セサルヤ疑ヲ容レズ、前ニ陳ベタル療法ニ仍テ弱視稍々恢復スルキハ、強度ノ斜視ニアラザレバ展々自然ニ復視ヲ起スコアリ、然ラザレバ實體鏡若クハ三稜鏡ヲ以テ之ヲ喚起セシムベシ、其方法ハ上記復視ノ検査法ニ於ケルガ如ク二乃至三迷ノ距離ニ蠟燭ヲ點シ、之ヲ着目セシメ、健眼ニ紫色硝子ヲ裝ヒ、斜視眼ニハ三稜鏡ノ基底ヲ上方若クハ下方ニ向テ裝置シ且兩眼交々手ヲ以テ掩フベシ、或ハ又内斜視ナルキハ三稜鏡ヲ基底ヲ外方ニ向テ、外斜視ナルキハ之内方ニ向テ、斜視眼ニ掛ケ可及的網膜像ヲ黃斑部ニ近接セシムベシ、是ヲ暫ク持續シテ行ハシムルキハ終ニハ又三稜鏡ヲ用サズシテ復視スルニ至ルコアリ

○愈々復視ヲ起スニ至レバ、之ヲ合體セシムル「プリスマ」ノ度ヲ測リ、而ノ十二度以上ノ者ヲ要スルキハ「プリスマ」療法ヲ斷念スベシ、如何トナレバ斯ノ

概シテ練習的療法ハ理論ノ如ク有効ノ者ニアラズ

第百六十圖



(イ) 睫状筋  
 (ロ) 内直筋  
 (ハ) 外直筋  
 (ニ) 上直筋  
 (ヘ) 下直筋  
 (ホ) 上斜筋  
 (ニ) 睫状筋  
 結膜間ノ  
 結締織

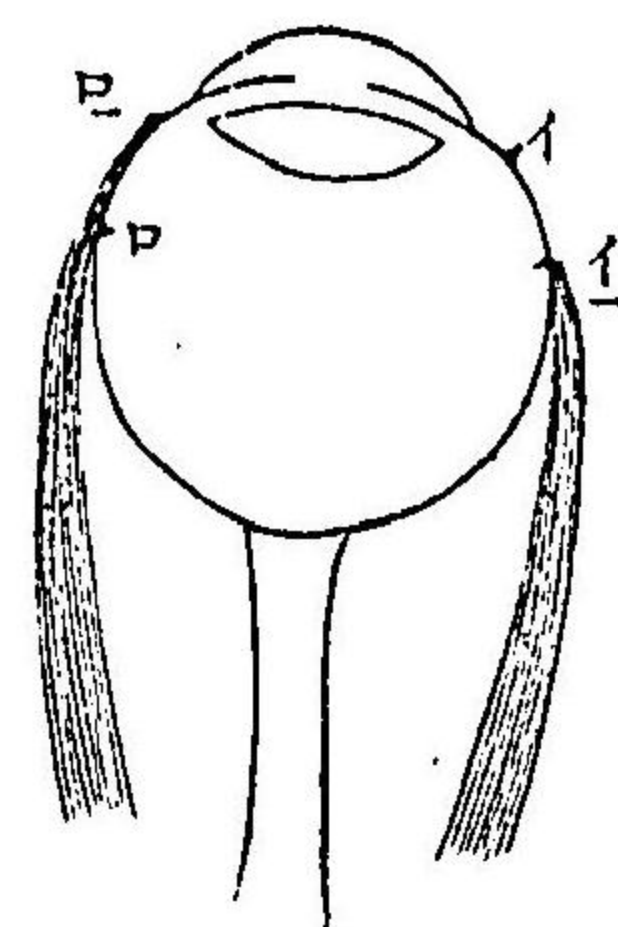
如キ強度六度以上ノ「プリスマ」ハ其重量ト分色作用トニ依テ到底其使用ヲ持續シ能ハザルガ故ナリ、故ニ斯ノ如キ場合ニ於テハ實體鏡ヲ可トス。○然レハ復視ヲ整定スル三稜鏡十二度以下ナルキハ之ヲ切半シ兩眼ヲ裝フベシ(例ヘハ十度ナルキハ五度ノ者ヲ左右ニ與フ)、之ヲ二三週間持續シ、少シシ弱度ノ者ト交換シ、漸々其度ヲ減シ、十分斜視ノ正復スル迄之ヲ行フベシ。實體鏡ヲ以テ兩眼視機ヲ起サシムルノ方法アリト雖、多少顯敏ナル患者ニアラザレバ其用ヲナサズ。○凡テ練習的療法ニ於テハ大ニ醫士及患者ノ注意ト忍耐トヲ要スルガ故ニ、充分其目的ヲ達スル迄之ヲ持續スルハ甚ダ難キ者ナリ、就中該療法ニ適スル患者ハ多ク小兒ニアレバ其困難益々甚ダシ

第二 手術的療法 ○眼筋ニ手術ヲ行フニ當テハ先ツ其睫ト周圍ノ關係ニ注意セザルベカラズ、吾人常ニ手術ヲ施ス筋ハ、四直筋ナリ、而シテ

斜視

等ハ眼窩脂肪組織間ヲ經テ所謂テのん氏囊(Tenon'sche Kapsel)(第百十六圖イ)ヲ貫穿シ、角膜ノ近部ニ至リ睫(ロ)ニ賴テ鞏膜ト結合ス、然レモ單ニ此ノ結合アルノミナラズ尙ホ介達性ニ筋ト鞏膜間ノ細胞組織(ハ)筋ト結膜間ノ結締織(ニ)及テのん氏囊ニ依テ眼球ト連繫ヲナス者ナリ、故ニ睫ノミヲ截斷スルモ其周圍ノ結締織等ヲ剝離セザレバ、筋ハ尙ホ其位置ニ止マルヲ得、故ニ手術ノ成績ハ睫ノ周圍ヲ剝離スルノ多少ニ依テ又大ニ増減アルヤ明ナリ、手術ニ二種ノ方法アリ後轉法及前轉法之ナリ○後轉法ニ在テハ眼ノ變位ヲ營ム、攣縮筋ノ睫ヲ切斷シ(睫斷法)、其附着點

第百十七圖



(イ)ハ後轉後ノ附着點ヲ示ス(ロ)ハ前轉後ノ附着點ヲ示ス(第百十七圖イ)ヲ後方(イ)ニ遠ザケ、以テ眼球ヲ偏依セシムル作用ヲ減殺スルニアリ、故ニ後轉法ハ必ズ眼球偏依ト同側ニ在ル筋ニ行フ者ニ、假令ハ內斜視ニ對シテハ內

直筋、外斜視ニ對シテハ外直筋ノ睫斷法ヲ要ス○之ニ反シ、前轉法ニ在テハ筋ノ附着點(ロ)ヲ前方(ロ)ニ轉移セシメ、其回轉作用ヲ増加セシムルニアリ、故ニ本法ハ斜視反對側ノ筋ニ行フ者ナリ○此ニ由テ之ヲ觀レバ一筋ニ後轉

眼

法ヲ行ヒ、其反對筋ニ前轉法ヲ施シ、或ハ兩眼ノ同名筋ニ後轉法若クハ前轉法ヲ施スルハ、其成績ノ益々増加スルヤ明ナリ、手術ニ要スル器械左ノ如シ

第百十八圖

球頭鉤 (一)開險器 (二)眼球固定鉤子 (三)反剪刀 (四)球頭鉤 (五)縫合針 (六)有鉤鉤子

テ充分ナルモ、小兒若シクハ忍耐力ニ乏シキ患者ニハ、嚆囉仿謨全身麻醉ヲ要ス

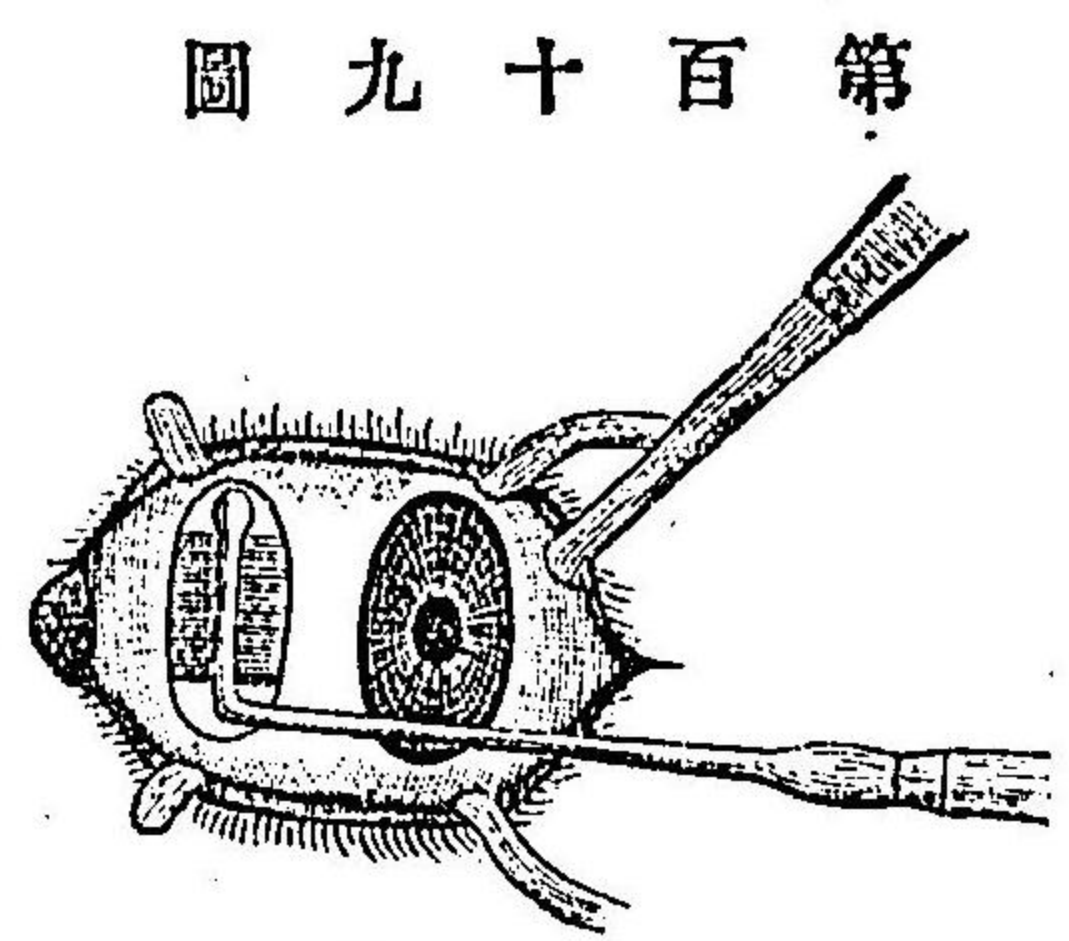
後轉法

其一 後轉法 (Rücklagerung) 一名睫斷法 (Tenotomie)

患者ヲ手術臺上ニ仰臥セシメ、防腐藥ヲ以テ兩眼共ニ能ク洗滌シ、開險器ヲ以テ眼瞼ヲ開キ、固定鉤子ヲ以テ手術セント欲スル反對ノ角膜緣ニ接シテ結膜ヲ撮ミ其方向ニ眼球ヲ回轉シ、助手ヲシテ之ヲ固定セシム(第百十九圖對照)○施術者ハ左手ニ有鉤鉤子ヲ取り、內直筋ヲ切斷セント欲スルルハ角膜內緣ヨリ四乃至五密迷內方ニ於テ(外直筋ニ對シテハ五乃至七密迷外方ニ於テ)結膜ヲ攝舉シ、之ヲ垂直線ニ一乃至一半仙迷切開ス○次ニ反剪刀ノ

余ハ通例固定鉤子ヲ用井ズ患者ヲシテ自ラ眼球ヲ回轉セシム

斜視

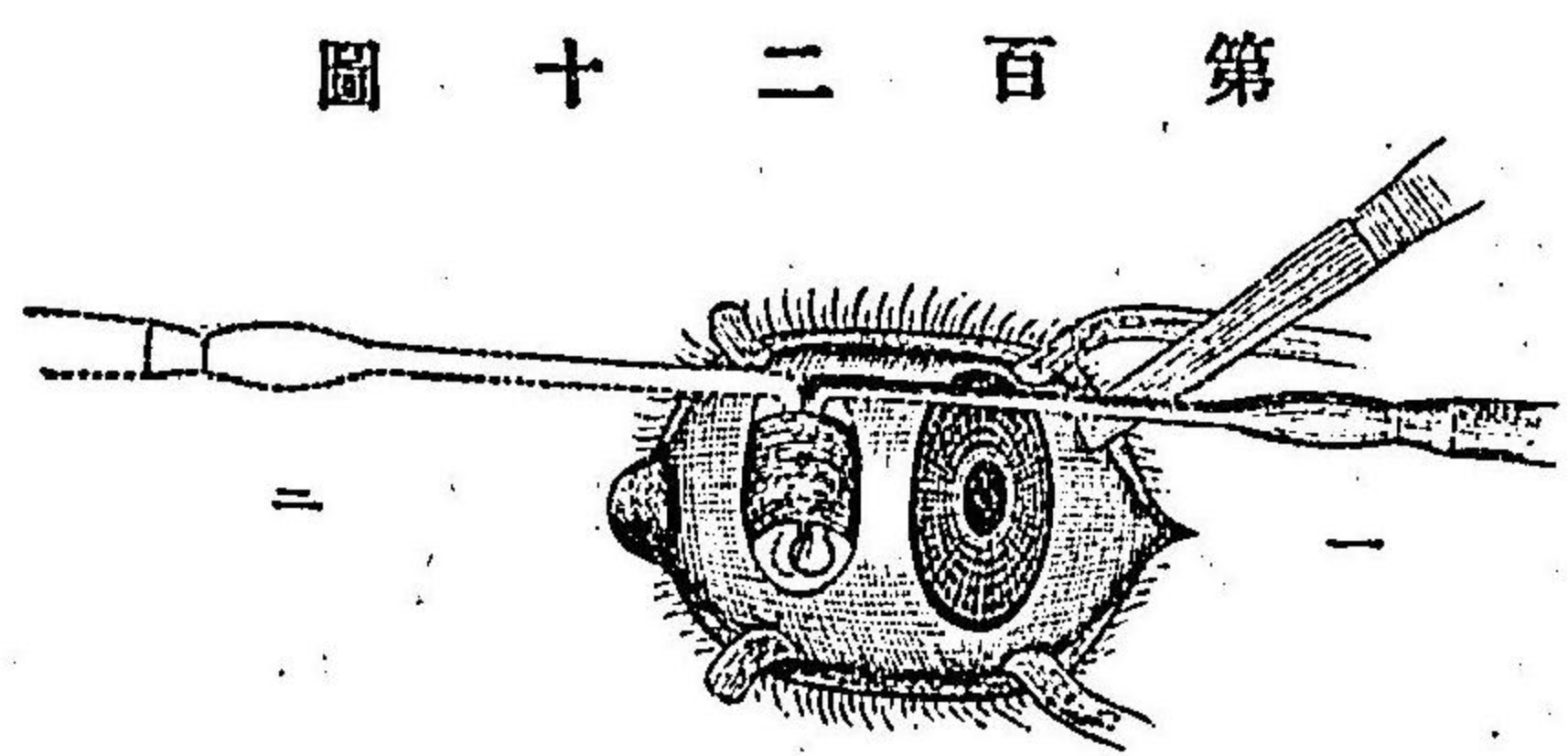


第百九十圖

内直筋  
離斷法  
ニ於ケ  
ル視鉤  
ノ使用  
法ヲ示  
ス

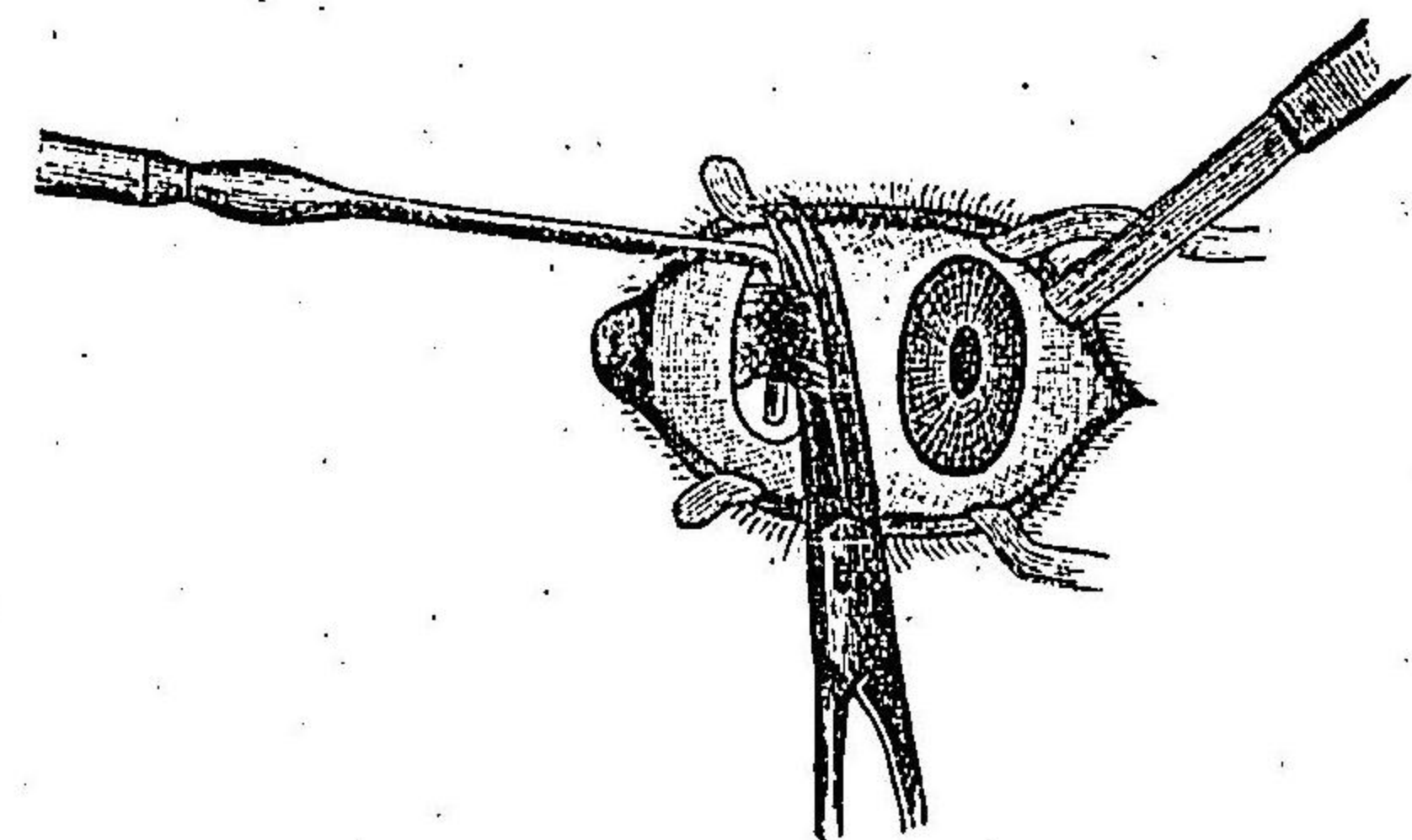
凹陷側ヲ眼球ニ向ケ、其先端ヲ創口ヨリ結膜  
下ニ挿入シ内方ニ向テ結膜ヲ徐々ニ其基底  
ヨリ剝離シ、尙ホ睫ノ上方及下方ニ向テ少シ  
ク剝離スベシ。○次ニ球頭斜視鉤ヲ取り、其先  
端ヲ上方ニ向ケ、筋ノ上ニ平ニ置キ(第百十九  
圖)之ヲ下方ヨリ上方ニ回轉シツ、其ノ先端  
ヲ筋ト鞏膜ノ間ニ挿入シ、筋ノ下縁ニ出シ(第

百二十圖)其先端ヲ纏包スル結締織ヲ切除シ之ヲ露出セシメ、鉤柄ヲ鼻側  
ニ轉ジ(二)其先端ニ沿テ、更ニ剪刀ノ凸隆側ヲ眼球ニ向ケ、其一葉ヲ眼球ト筋  
ノ間ニ挿入シ(第百二十一圖)睫ヲ可及的附着點ニ接シテ切斷ス、○次ニ扁頭  
斜視鉤ヲ取り、其先端ヲ鞏膜面ニ壓抵シ上下ニ滑動シ猶筋纖維ノ遺殘セザ  
ルヤ否ヤヲ探求シ、若シ之アルキハ悉ク之ヲ切斷シ、鉤ノ先端ニ少シモ抗抵  
スル者ナキニ至レバ全ク切斷セラレタル者ナリ。○次ニ濕綿壓抵ニ依テ止  
血ヲ行ヒ、結膜創口ニハ時、機ニヨリ一二ノ縫合ヲ施シ、創面ニハ「ヨドール」若  
クハ沃度仿謨ヲ撒布シ、兩眼共ニ壓抵帶ヲ施シ以テ手術ヲ結了ス



第百二十圖

内直筋後轉法



第百二十一圖

内直筋睫斷法

稀ニハ眼球後  
部之溢血ニ依  
テ眼球ノ突出  
ヲ起シ或ハ筋  
膜ニ深層ニ附  
着スルキハ之  
ヲ穿孔シ又ハ  
創面ニ毒素傳  
染シ眼窩蜂窩  
織炎ヲ發シ、爲

ニ視神經炎若クハ全眼球炎ヲ起シ、終ニ失明スルヲアリト雖モ、少シク注意  
ヲ加フルキハ容易ニ之ヲ避ルヲ得、概ノ是等ノ遇發症ハ幸ニ甚ダ稀有ニ屬  
ス  
上直筋若クハ下直筋ノ離斷法ヲ行フキハ、結膜切開ヲ可及的小ニシ、結膜剝

離ニ於テモ必要ノ區域内ニ止メ、剪刀、斜視鉤等ヲ過度ニ深ク挿入セザル様  
 注意スベシ、此注意ヲ怠ルキハ術後臉裂ノ擴張ヲ來スコトアリ、而シテ術後直後  
 ニ之ヲ發見スルキハ必ズ創口ヲ縫合スベシ  
 必要缺クベカラザル者ハ手術後直ニ其成績ヲ檢スルニアリ、就中管ニ眼球  
 位置正復ノ度ヲ檢スルノミナラズ、特ニ睫斷筋ノ方向ニ於ケル眼球ノ運轉  
 並ニ兩眼側視運動(左視或ハ右視若シハ集束運動ヲ試驗スベシ  
 抑モ睫斷法ノ成績ニ於ケル、其良否素ヨリ又手術ノ巧拙ニ依ルト雖モ概シ  
 内直筋ノ睫斷ニ在テハ少クモ三乃至四密迷正復シ、就中結膜ノ切開濶大ニ  
 ノ且睫ノ周圍ヲ充分剝離スルキハ正復五密迷ニ達シ、幼少ノ者ニ在テハ是  
 ヨリ尙ホ一二密迷ヲ超ユルコトアリ  
 外直筋ノ睫斷法ニ在テハ其成績甚ダ少ク、最良ノ結果ニノ尙ホ三四密迷ノ  
 正復ニ過ズ、マシテ創口小ナルキハ僅カニ二密迷位ニ止マル○上下直筋ニ於  
 テモ亦決テ是ヨリ大ナル成績ヲ得ルコト克ハズ  
 是ニ由テ之ヲ觀レバ正當ノ内直筋後轉術ノ直後ニ於テハ該筋運轉力手術  
 前ニ比較シ四乃至五密迷減退シ、他眼同名筋ニ比スレバ二乃至三密迷ノ作

用不全(減退)ヲ來サ、ルヘカラズ、外直筋ノ睫斷法ニ在テハ四乃至三密迷ノ  
 運動力ヲ減ズ

上記ノ成績ヲ得ザルキハ必ズ睫斷ノ不完全ナル者ナレハ、尙其原因ヲ探求  
 シ以テ成績ヲ全フスベシ○豫定ノ作用不全ヲ起スモ斜視尙ホ正復セザル  
 キハ其欠點多クハ反對筋ノ作用不充分ナルニアリ  
 以上豫定シタル手術成績ノ如何ヲ證明スルニハ、手術前後ノ運動力及術後  
 睫斷筋ト他眼ニ於ケル同名筋トノ作用ヲ比較スルニアリ(一)手術前後ノ運  
 動力ヲ比較スルニハ内直筋ニ於テハ角膜ノ外縁ヲ標目トナシ、最強度ノ内  
 轉ニ依テ手術前ニ於テハ外縁例ヘバ淚點ニ達シ、術後ニ於テハ淚點ヨリ四  
 五密迷外方ニ止マルキハ則チ、四乃至五密迷ノ作用不全ヲ起シタルヲ知ル  
 外直筋ニ至テハ角膜外縁ト外嚙トノ關係ニ依テ檢ス(二)兩眼同名筋ノ比較  
 ニ於テモ亦標目點ノ關係ハ同一ニ可ナルモ、左右相比較スルニ由テ異ナ  
 リトス、而シテ睫斷シタル眼ノ角膜外縁ハ上例ノ如ク淚點ヨリ四乃至五密迷  
 外方ニ止マルモ、他眼ニ在テハ尙ホ二乃至三密迷淚點ニ近接スルキハ、即チ  
 二三密迷ノ作用不全ヲ生シタルヲ明カナリ

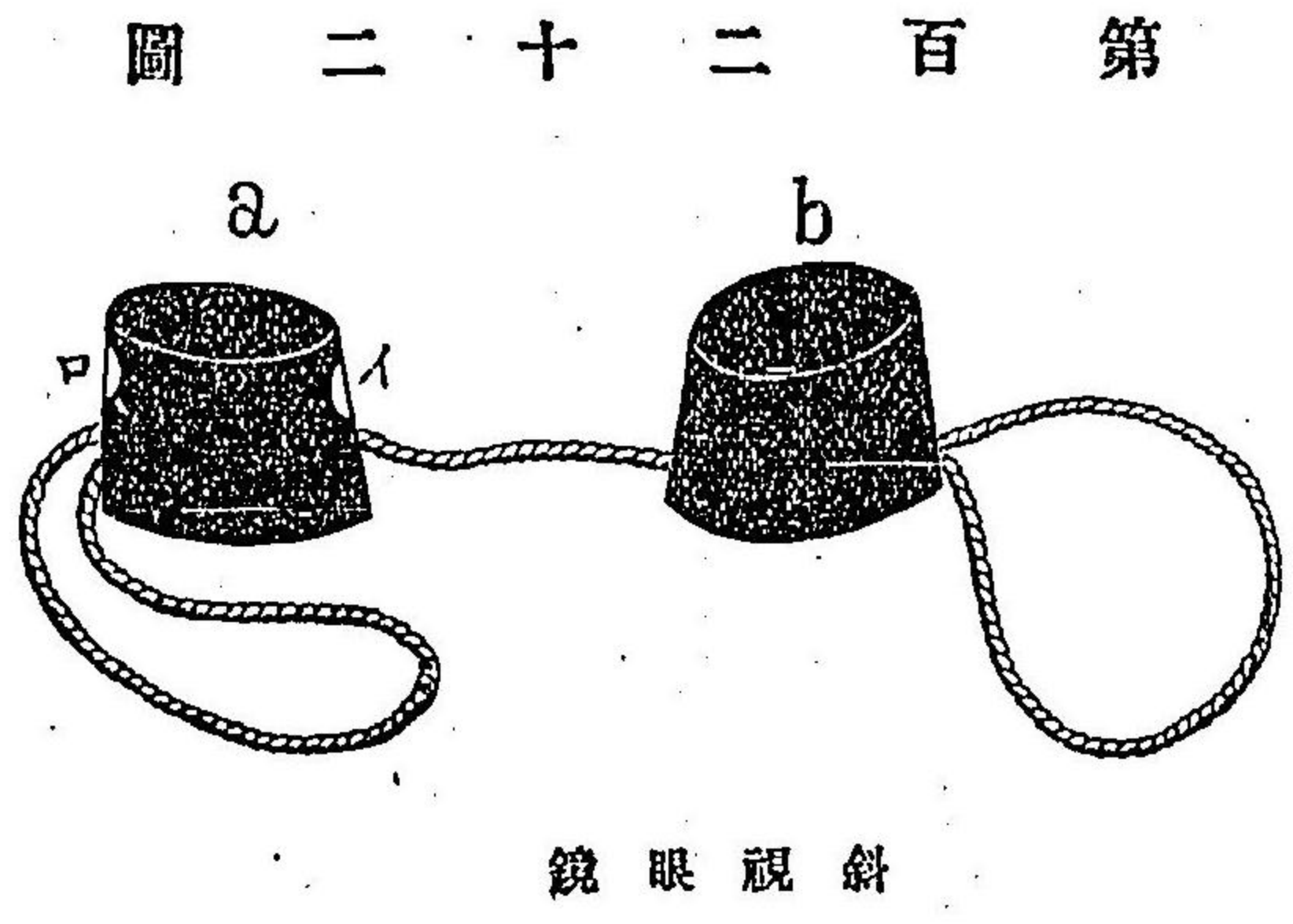
手術成績之増減

手術成績ノ増減法

上記ノ手術法ハ毎常同一ノ成績ヲ來スガ故ニ常ニ同度ノ斜視ニアラズンハ適合セザルガ如シト雖モ其度ノ強弱ニ關セズ普ネシ之ヲ施シ得フ以所ノ者ハ他ナシ其成績ヲ隨意ニ増減シ得ル方法アルニ因ル

甲 成績ヲ減ズル法

成績ヲ減ズル法



- (一) 結膜切開ヲ可及的小ニスルニアリ
- (二) 結膜創口ヲ縫合スルニアリ而シテ創縁ヲ深ク縫合スルカ或ハ淺クスルニ從テ又奏効ノ等差アリ
- (三) 術後眼ヲ臍斷シタル筋側ニ向ケ久シク牽引固定スルニアリ是ヲナスニハ健眼ニハ無孔ノ斜視眼鏡(金屬ヲ以テ作りタル貝狀眼鏡)第百二十二圖b)ヲ用キ他眼ニハ内轉ヲ要スルキハ内側外轉ヲ要スルキハ外側ニ小孔(イ)若クハ(ロ)ヲ穿キタル者ヲ佩用セシム

臍斷成績ヲ増加スル法

乙 成績ヲ増加スル法

- (一) 筋ヲ制規内ニ於テ周圍ヨリ充分剝離スル
  - (二) 結膜ヲ可及的大キク切開シ之ヲ縫合セザル
  - (三) 術後眼球ヲ切斷筋反對ノ方向ニ回轉セシメ置クニアリ其方法ハ上記ノ斜視眼鏡ヲ用キルカ單ニ眼球結膜ヲ適宜皺襞ヲ作り縫合スルカ(まゝ)ゑる氏)外嚙ト結膜ヲ縫合スルニアリ(くちぶ氏)○余ハ常ニ角膜ニ接シテ結膜ニ絲ヲ懸ケ眼球ヲ内轉若クハ外轉セシメ絆創膏ヲ以テ其絲ヲ鼻根若クハ顳額部ニ固定セリ○前轉法ヲ行フキハ必ズ縫合ヲ要スルガ故ニ其絲ノ先端ヲ利用スルヲ得
- 右ノ方法ニ依テ六密迷以下ノ内斜視ニ在テハ患眼ノミニ臍斷法ヲ施シ正復セシメ得ルト雖モ六乃至八密迷ノ斜視ニ在テハ先ヅ患眼ニ手術ヲ施シ結膜創口ノ癒合スルニ至テ他眼同名筋ノ後轉法ヲ行フ○八密迷以上ノ者ニ在テハ左右同時ニ手術シテ可ナリ
- 外斜視ニ於ケル外直筋ノ切斷ニ在テハ尋常ノ方法ニ依ルキハ正復僅カニ乃至三密迷ヲ出デズ故ニ四密迷ノ斜視ニ於テモ既ニ兩眼ノ臍斷ヲ要シ四

術後之療法及  
繼發症

昏迷以上ナルカ將々内轉運動不完全ナルキハ同時ニ内直筋ノ前轉ヲ要ス  
 術後ノ療法及繼發症  
 壯年者ニ遠視眼アルキハ術後直ニ凸面鏡ヲ與ヘテ可ナルモ然ラザレバ  
 直ニ壓抵帶ヲ施シ一日乃至二日ヲ經テ縫合糸ト共ニ之ヲ除去シ尙ホ一日  
 乃至二日間ハ假縋帶ヲ施シ一日四五回冷捲法ヲ命ジ爾後縋帶ニ代フルニ  
 瓣膜若クハ保護眼鏡若クハ又場合ニ依リ斜視眼鏡ヲ以テシ腫起充血溢血  
 等ノ存スル間ハ之ヲ持續スベシ  
 時トシテハ經過中ニ創面ニ赤色肉芽様ノ結節ヲ生ズルコトアリ然レモ之ヲ  
 放置スルキハ基底漸々小長トナリ絲狀ノ莖ヲ生ズ是時ニ至テ切除スルキ  
 ハ直ニ治愈ス  
 手術ノ際結膜ヲ剝離スルコト甚ダ潤大ニシ且創口ヲ縫合セザルキハ往々淚  
 阜ノ陷沒ヲ來スコトアリ之ヲ除去スルニハ淚阜ノ外側ニ於テ六密迷計リ結  
 膜ヲ鉛直線ニ切開シ之ヲ基底ヨリ剝離シ縫合スベシ○時トシテハ眼球突  
 出ヲ來スコトアリ是レ多クハ險裂ノ異狀ニ依テ此ノ觀ヲ呈スル者ニシテ手術  
 前既ニ之アルモ斜視スル間ハ著シク人目ニ觸レザルモ其正復スルニ當テ

眼

雙斷術ニ於ケ  
ル永久的之成  
績

初テ之ヲ認知スルコト甚カラズ眞ニ突出ヲ來スハ甚ダ罕ナリ○斜視消失ス  
 ルモ患者ノ習慣ニ由テ術後尙ホ斜頸ヲ殘スコトアルモ斜視眼鏡ヲ用ヰルキ  
 ハ必ず治愈ス

手術ノ永久的成績

手術直後ノ成績ト永久的ノ成績トハ必ス多少異ナル者ニシテ三期ニ區  
 別ス第一期(手術直後)ニ於テハ睫斷筋ハ直接ニ眼球ノ運動ヲ營ム能ハズ僅  
 カニ只介達性ニ之ヲ回轉セシムルノミナレバ其成績最モ著大ナリ○第二  
 期(術後三日乃至四日)ニ至レバ睫斷筋再ビ眼球ニ癒着シ直接ニ之ヲ運動セ  
 シムルガ故ニ第一期ノ成績ヲ減殺ス○第三期(六週乃至二ヶ月)ニ至レバ切  
 斷筋ハ久シク作用ヲ廢シ再ビ眼球ニ癒着スルモ其後轉ノ爲ニ作用ヲ減ジ  
 反對筋ノ作用ハ却テ少シク旺盛スルガ故ニ再ビ第一期ノ成績ヲ増加スル  
 者ナリ  
 通常内斜視ニ在テハ永久的ノ成績ハ手術直後ノ成績ヨリ少シク大ナル者  
 ナルモ近業若クハ矯正セザル遠視ニ於ケルガ如ク視軸ノ幅狹ヲ要スル者  
 ニハ却テ成績ヲ減ズルコトアリ

斜視



外斜視ニ在テハ通常成績ハ減ズル者ナレバ第一期ノ成績ハ必ズ多少豫定ノ成績ニ超過スル様注意スベシ故ニ管ニ斜視ノ正復ニ止メズ一乃至二密迷ノ内斜視ヲ起サシムベシ○斜視ノ正復シタルヤ否ヤハ二三迷ニ於テ兩眼ヲ以テ指頭ヲ着目セシメ檢スル者ナリ

永久の成績ノ如何ハ術後直ニ視軸ノ集束運動ヲ檢シ證明スルヲ得則チ指頭ヲ患者ノ前ニ出シ兩眼ヲ以テ之ヲ注目セシメ徐々ニ之ヲ近接シ十八乃至二十仙迷ニ至テ瞳斷眼既ニ靜止シ尙ホ近接スレバ外斜視ヲ呈スルキハ假令ヒ遠見ノ際ハ視軸並行スルモ後來必ズ外斜視ヲ起ス者ナリ若シ管ニ靜止スルノミナラズ尙ホ指頭ヲ近接スレバ健眼ハ之ニ向テ着目スルモ患眼ハ却テ外方ニ轉ズルキハ愈々後來外斜視ニ變スルヤ必然ナリ○斯ノ如キ場合ニ於テハ必ズ成績減少法ヲ施シ若シ爲ニ内斜視充分正復セザルキハ他日健眼ニ適當ノ手術ヲ施シ以テ其不足ヲ補フベシ譬ヒ患眼十二乃至十五仙迷ニ集束シ得ルモ久シク其位置ヲ保持シ能ハサルキハ又制減縫合ヲ行フベシ之ヲ檢スルニハ上記ノ距離ニ於テ指頭ヲ着目セシメ手ヲ以テ患眼ヲ掩ヒ手下ノ眼ニ注目スベシ若シ其集束ヲ維持シ能ハザル者ハ直ニ

手下ノ眼ヲ外方ニ轉ズ

上記ノ距離ニ於テ能ク集束スルモ漸時凝視スルキハ患眼突然内方ニ轉ジ則チ一時内斜視ヲ起スアリ是レ必ズ再發スルノ恐アルカ故ニ亞篤魯必涅ヲ點眼シ適當ノ凸面眼鏡ヲ與ヘ以テ其再發ヲ防グベシ

斜視全ク正復シ十乃至十二仙迷ニ凝視セシムルモ手下ノ眼更ニ變向セザルキハ充分ノ目的ヲ達スルヲ得其他注意スベキハ術後ハ可及的限ヲ安靜ニシ遠視アレバ必ズ之ヲ矯正シ可及的兩眼單視ヲ起サシメ且之ヲ維持スル様圖ラザルベカラズ

手術ノ變式

變式後轉法  
すねるれん氏  
之法

(一) すねるれん氏之法、瞳ノ中央ニ於テ地平線ニ結膜ヲ切開シ之ヲ上方及下方ニ向テ平等ニ剝離シ、淚阜モ亦其基底ヨリ遊離セシメ、鋸子ヲ以テ瞳ヲ撮擧シ、可及的鞏膜ニ接シテ瞳ノ中央ニ小孔ヲ穿テ、剪刀ノ一葉ヲ其小孔ヨリ瞳ト鞏膜ノ間ニ挿入シ、他葉ヲ筋ト結膜ノ間ニ入レ、瞳及てのん氏囊ヲ鉛直線ニ上方及下方ニ向テ平等ニ切斷シ、扁平斜視鈎ヲ以テ遺殘纖維ノ有無ヲ探リ悉ク之ヲ離斷ス○斯ク結膜ヲ地平線ニ切關スルキハ其創口非常ニ

大ナルモ更ニ成績ニ影響ヲ及ボサズシテ之ヲ縫合シ得ルノ便アリ、成績ノ増減ハてのん氏囊切開ノ深淺上下ニ向テニ由ル  
 すねるれん氏ノ説ニ依レバ此手術ハ比例的疼痛少ナシト、氏ハ又通常先ヅ一眼ニ手術ヲ施シ、成績ヲ増加セシムル爲ニ睫斷筋ノ反對側ニ向テ眼球ヲ固定セリ

のーふす氏之法

(一) のーふす (Noyes) 氏ノ法、同氏ハ斜視反對筋ヲ短縮セシメ以テ眼球ノ偏依ヲ正復セシメタリ、故ニ氏ハ内斜視ニハ外直筋、外斜視ニハ内直筋ノ手術ヲナセリ、其法タル筋ト睫ノ間ヲ切斷シ、斜視ノ強弱ニ應ジ多少其切端ヲ重ネ二個ノ縫合ニ依テ之ヲ癒合セシメタリ、氏ノ説ニヨレバ八密迷ノ斜視モ能シ一眼ノ手術ニ依テ正復セシメ得ルト云フ

ごらばー氏之法

(二) ごらばー (Driver) 氏ハ睫ヲ切斷シテ後適宜其一端ヲ切除シ、重ネズシテ縫合セリ

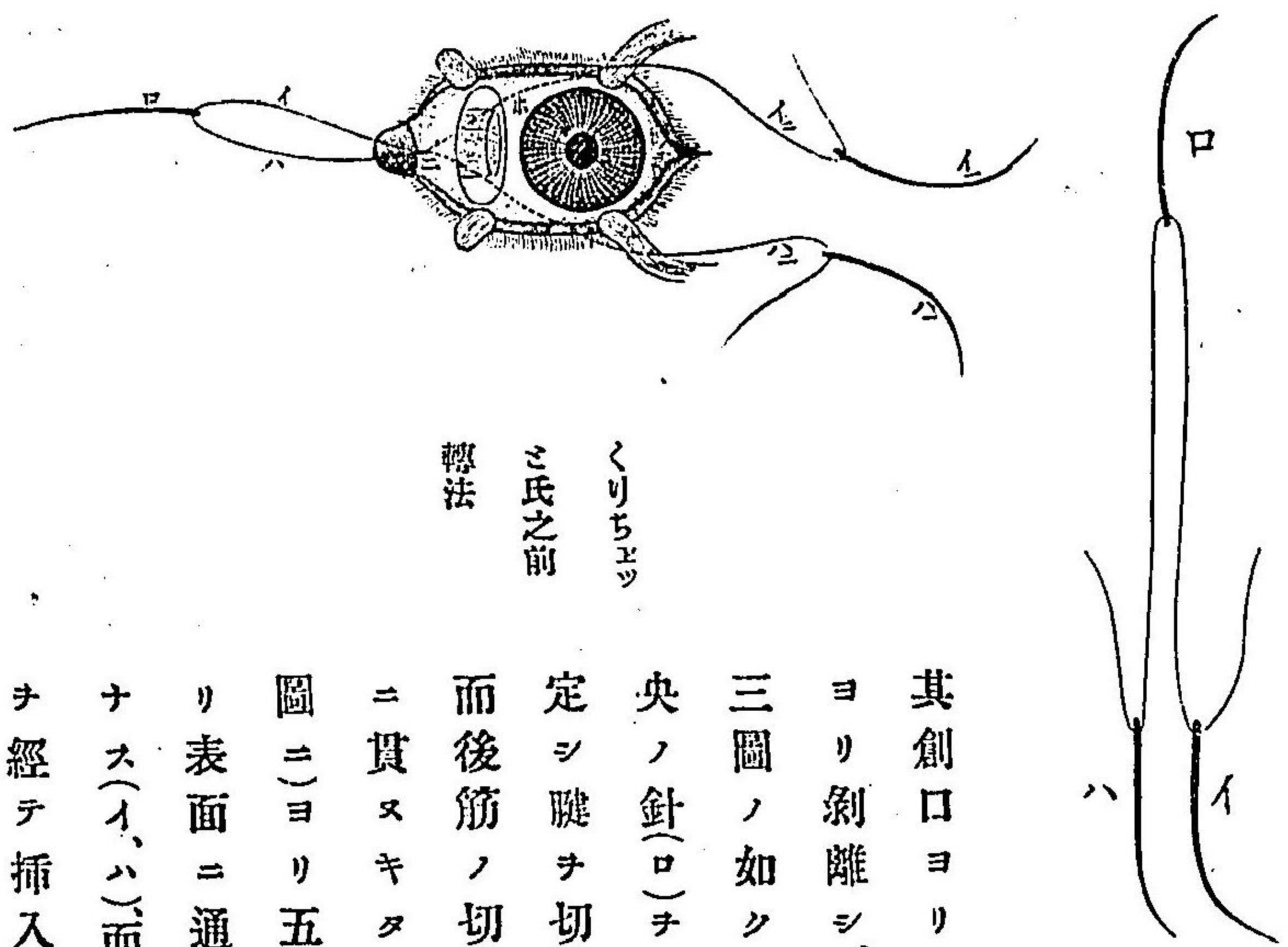
前轉法

前轉法ニ種々アリト雖モ現今普ク行ハレル者ハぐれー氏少シク改良ヲ加ヘタルぐりちエー氏 (Cricket) ノ法ニ、内直筋ニ之ヲ行フキハ通例先ヅ外直

其二 前轉法 (Vorlagerung)

筋ノ睫斷法ヲ行ヒ、而後初メ角膜ノ内縁ニ接シ結膜ヲ鉛直線一乃至一仙迷半切開シ、

圖三十二百第 圖四十二百第



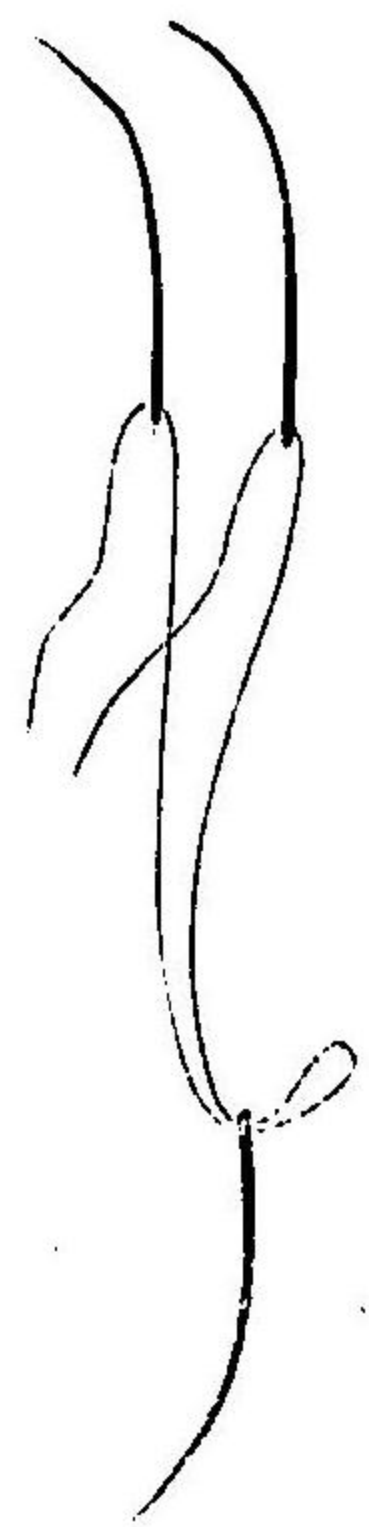
くりちエー氏之前轉法

其創口ヨリ剪刀ヲ挿入シ、之ヲ涙阜下迄基底ヨリ剝離シ、斜視鉤ヲ以テ睫ヲ出シ、第百二十三圖ノ如ク一本ノ絲ニ三個ノ針ヲ附ケ、其中央ノ針(ロ)ヲ筋ノ裏面ヨリ表面ニ貫キ之ヲ固定シ睫ヲ切斷シ尙周圍ヨリ能ク遊離セシメ、而後筋ノ切端ヲ縫合ス、之ヲナスニハ既ニ筋ニ貫スキタル針ヲ結膜創ノ内縁第百二十四圖ニヨリ五六密迷内方ニ於テ結膜ノ裏面ヨリ表面ニ通シ(ロ)之ヲ切り放ナシ二本ノ絲トナス(イ、ハ)而シ他ノ一針(イ)ヲ創口ヨリ結膜下ヲ經テ挿入シ、角膜上縁ヨリ三密迷上方、創口

斜視

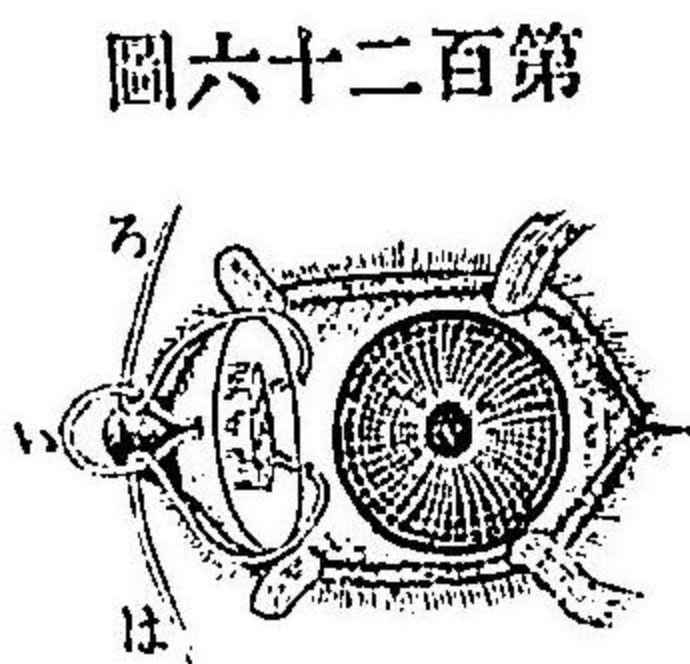
うエーべる氏  
之法

ノ外縁(ホ)ヨリ五六密迷外方ニ於テ表面ニ通シ、他針(ハ)ハ下方ニ於テ上方ノ關係ト同キ點ニ貫スキ、(イ)ハ(イ)ト結締シ、(ハ)ハ(ハ)ト結締スベシ



圖五十二百第

(第百二十五圖)此針ヲ筋ノ裏面ヨリ表面ニ貫スキ、更ニ結膜ヲ少シク内



圖六十二百第

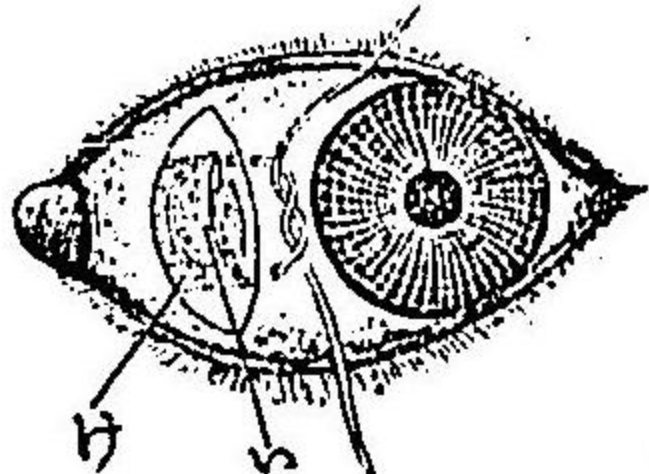
うエーベ  
る氏之前  
轉法

嘴ニ接シテ貫スキ係締(第百二十六圖)ヲ作り、筋ヲ切斷シ助手ヲシテ爰ニ固定セシメ、而後一針(ロ)ヲ創口ヨリ結膜下ヲ經テ角膜縁ヨリ三密迷上方ニ貫スキ、他ノ一針(ハ)ヲ下方ニ通シ、兩絲ヲ係締ニ通シ充分牽引シテ筋ノ切端ヲ角膜ニ接着セシメ、

なッしうす氏  
之法

係締ヨリ滑脱セザル様大ナル結節ヲ作り固定セリ  
をッさうす氏之法、角膜縁ヨリ五乃至六密迷離レ結膜ヲ鉛直線ニ一乃至一仙迷半切開シ、創口ヨリ剪刀ヲ入レ之ヲ筋及周圍ヨリ剝離シ、球頭斜視鉤ヲ睫ト鞏膜ノ間ニ挿入シ、兩端ニ針ヲ附タル絲ノ一端ヲ睫ノ上縁若クハ下縁ニ

圖七十二百第



なッしう  
す氏之前  
轉法

添テ裏面ヨリ表面ニ貫スキ、更ニ他縁ニ添テ之ヲ表面ヨリ裏面ニ通シ以テ筋ノ表面ニ係締(第百二十七圖)ヲ作ルベシ、次ニ睫ヲ切斷シ、角膜ノ方ニ附若スル結膜ヲ鞏膜ヨリ剝離シ、角膜ニ接シテ絲ノ兩端ヲ其裏面ヨリ表面ニ貫スキ、係締ニ頼テ筋ヲ結膜下ニ引附ケ締結シ、而後結膜創口ヲ縫合ス。○効力ノ尙ホ大ナランヲ欲スルハ、筋端ヲ少シク切除スベシ、筋ノ縫合ハ二十四時間ノ後除去シ、二三日間ハ兩眼壓抵帶ヲ持長シ安臥ヲ要ス、六日乃至七日ヲ經レハ施術眼ノ綳帶モ除去シ、瓣膜等ニ交ヘ、外出ヲ許シテ可ナリ

反對筋切斷ヲ  
兼タル前轉法  
ノ適應症

- 反對筋切斷ヲ兼タル前轉法ノ適應症
- (一) 五乃至六密迷ノ内轉運動ヲ失フタル續發性外斜視
- (二) 五乃至六密迷ノ運動力ヲ失フタル麻痺性斜視
- (三) 少シク内轉運動ヲ失フタル強度ノ外斜視

斜視

(四) 吾人屢々先天性内斜視ニ就テ經驗スルガ如キ内直筋結締組織變質ヲ起シ且外轉運動ヲ失フタル最モ強度ノ内斜視ニモ亦之ヲ行フアルモ、淚阜ノ陥没及著シキ筋ノ營爲不全ヲ作スアルガ故ニ注意スベシ○又斜視側ニ向テ少シク運動力ヲ失フタル内斜視ニ反對筋ヲ切斷セズシテのゝるす、どらゝパー氏等ノ法ノ如キ前轉法ヲ行フアルモ、増加法ヲ兼タル後轉法ニ若カズ○爾他尙ホ種々ノ變式アルモ實地上必要ノ者ニアラザルガ故ニ之ヲ略ス

### 第四章

#### 内直筋營爲不全、一名筋精疲勞 (Insufficienz)

*musculus recti interni oder musculus Asthenopie*

一般眼精疲勞 (Asthenopie) ト稱スル者ハ通例視力ニ異常ナクノ唯眼ヲ長ク使用スルニ當リ種々ノ困難ヲ來ス者ヲ云フ、而シテ或ハ網膜ノ知覺過敏ヨリ起リ或ハ調節ノ疲勞若クハ内直筋、營爲不全ニ起因シ、其原因ノ異ナルニ從テ網膜疲勞 (retinale Asthenopie)、調節疲勞 (accommodative A.) 及筋精疲勞 (muscular A.)

筋精疲勞

眼

ト其類ヲ分ツ、而シテ調節疲勞ニ就テハ既ニ遠視眼ノ條下ニ記載シ、網膜疲勞ハ弱視ノ條下ニ於テ陳述スベキヲ以テ、茲ニハ只筋精疲勞ノミヲ記載スベシ

筋精疲勞ノ症

### 症狀

患者近業ヲナス時ハ暫時ニノ眼内壓重ヲ感シ、眼窩上縁ニ沿テ疼痛ヲ覺ヘ、文字、行距重復シ、視力朦朧トナリ長ク持續スル克ハズ、其果ノ筋精疲勞ナルヤ否ヤヲ確診セント欲セバ兩眼視軸ヲ集束シ得ル距離ヲ檢スベシ、要スルニ三十五乃至四十仙迷ノ距離ニ於テ患者ヲシテ兩眼ヲ以テ指頭ヲ着目セシメ漸々之ヲ近接スレバ、果シテ筋ノ營爲不全アルキハ指頭一定ノ距離ニ達スレバ只一眼ノミ着目シ、他眼ハ通例二三回搖擲狀ノ振戦ヲナシ

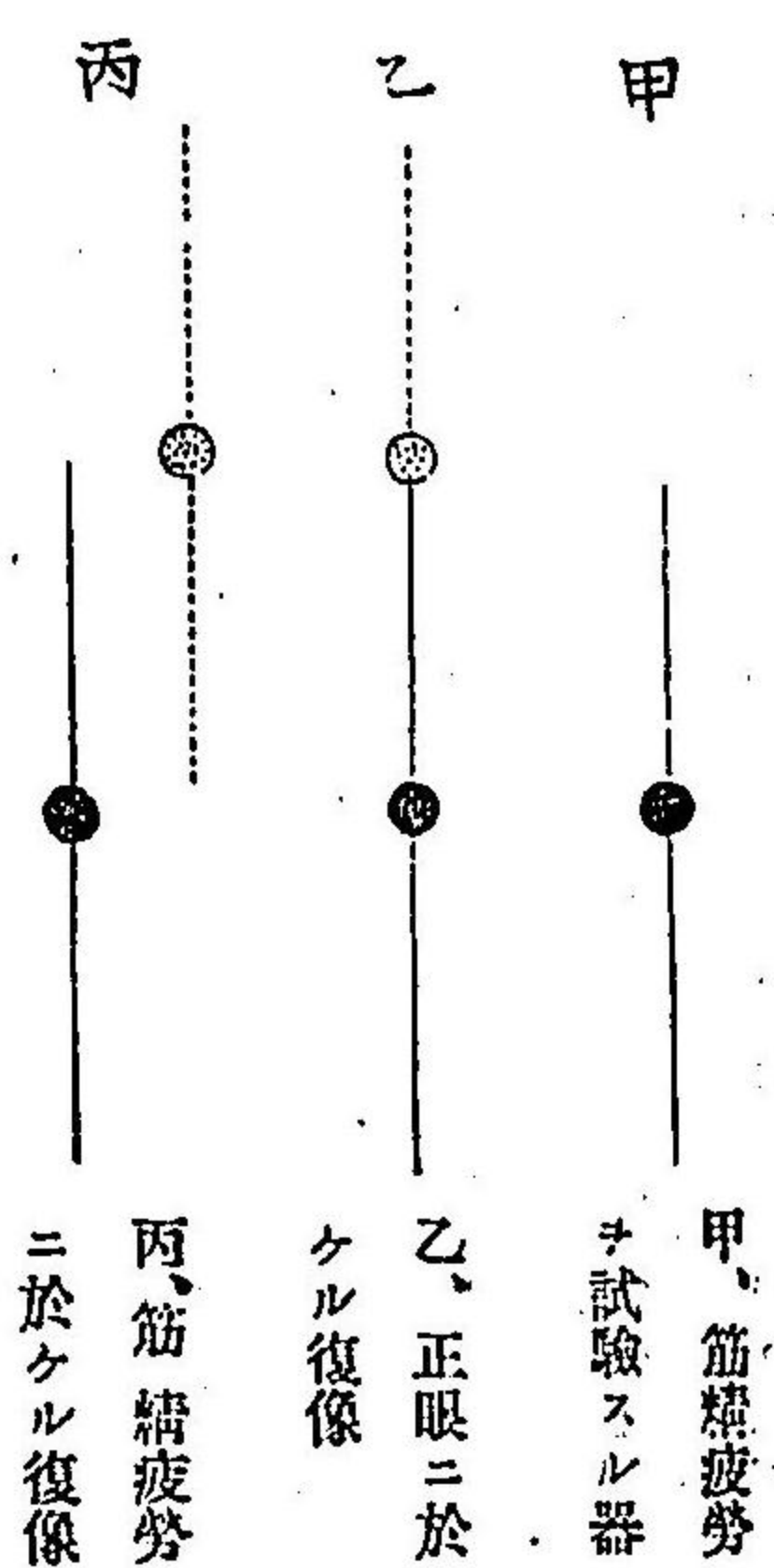
筋精疲勞之檢査法

テ爾後其位置ニ静止スルカ或ハ漸々若クハ突然外方ニ斜視スル者ナリ初メ指頭ヲ十五乃至二十仙迷ノ距離ニ於テ示スキハ視軸直ニ散在シ、若シ然ラザルキハ試ミニ手ヲ以テ一眼ヲ掩フキハ手下ノ眼ハ直ニ外方ニ轉ズ、之ヲ尙ホ精細ニ檢セント欲スルキハ第百二十八圖甲ノ如ク白紙ニ一直線ヲ引キ其中央ニ黑點ヲ附ケ患者ヲシテ之ヲ二十乃至二十五仙迷ノ距離ニ於テ兩眼ヲ以テ凝視セシムベシ、而シテ一眼ノ前ニ十八度乃至二十度ノ三稜

筋精疲勞

二百四十一

第百二十八圖



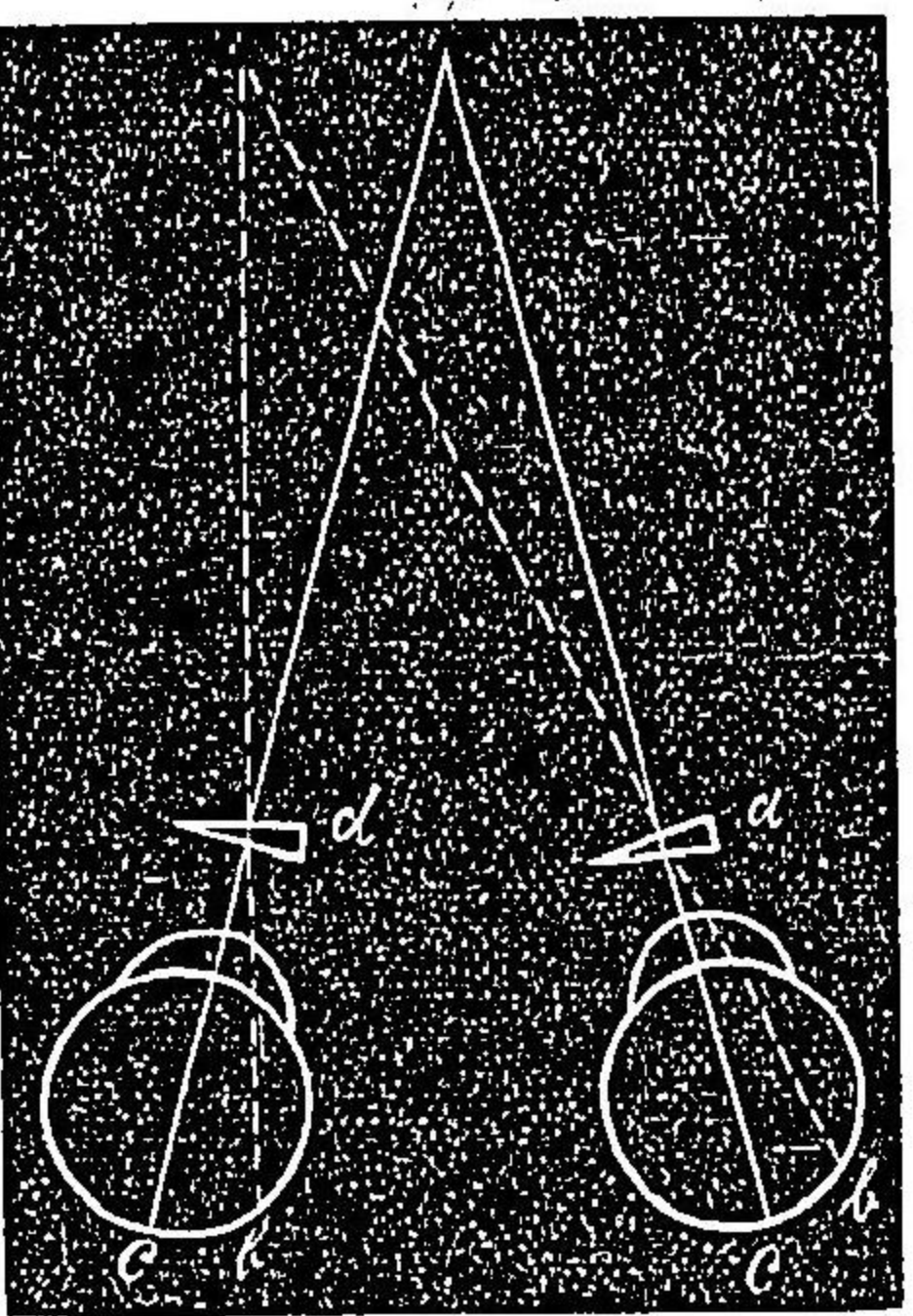
鏡ヲ基底ナ、上方若シハ下方ニ向ケ保ツキハ必ズ上下ニ隔離スル復像ヲ生ズベシ、而シテ兩點全ク直線内ニ重復スルキハ(乙)筋力全ク相平均スル者ナリ、然レハ筋精疲勞アルキハ(丙)上

筋力之試驗法

下ニ別レルノミナラズ尙ホ多少左右ニ離レル者ナリ(丙)是レ全ク内直筋ノ疲勞ニ由テ筋力ノ平均ヲ失ヒ外斜視ヲ起スニ因ル、故ニ又復像ハ交叉性ナリ、之ヲ直線内ニ重復セシムベキ基底ナ内方ニ向ケタル三稜鏡ノ度ヲ以テ筋精疲勞ノ度ノ標準トナス、場合ニ依テハ只黒點ノミヲ以テ檢スルヲ可トスルコアリ

斯ノ如ク營爲不全ノ有無ヲ證明シ且其強弱ヲ檢定シ而後尙ホ内直筋及外直筋ノ力ヲ測定スベシ、而シテ「プリスマ」ノ稜を内方ニ向ケルキハ(第百二十九圖a)光線ヲ外方(b)ニ誘導シ交叉性ノ復視ヲ起スガ故ニ、之ヲ合體セシムルニハ内直筋ノ力ヲ以テ眼球ヲ内轉セシメ着目點(c)ヲbノ位置ニ來サシムル

第百二十九圖



筋力試驗之圖

三迷ノ距離ニ於テ燭火ヲ點シ、兩眼ヲ以テ之ヲ着目セシメ、先ツ弱度ノ「プリスマ」ヲ取り基底ヲ外方ニ向ケ一眼ニ掛ケ、段々強キ「プリスマ」ヲ試ミ尙ホ燭火ヲ單視シ得ル最強度ノ「プリスマ」ヲ撰定スベシ、假令ハ十五度ノ「プリスマ」ヲ以テ尙ホ兩眼單視スルキハ、其内直筋ノ力ハ則チ十五度ナリ○外直筋ハ無論基底ナ内方ニ向ケタル「プリスマ」(d)ヲ以テ檢ス

本病ハ凡テノ非正視眼ニ發スルコアルベシ、而シテ近視眼ニ在テハ常ニ物體ノ近接ヲ要スルガ故ニ特ニ困難ヲ感シ且後葡萄腫ノ發生若シハ其進行ヲ促ス、故ニ大ニ注意セザルベカラズ

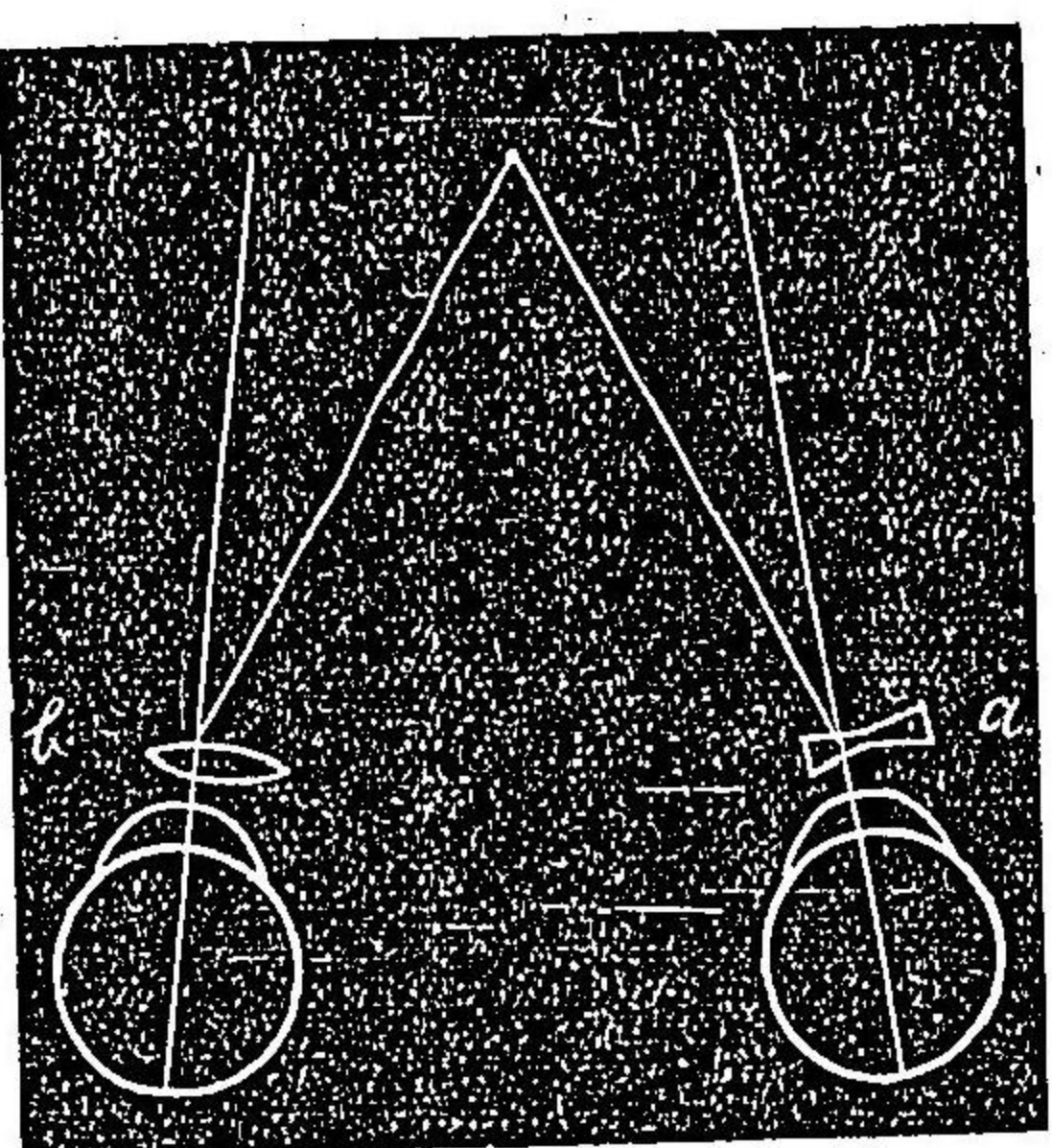
筋精疲勞

筋精疲勞之療法

### 療法

近視眼ニ在テハ其矯正法ノ制規内ニ於テ眼鏡ヲ與フルキハ上記ノ障害ヲ防グヲ得、如何トナレハ凹面鏡ハ遠點ヲ遠ザク以テ視軸集束ノ必要ヲ減ズレバナリ、而シテ可及的眼鏡ヲ左右ニ隔離シ其内半部ヨリ光線ヲ通過セシムレバ一層視軸集束ノ勞ヲ減ズ何トナレハ凹面鏡ハ元其稜角互ニ接觸スル二個ノ「プリスマ」ヨリ成

第三百十三圖



光線  
凹面鏡  
内半部  
外半部  
光線  
凸面鏡  
外半部  
内半部

立テ、其内半部(第百三十圖a)ハ則チ基底ヲ内方ニ向ケタル「プリスマ」ト同一ニシテ光線ヲ内方ニ誘導スレバナリ、凸面ヲ要スルキハ可及的左右接近シ光線ヲシテ其外半部ヨリ射入セシムベシ(b)之基底ヲ内方ニ向ケタル「プリスマ」

ニ等シケレバナリ、此ノ療法ハ眼ノ過勞ニ由テ一時内直筋ノ疲勞ヲ起ス場合ニ用ウル者ニシテ、既成ノ筋精疲勞ニ在テハ直ニ「プリスマ」ヲ用ウルカ或ハ尙ホ凹面若クハ凸面鏡ヲ混用セザレバ到底其効ヲ奏セズ○十度以上ノ「プ

リスマ」ハ其分色作用ト光線ヲ反射シ或ハ物體ヲ亂大(Verzerrung)セシムルトニ由テ視力ヲ障害スルガ故ニ「プリスマ」作用ヲ兩眼ニ配分シ、假令ハ十二度ノ營爲不全アルキハ六度ノ「プリスマ」ヲ左右ニ與フベシ

近視眼ニノ營爲不全ヲ有スルキハ近視矯正法ニ於ケル制規ノ許ス限ハ三稜鏡ト共ニ凹面鏡ヲ近用ニ與ヘテ可ナリ、例ヘバ五Dノ近視ニシテ二十五仙迷ニ於テ十度、三十三仙迷ニ於テ三度ノ營爲不全アリトスレバ三十三仙迷ニ要スル眼鏡ハ凹面二D (5D -  $\frac{1}{0.33} = 2D$ ) ト基底ヲ内方ニ向ケタル三度ノ「プリスマ」ナリ○遠視眼ニ於テモ亦凸面鏡ヲ混用スルヲ得、然レモ是等ノ

療法ハ皆姑息ノ方法ニシテ、其根治法ハ三稜鏡ヲ以テ漸々筋力ヲ恢復セシムルカ或ハ外科的ノ手術ヲ行フニアリ

夫レ基底ヲ外方ニ向ケタル弱度ノ三稜鏡ヲ遠見ニ際シテ用ウルキハ光線ヲ外方ニ誘導シ復視ヲ生ズルガ故ニ、之ヲ合體セシメノガタメニ適度ノ内直筋收縮ヲ喚起シ、漸々「プリスマ」ヲ増度スルキハ從テ筋力旺盛シ、遂ニ不全作用消失スルヲアリ、然レモ本法ハ多クノ時日ヲ要シ且輕度ノ營爲不全ニ非ザレバ充分ノ効ヲ奏セズ、加之近視眼ノ如キハ極テ輕度ノ筋收縮ト雖モ

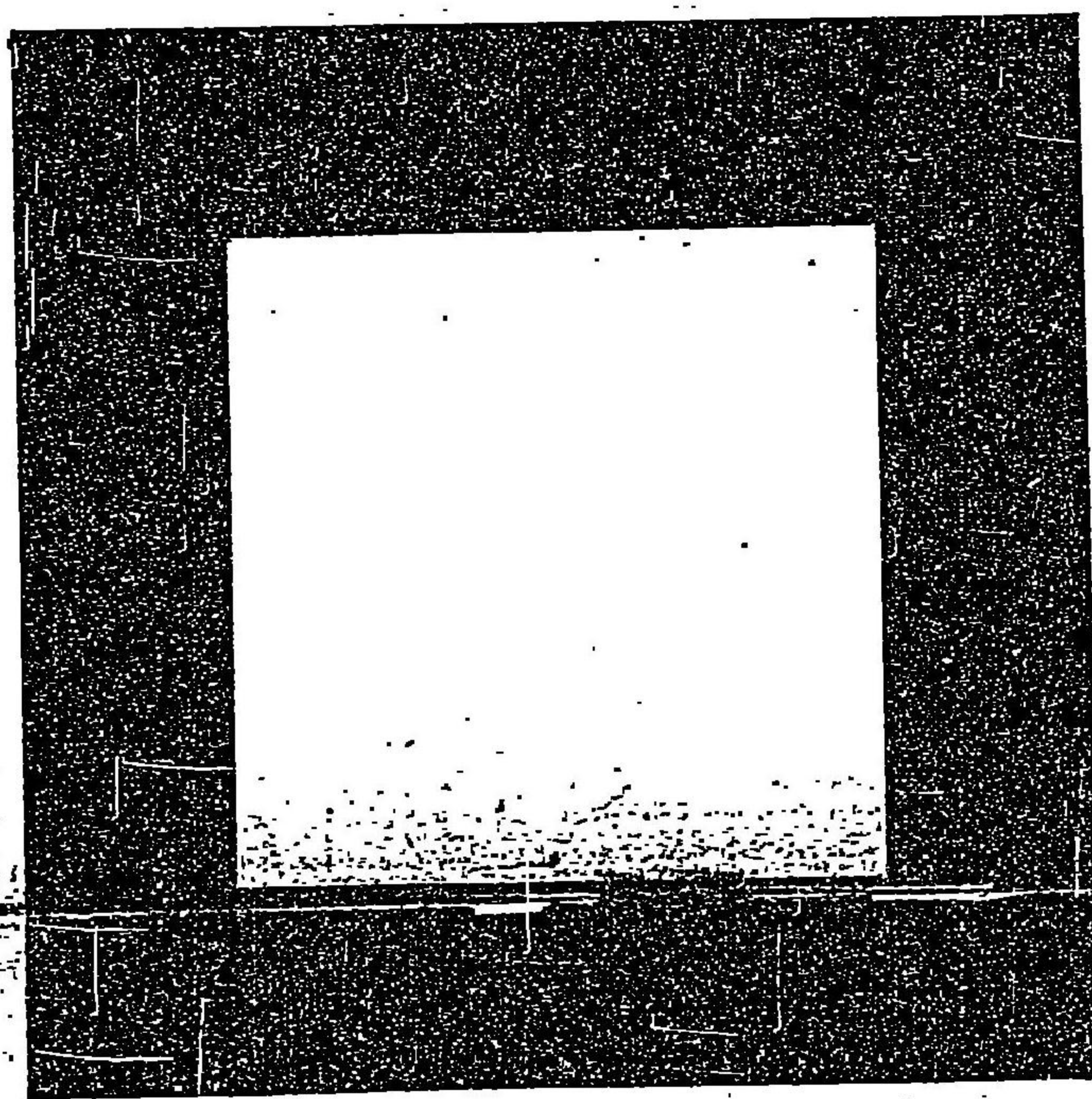
大ニ之ヲ脈フガ故ニ却テ危険ナキヲ保シ難シ  
 唯一ノ根治法ハ外直筋ヲ切斷シ以テ其外轉力ヲ減殺スルニアリ、然レ此  
 ノ手術ハ内斜視ヲ繼發スルノ虞ナキニ非ズンバ施スベカラズ、其證明ハ外  
 轉力ヲ精細ニ檢定スルニアリ、外轉力強大ナルキハ遠見ニ際シテモ既ニ外  
 斜視ヲ呈スルカ或ハ「プリスマ」ニ依テ之ヲ起サシムルヲ得○該外斜視ハ外  
 直筋ノ切斷ニ依テ更ニ内斜視ヲ繼發スルノ憂ナク除去スルヲ得、手術ノ成  
 績ハ外轉力ノ強大ナル程善良ナリ、故ニ外轉力ヲ代表スル「プリスマ」ハ手術  
 ニ由テ得ル矯正力ノ度ヲ示ス、而シテ通例「プリスマ」千度ノ外轉力ヲ猶ホ睫斷  
 法ヲ行ヒ得ベキ最下ノ極度トナス  
 前陳ノ目的ヲ以テ外直筋ノ睫斷法ヲ行フニ當テハ、其成績ノ斟酌ニ就テ注  
 意周到ナラザルベカラズ、故ニ手術直後ノ成績檢査ヲ決ノ忽ニスベカラス、  
 而シテ十分ノ結果ヲ得ント欲セバ手術後二乃至三迷ノ距離ニ在ル蠟燭ヲ着  
 目セシムレバ、十度ノ「プリスマ」ニ由テ矯正セラル、所ノ同側性ノ復視ヲ起  
 サマルベカラズ、是レ則チ一乃至二密迷ノ内斜視ニ相當スル者ニシテ、手術後  
 一周間ノ中ニハ切端ノ瘰痕收縮ニ由テ消失スル者ナリ○上記ノ距離ニ於

テ蠟燭ヲ手術セザル眼ノ方へ十五度乃至二十度偏依スルキハ内斜視ハ全  
 シ消失セザルベカラズ、此位置ニ於テ「プリスマ」ヲ基底ヲ上方若クハ下方ニ  
 向ケ一眼ニ掛ルキハ復像ハ全ク鉛直線ニ重複スベシ  
 上記ノ試験ニ依テ手術ノ結果不充ナルヲ認ムルキハ切斷シタル睫周圍  
 ノ結締織ヲ能ク剝離シ、斜視眼鏡ヲ以テ眼球ヲ内轉ノ位置ニ有タシメ或ハ  
 他日他眼ノ外直筋切斷ニ依テ成績ノ不足ヲ補充スベシ○之ニ反シテ成績豫  
 定ヨリ超過スルキハ結膜ヲ縫合シ且眼球ヲ外方へ向ケ久シク固定スベシ  
 外直筋ヲ切斷セズシテ内直筋ノ前轉法ヲ行フモ可ナルモ、其成績ノ過不及  
 ナ矯正スルニ外直筋後轉法ヨリ困難ナリ  
 前陳ノ手術ヲ施スキハ營爲不全多クハ充分矯正セラル、ト雖モ其手術ニ  
 依テ矯正シ得ベキ程度ヲ超ヘタル者ニ在テハ手術後尙ホ多少ノ營爲不全  
 ナ殘スガ故ニ單ニ「プリスマ」若クハ尙ホ球面眼鏡ノ併用ヲ要ス

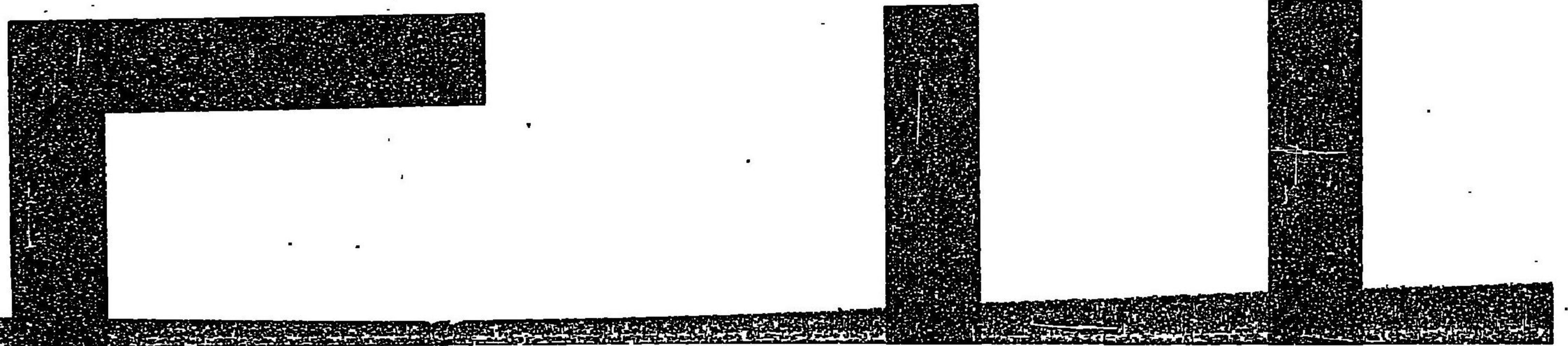
最新眼科全書第一卷 終

# スネル氏視力表

六 十 号

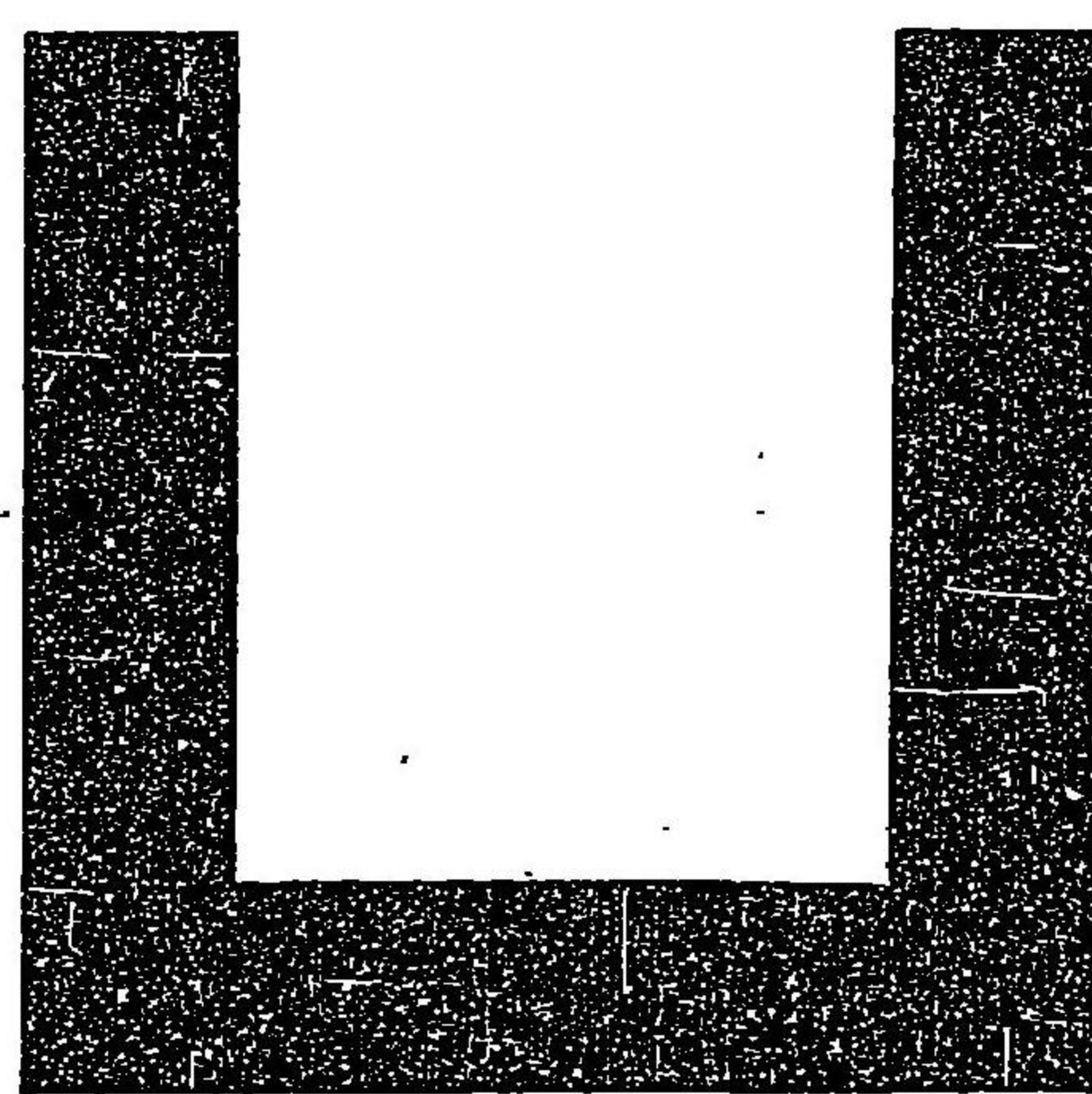
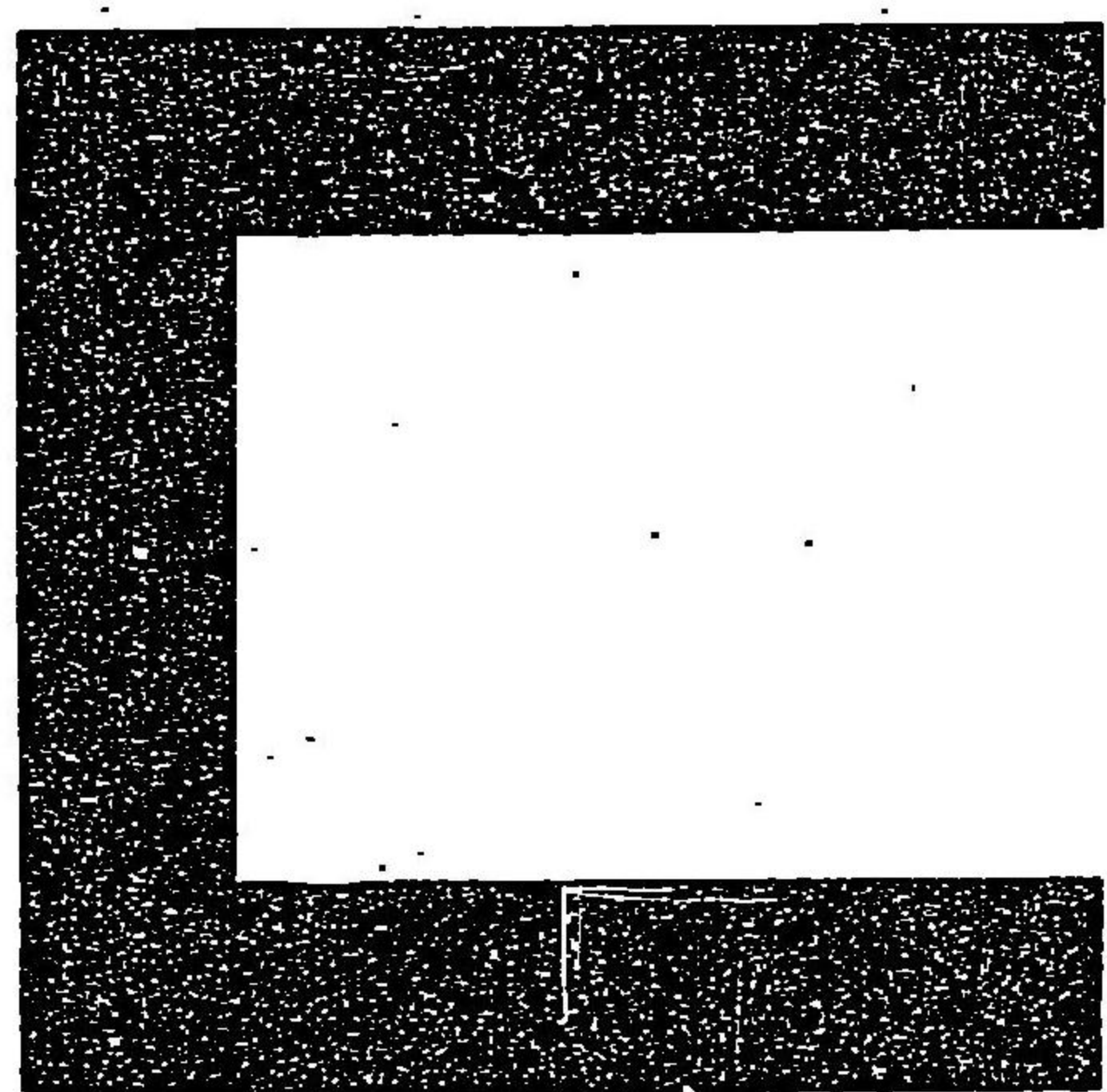


四 十 号

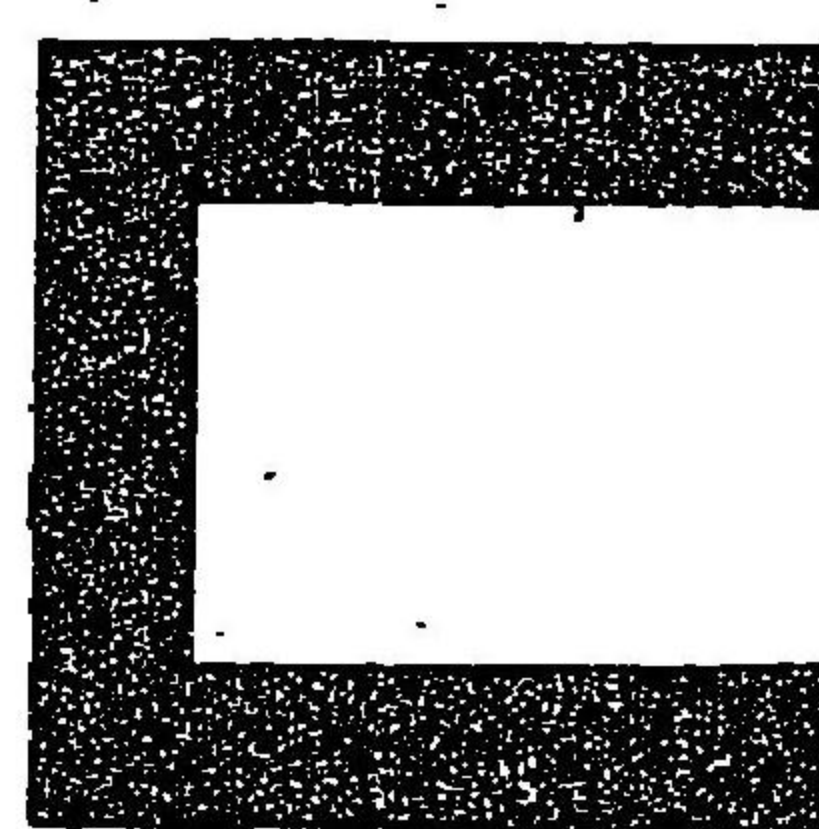
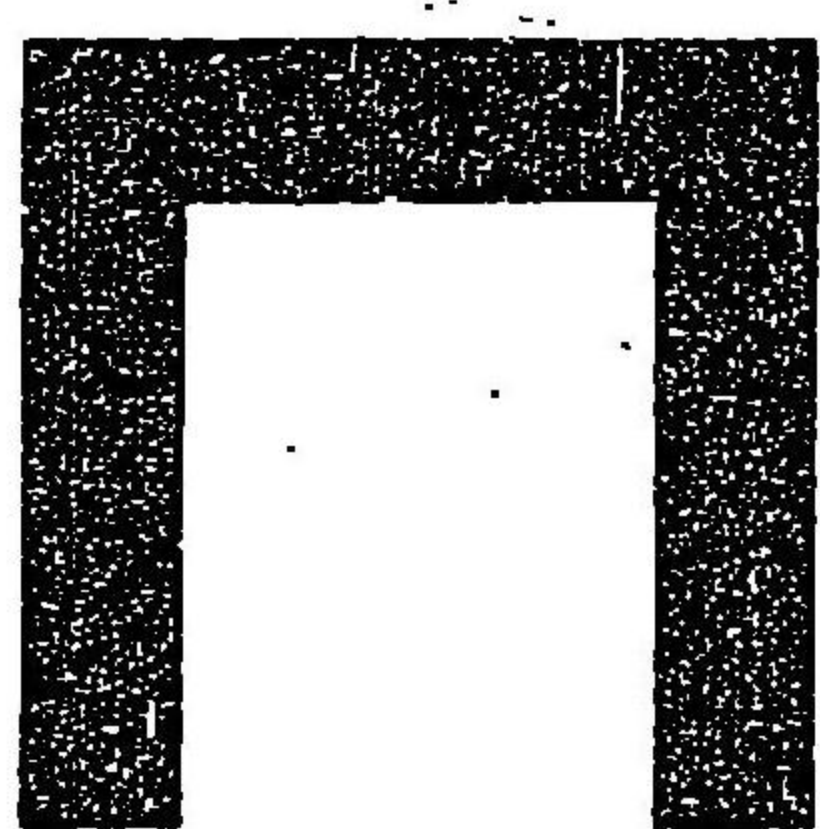
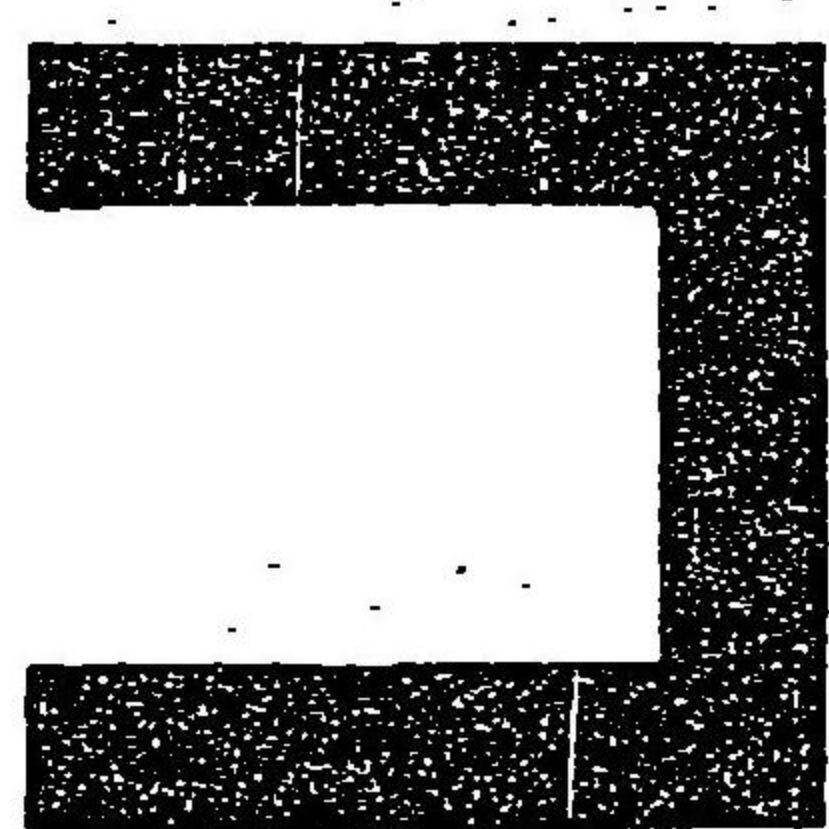




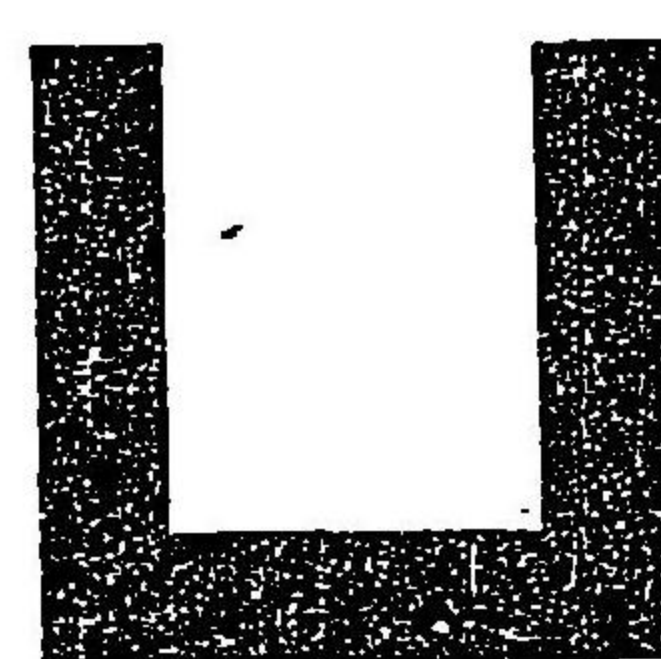
号 十 四



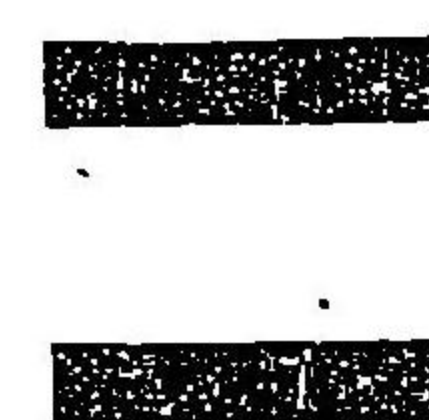
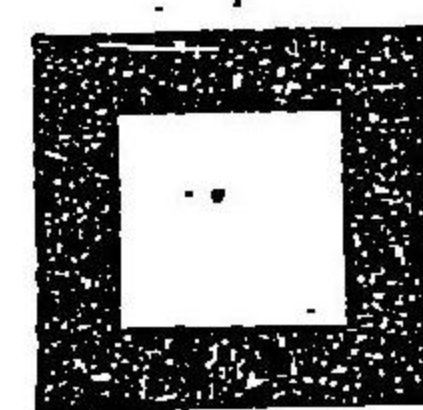
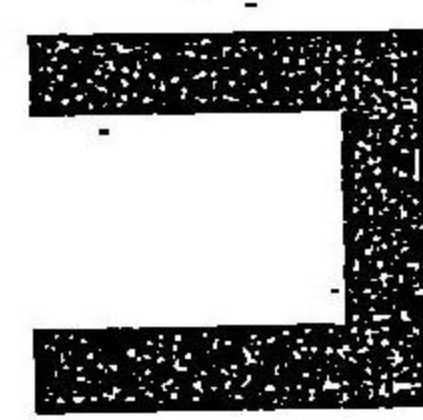
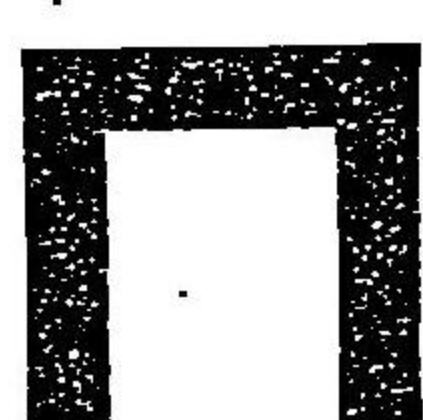
号 四 十 二



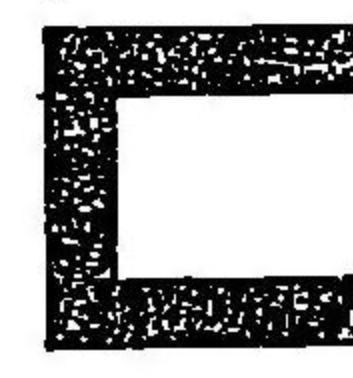
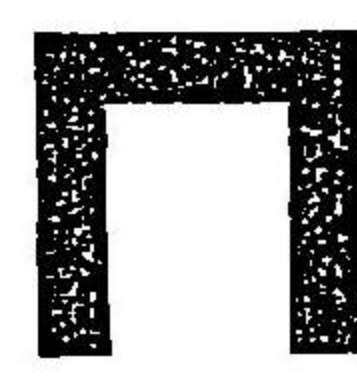
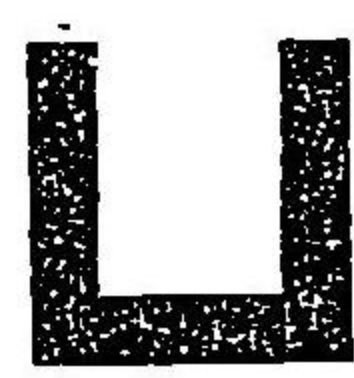
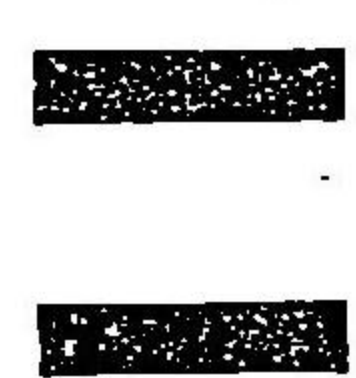
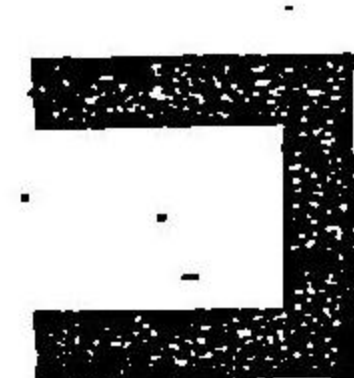
号 八 十



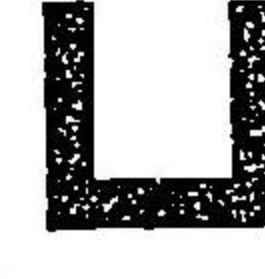
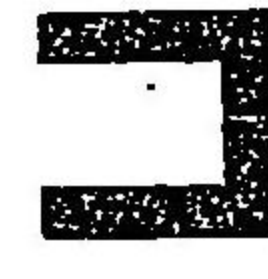
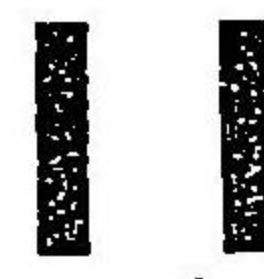
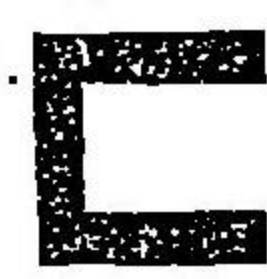
号 二 十



号 九



号 六



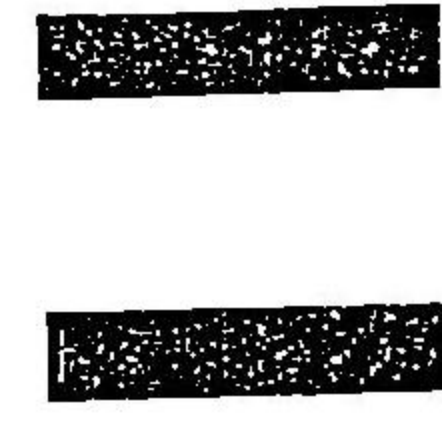
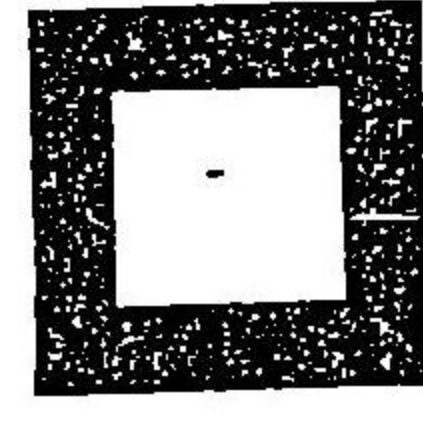
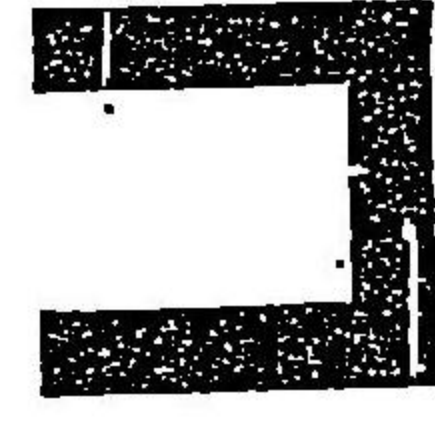
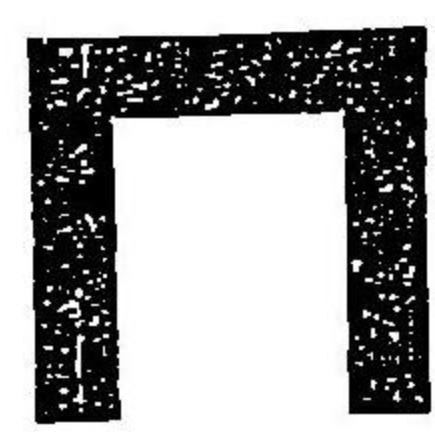
号 四



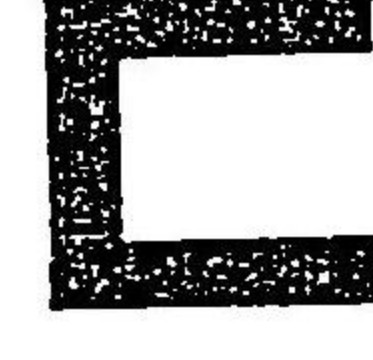
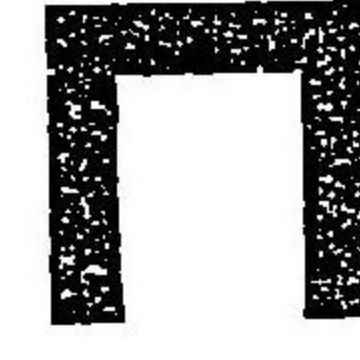
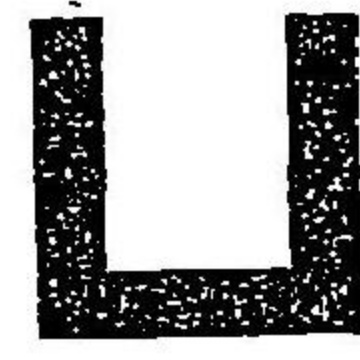
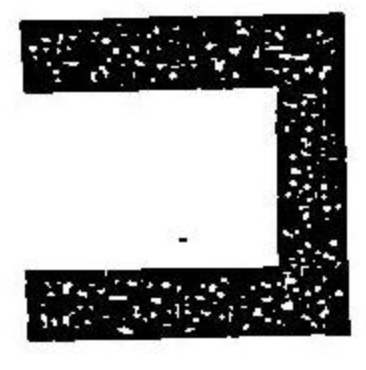
号 二

号 三

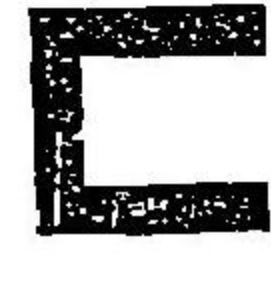
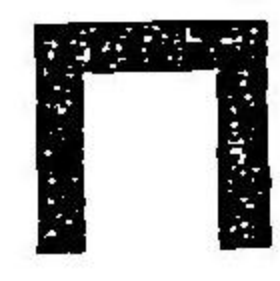
号 二 十



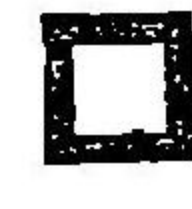
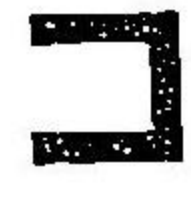
号 九



号 六



号 四

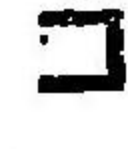


号

二

号

三



正 誤

| 頁   | 行   | 正                             | 誤                        |
|-----|-----|-------------------------------|--------------------------|
| 4   | 12  | 單 = 片手ノ <sup>〇</sup> 拇指       | 單 = 拇指                   |
| 6   | 13  | Desmarres <sup>〇</sup>        | Dvsmarres <sup>〇</sup>   |
| 14  | 6-7 | 徹                             | 轍                        |
| 17  | 14  | 測                             | 側                        |
| 31  | 2   | 4 <sup>2</sup>                | 4 <sub>2</sub>           |
| 38  | 13  | 染色シタル毛絲                       | 染色シタル <sup>〇</sup> モ毛絲   |
| 49  | 12  | 浸                             | 侵                        |
| 53  | 13  | 眼 <sup>〇</sup> 臉結膜ノ表面         | 眼 <sup>〇</sup> 臉ノ表面      |
| 54  | 1   | Druckverband <sup>〇</sup>     | Druckverand <sup>〇</sup> |
| 88  | 13  | 光線ハ遠視眼ニ在 <sup>〇</sup> テハ之ヲ    | 光線ハ之ヲ                    |
| 119 | 1   | 玄(玄+ <sup>〇</sup> さ) = け(玄+さ) | 玄(玄+さ)け(玄+さ)             |
| 119 | 14  | 面                             | 百                        |
| 131 | 2   | 遠視ヲ無限 <sup>〇</sup>            | 遠視 無限                    |
| 137 | 14  | 燒點 <sup>〇</sup> ヨリ            | 燒點ヨリ                     |
| 160 | 14  | ヲ                             | テ                        |
| 176 | 2   | 常                             | 帶                        |
| 190 | 1   | 筋                             | 眼                        |
| 241 | 15  | 眼                             | 眼                        |
| 238 |     | 第百二十六圖ニ於ケル絲ノ掛所本文ト異ナルハ彫刻者ノ過失ナリ |                          |

明治二十八年四月二日印刷  
全 年四月五日發行

定價金九拾錢

著述兼發行者

高安右人

石川縣加賀國金澤市  
味噌縣町十七番地

印刷者

松澤玳三

東京市麴町區下六番町  
十七番地

發兌書肆

南江堂

東京市本郷區湯島切通  
坂町八番地



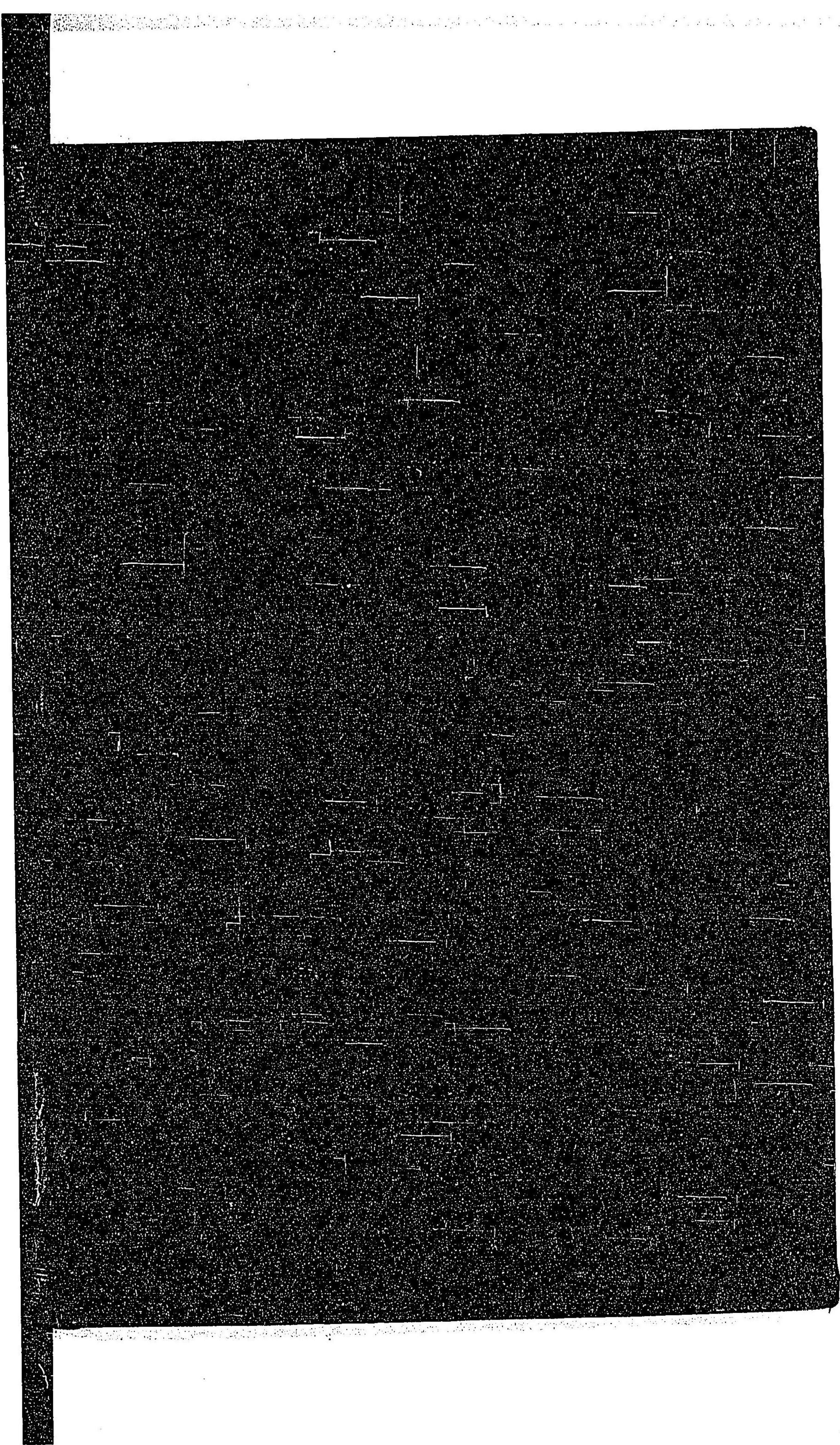
印刷所(電話三六九番)同勞舍活版所

東京市麴町區下六番町  
十七番地

肆 書 捌 賣

|               |    |     |
|---------------|----|-----|
| 東京市日本橋區馬喰町二丁目 | 島  | 利助  |
| 全市日本橋區通三丁目    | 丸善 | 書店  |
| 全全 春木町貳丁目     | 半田 | 屋書店 |
| 全全 湯島龍岡町      | 吐鳳 | 堂書店 |
| 全全 區春木町二丁目    | 島村 | 支店  |
| 全全 區春木町三丁目    | 南江 | 堂支店 |
| 大坂市南區心齋橋筋壹丁目  | 松村 | 九兵衛 |
| 名古屋市京町壹丁目     | 野崎 | 覺次郎 |
| 岡山市石關町        | 渡邊 | 千代治 |
| 福岡市博多中島町      | 積善 | 館支店 |
| 仙臺市大町四丁目      | 木村 | 文助  |

55  
11



55  
11

060064-001-5

55-11

最新眼科全書 第1-3卷

高安 右人/著

M28-30

CBJ-0131

